慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	いわゆる軽蔑的接尾辞 –ei / –[e]lei / –[e]reiによる即席造語
Sub Title	Über pejorative Substantivsuffixe -ei / -[e]lei / -[e]rei
Author	岩﨑, 英二郎(Iwasaki, Eijiro)
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	2013
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.30 (2013. 3) ,p.1- 113
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20130331-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

いわゆる軽蔑的接尾辞 – ei / –[e]lei / –[e]rei による即席造語

岩 崎 英 二 郎

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　造語上のタイプ
Ⅲ　– ei / –[e]lei / –[e]rei のもつ意味のニュアンス
Ⅳ　具体例
Ⅴ　おわりに

Ⅰ　はじめに

もうずいぶんむかしのことになるが、筆者がアレクサンダー・フォン・フンボルト財団給費生として 1955 年の秋に初めてドイツ（当時は西ドイツ）のボンに行ったとき、あのころはたしか日本公使で、ケルンの日本文化会館創設の重責にあった大賀小四郎さんに連れられて、フンボルト財団の事務局を訪れたことがある。敗戦からまだ十年、あちこちに戦災による廃墟が残っていたボンのこと、まだすべての家屋にエレベーターなどあろうはずもなく、ドイツ語に堪能な大賀さんが、「Ach, diese Steigerei!　ああ、しんど」（氏は関西の御出身）とドイツ語と日本語のちゃんぽんで言いながら、いかにもしんどそうに階段を上ってゆかれる姿がいまでも目に浮かぶ。いまにして思えば、筆者が接尾辞 –rei の存在を自覚的に意識したのはこれが最初だった。

(1) *Die ewige Warterei* macht mich wahnsinnig!
　いつまでも待たせやがって、まったくいらいらする。

これはたまたまインターネットで目にした文に筆者なりの訳をつけたものだが、Steigerei にせよ、Warterei にせよ、動詞 steigen や warten からその場で作られたいわゆる即席造語（Augenblicksbildung）で、同様に betrügen から Betrügerei、faulenzen から Faulenzerei, quälen から Quälerei、raufen から Rauferei、schimpfen から Schimpferei 等々、その場の必要に応じて、即席でいくらでも作ることができる。それでは接尾辞 – ei のほうはどうだろうか。

(2) „...Wenn man auf so bescheidenem Fuße lebt wie wir. Das gibt dann immer Meinungsverschiedenheiten und Unliebsamkeiten. Aber wenn Therese nicht, wer dann? Von Manon würde ich mich nicht gern trennen."

„Sollst du auch nicht, Albertine. Manon ist Nesthäkchen und muß dir bleiben. Meine Frau hat sich, ich wiederhole, deine Zustimmung vorausgesetzt, für Sophie entschieden. Die hat ihr sehr gefallen, als sie sie hier sah, und ihre Briefe haben ihr gefallen, auch die, die sie an Therese schrieb. Alles so verständig. Und meine Frau hat eine Vorliebe für das Verständige, nur keine Flausen und Redensarten und aufgesteifte Sachen. Und *Mogeleien* sind ihr nun schon von Grund aus zuwider."

(Theodor Fontane, Die Poggenpuhls, 9.Kapitel)

『…何しろ私共のやうに切詰めた生活をしてゐますと、さうは参りません。それなのですから、何時もそれがよい、これが悪いで口争ひはしますし、何だか冷い思ひをしたりしますのです。でもテレーゼでないとすれば、それなら誰にしたものですか。マノンと別れるのは、私も出來ることならしたくはないのですが。』

『そりゃマノンと別れるのはいかん。何しろあの子は末っ子の事だから、手離せないだらう、あんたの手許におかなけりゃいかん、實はわしの家内はな、又繰返して言うやうだが、あんたがこの事を承知して下さるとしての話だがな、ゾフィーにして貰ひたいといふんぢゃ。この前、此處であの子に會った時、すっかり家内の氣に入ったし、それにあの子の手紙も氣に入った次第ぢゃ。テレーゼ宛に出した手紙まで

もさうなのでな。何もかも仲々分別があるといふんぢゃ。何しろわしの家内は分別のある事が本當にとび抜けて好きなんだよ。もっともおしゃべりだの、御世辞たらたらだの、こちこちにしゃちほこばったのなんかは別だが。それにインチキ、ごまかしって奴はもう本當に心の底から大嫌ひなんぢゃよ。』

（テオドール・フォンターネ、ポッゲンプール家の人々、第九章、
佐藤新一訳）

最後の Und *Mogeleien* sind ihr nun schon von Grund aus zuwider. を佐藤新一氏は「それにインチキ、ごまかしって奴はもう本當に心の底から大嫌ひなんぢゃよ」と訳しておられるが、「インチキ、ごまかしって奴」と見事な日本語に移し替えられた Mogeleien は、動詞 mogeln から作られた即席造語 Mogelei の複数形。mogeln と同様、betteln、freveln、kitzeln、spitzeln、zappeln 等々、– ln で終わる動詞の数はけっこう多いが、それらがすべて Bettelei、Frevelei、Kitzelei、Spitzelei、Zappelei のように必要に応じて名詞化されることも知っておいていただきたい。すなわち Bettelei や Frevelei の場合には、語幹 bettel-、frevel- に接尾辞–ei が付けられたものである。

Ⅱ　造語上のタイプ

前項「はじめに」で Steigerei、Warterei、Mogelei、Spitzelei 等々の例をお目にかけたが、これらはいずれも動詞の語幹に接尾辞 –[e]rei または –ei を付けたものであった。それでは次に挙げる (3) の場合はどうだろうか。

(3) Eure Idee will noch nicht die meinige werden, daß ich mit dem Gesandten nach *** gehen soll. Ich liebe die Subordination nicht sehr, und wir wissen alle, daß der Mann noch dazu ein widriger Mensch ist. Meine Mutter möchte mich gern in Aktivität haben, sagst du, das hat mich zu lachen gemacht. Bin ich jetzt nicht auch aktiv, und ist's im Grunde nicht einerlei, ob ich Erbsen zähle oder Linsen? *Alles in der Welt läuft doch auf eine Lumperei hinaus*, und ein Mensch, der um anderer willen, ohne daß es seine eigene Leidenschaft, sein eigenes Bedürfnis ist, sich um Geld oder Ehre oder sonst was abarbeitet,

ist immer ein Tor.

(Goethe, Die Leiden des jungen Werther, 1.Buch, Den 20. Julius)

公使と一緒に私も***に赴任するがよいという君たちの案だが、私はまだその氣にはなれない。人に隷属することはありがたくないし、おまけに公使がいやな奴だということは、承知のことだ。私の母が私に社會的活動をさせたがっている、という君の仰せだが、これには思わず笑った。今だって私は活動しているじゃないかね？ 豌豆をかぞえようが、隠元豆をかぞえようが、根本には同じじゃないか？ 世の中のことは、ついにはすべて愚劣の一語に歸着する。それが自分自身の情熱でもなく、自分自身の欲求でもないのに、ただ金や名譽やそのほかのもののために、あくせく働きすごす人間は、所詮は愚者だよ。

（ゲーテ、若きヱルテルの悩み、第一巻、七月二十日、竹山道雄訳）

大使といっしょにぼくを***へ行かせようとするきみたちの考えには、まだぼくは賛同しかねる。ひとに使われることをぼくはあまり好まないのだ。そのうえ、あの人間がいやなやつだということは、ぼくたち全部のものが知っていることだ。ぼくが働くことをぼくの母がのぞんでいるときみは言うが、これにはぼくは笑ってしまった。いまだってもぼくは働いているじゃないか？ えんどうをかぞえようが、いんげんをかぞえようが、けっきょく同じことじゃないか？ 世のなかのことはなんでも、せんじつめればくだらない。自分自身の情熱、自分自身の欲求でもないのに、他人のため、金や名誉やそのほかのもののために、あくせく仕事をするやつは、いつだってもばかものだ。

（ゲーテ、若きヴェルテルの悩み、第一巻、七月二十日、国松孝二訳）

Alles in der Welt läuft doch auf eine Lumperei hinaus. を竹山道雄氏は「世の中のことは、ついにはすべて愚劣の一語に歸着する」、国松孝二氏は「世のなかのことはなんでも、せんじつめればくだらない」と訳しておられるが、この Lumperei とは何だろうか。lumpen という動詞も存在するから、その動詞からの即席造語と考えられられないこともないが、語源的にはどうやら Lump（ならず者）が正解らしい。つまり Lumperei は名詞 Lump からの即席造語ということになる（Hermann Paul: Deutsches Wörterbuch,

9.Auflage, S.623）。

Lump と言えば、「ルンペン」という日本語を御存知だろうか。いまでは「浮浪者」「ホームレス」などという言葉が定着してしまったから、若い人たちは知らないだろうが、戦前はぼろをまとったルンペンが場末をうろついていたものだ。日本語「ルンペン」の語源ももちろんドイツ語のLumpである。

名詞からの即席造語をもう一つお目にかけよう。

(4) „[...] Aber Du hältst nicht Wort, Reinhard. Du hast keine Märchen geschickt. Ich habe Dich oft bei Deiner Mutter verklagt; sie sagt dann immer, *Du habest jetzt mehr zu tun als solche Kindereien*. Ich glaub es aber nicht; es ist wohl anders."

(Theodor Storm, Immensee, Da stand das Kind am Wege)

「けれどもあなたはどうして約束をお守り下さらないのでございましょう。童話をちっとも送って下さらないのですもの。お母様にも幾度かそのことを申上げたのでございますが、お母様はあなたがお忙しくて、そんな子供じみたことしている暇がないのだといつもおっしゃいます。でもそうでございましょうか。ほかに何かわけがおありなのでございましょう」

（テーオドール・シュトルム、みずうみ、道のべに乙女子（おとめご）のいて、

高橋義孝訳）

ところでラインハルト、あなた、約束守ってないわ。お話ひとつも送ってこないじゃない。あなたのお母様にしょっちゅうそのことを言うんだけど、あなたは今とても忙しくて、そんな子供っぽいことしてる暇がないのよ、っておっしゃるばかり。でも、私そうは思わない。たぶん何か他のわけがあるのでしょう。

（テーオドール・シュトルム、みずうみ、

そのときあの子が路傍にいて、加藤丈雄訳）

Du habest jetzt mehr zu tun als solche Kindereien. の高橋義孝訳は「あなたがお忙しくて、そんな子供じみたことしている暇がないのだ」、加藤丈雄

訳では「あなたは今とても忙しくて、そんな子供っぽいことしてる暇がないのよ」となっているが、このKindereien が名詞 Kind からの即席造語 Kinderei の複数形であることは、改めて説明するまでもないだろう。

筆者がSauerei という語を初めて目にしたとき、これはてっきり形容詞 sauer からの造語に違いないと思い込み、筆者にとってドイツ語のお師匠さんの一人である Duppel-Takayama さんに念のために確かめたところ、とんでもないと一笑に付されてしまった。

誰もが知っているあのSchweinerei が Schwein（豚）からの造語であるのと同様、Schweinerei と同じ意味をもつSauerei は、名詞 Sau（雌豚）がその語源とのことであった。

結論的に言えば、接尾辞 – ei / –[e]rei による造語は動詞または名詞からに限られるということになる。ただし動詞といってもgeheim tun → Geheimtuerei、Götzen dienen → Götzendienerei、Kilometer fressen → Kilometerfresserei（文例102）のような動詞句からの造語もあるし、名詞といってもHitler → Hitlerei や Stalin → Stalinerei のような固有名詞からの造語（文例123、158）もあることを付け加えておきたい。以上の例にも見られるように、名詞からの即席造語はすべて接尾辞 –[e]rei によって作られているが、名詞Eifersucht から作られたEifersüchtelei（文例16）、動詞 empfinden から作られたEmpfindelei（文例73）、同じく動詞lieben からの造語Liebelei のように、接尾辞 –[e]lei による造語もないわけではない。Liebelei と言えば、同名のシュニッツラーの戯曲を森鴎外が「戀愛三昧」という題名で翻訳しているが、動詞 lieben の意味とあの戯曲の内容から言えば、「戀愛三昧」ではいささか綺麗事すぎる。Liebelei はむしろ「浮気三昧」とでも訳すべきだろう。

Ⅲ　– ei / –[e]lei / –[e]rei のもつ意味のニュアンス

ここで、これまでに挙げた四つの例文をもう一度読み直してみていただきたい。die ewige Warterei にせよ Mogelei にせよ、また Lumperei にせよ Kinderei にせよ、その意味内容から見て、どこか共通点があることにお気づきだろうか。「いつまでも待たされること」「いかさま」、「卑劣な行為」、「子供じみたこと」などの日本語に翻訳してみると分かりやすいかもしれ

ないが、要するに何かしらよくないイメージを与えるものばかりである。ドイツ語では、このような場合に pejorativ という言葉が好んで用いられるが、これを独和辞典で調べてみると、そしてこれは英和辞典でも仏和辞典でも同様だが（英語は pejorative、フランス語は péjoratif）、「軽蔑的な」、「貶称の」というような訳語がついている。つまり –ei や –[e]lei や –[e]rei のような接尾辞は〈軽蔑的接尾辞〉というわけで、これを付けることによってその語の意味内容を貶(おとし)める〈はたらき〉をするというわけである。ただし筆者に言わせれば、「軽蔑的」という訳語は適切ではなく、むしろ誤解を招くおそれがあるので、pejorativ は、上述したように、むしろ「何かしらよくないイメージを与えるもの」と解釈するほうがいいだろう。

なおここで付け加えておかなければならないのは、動詞から作られた Steigerei や Warterei、名詞からの造語 Kinderei などのように、動詞 steigen と warten、名詞 Kind に〈軽蔑的接尾辞〉を付けることによって初めて pejorativ な意味をもつものと、mogeln → Mogelei、Tier quälen → Tierquälerei、Lump → Lumperei、Sau → Sauerei などのように、もともと pejorativ な意味をもっている語にさらに〈軽蔑的接尾辞〉を付ける場合との両者を区別する必要があるということである。そのさい興味深いのは、Anschimpferei（罵倒）、Anschweigerei（黙殺）、Eifersüchtelei（やきもちやき）、Geldwäscherei（マネーウオツシング）、Kupplerei（男女間などの取り持ち）、Müßiggängerei（無為）、Tyrannei（暴虐）、Wichtigtuerei（もったいぶり）等々、後者のほうがはるかに多いという事実だが、これも事の自然の成り行きなのかもしれない。

それでは次に、18 世紀から 21 世紀にかけての接尾辞 – ei / –[e]lei / –[e]rei による即席造語の実例を年代順にお目にかけよう。それぞれの造語がどのような動詞、あるいはどのような名詞から造られたものであるかを、自分なりに考えてみていただきたい。なお訳文は、翻訳が入手できたものにかぎられていることをお断りしておく*。

＊例文の翻訳がなかなか見つからないとき、しばしば畏友中島悠爾氏の御助力を仰いだ。心から御礼申し上げる。

IV　具体例（年代順）

(5)

Es klagt dodi(*sic*) vor kurtzen langen zeiten auch der alt Niclauß Herman inn seinen Jochimsthalerischen Liedern über solche garstige Schulhäuser, *die Bütteleien, Schindereien, Henckereien*, da man mitten unter Ratten und Mäusen, Flöhen, Wantzen und Läusen, und was der Bursalia mehr mit dem Beanischen Bachantischen *Lupus* gefrett sein.

(Johann Fischart, Affentheurlich Naupengeheurliche Geschichtklitterung, 40.Capitel)

上に「18 世紀から 21 世紀にかけての実例」と書いたにもかかわらず、冒頭に 16 世紀の特異な作家であった Johann Fischart の作品から引用した理由は、Büttelei, Schinderei, Henckerei 等々、本稿で扱う〈軽蔑的接尾辞〉が、16 世紀にもすでに好んで用いられていたことをお見せしたかったからにほかならない。Schinderei が schinden からの、Henckerei が Henker からの即席造語であることは容易に想像がつくが、Büttelei だけはよく分からない。グリムの大辞典によれば、動詞 bütteln はラテン語の agitare に対応するとあるから、「教唆」や「扇動」を意味するのではあるまいか。ついでに 16 世紀の実例をもう一つ。これは動詞 schmeicheln からの造語だが、接尾辞が–ei ではなく、–ey となっていることに注目していただきたい。

(6)

Soll wahres Lob die Schuld der Schmeicheley verdienen
So darff ich mich forthin zu schreiben nicht erkühnen.
Doch kenn ich deine List: des klugen Mahlers Hand
Birgt ihre gröste Kunst in wohlgetheilten Schatten.
Die dunckle Folg erhebt den hellen Diamant;
So kan die Demutt dir auch grössern Glantz erstatten.
Doch will ich über dem mit dir nicht weiter zancken
Die unpartheysche Welt sey Richter der Gedancken.
Ich nehme den Vergleich für ungewissen Streit

Gantz willig von dir an! Nur muß ich diß noch setzen:
Ein Reim von zarter Hand aus freyer Faust bereit
Ist für gelehrte Kunst der Männer hoch zu schätzen.
(Hans Aßmann von Abschatz)

次に 17 世紀からの実例を一つ。Klügelei は動詞 klügeln からの即席造語であって、形容詞 klug からの造語ではもちろんない。

(7)

Du grübelst in der Schrift und meinst mit Klügelei
Zu finden Gottes Sohn; ach mache dich doch frei
Sucht(*sic*) und komm in Stall, ihn selbst zu küssen,
So wirst du bald die Kraft des werten Kinds genießen.
(Angelus Silesius: Cherubinischer Wandersmann,
3. Buch, 5. An den Gelehrten)

あなたは神の子を探しだすと、書物を掘り返し、理屈をこねまわしている。さあ、もうこのような欲望から離れ、馬小屋にやってきて神の子そのものに接吻しなさい。そうすればすぐさま高貴なこの力をあなたは享受するようになるだろう。
（アンゲルス・シレジウス、ケルビムのごとき旅人、
第３章、５ 学者に、植田重雄・加藤智見訳）

Du grübelst in der Schrift und meinst mit Klügelei zu finden Gottes Sohn が「あなたは神の子を探しだすと、書物を掘り返し、理屈をこねまわしている」と訳されているが、このようなひどい翻訳が世間に通用すると思ったら大間違い、言語道断である。「おまえは聖書を読みながらあれこれ思いめぐらせ（grübeln）、小賢しく思案しつつ（klügeln）神の子イエスを見いだしたつもりでいる」というのがその大意ではなかろうか。

(8)

Cäsar

Mein Herz ist ohne Falsch und von Verstellung frei.
Die Ehre flieht nicht stets vor Amors Sklaverei,
Drum kann zuweilen auch ein Heldengeist ihm dienen.
Doch, haßt Arsene mich, wie es bisher geschienen:
So siegt die Ehre doch! Denn Cäsar ist ein Mann,
Der auch sein eigen Herz zur Not bezwingen kann.
(Johann Christiph Gottsched*, Sterbender Cato, 3.Handlung, 1.Auftritt)

＊日本語で書かれたドイツ語史やドイツ文学史では「ゴットシェート」と表記されるのがふつうだが、正確には「ゴッチェート」である。

Sklaverei はイマヌエル・カントも使っているが（文例 10）、Sklaverei が名詞 Sklave から作られていることは、説明するまでもないだろう。

(9)

Ist nicht die Zauberei der Farben etwas so Wesentliches, daß kein Gemälde ohne dieselbe allgemein gefällt, und daß durch dieselbe viel Fehler teil übergangen, teil gar nicht angemerket werden? Diese machet nebst der großen Wissenschaft in Licht und Schatten den Wert der niederländischen Stücke. Sie ist dasjenige in der Malerei, was der ‚Wohlklang und die Harmonie der Verse in einem Gedichte sind. *Durch diese Zauberei der dichterischen Farben verschwinden dessen Vergehungen*, und derjenige, welcher ihn mit dem Feuer, worin er gedichtet, lesen kann, wird durch die göttliche Harmonie in solche Entzückung mit fortgerissen, daß er nicht Zeit hat an das, was anstößg ist, zu gedenken.
(Johann Joachim Winckelmann, Gedanken über die Nachahmung der Griechischen in der Malerei und Bildhauerkunst, 9.Kapitel)

(10)

[...] Das Ärgste hiebei (oder, aus dem Standpunkte eines moralischen Richters betrachtet, das Beste) ist, daß sie dieser Gewalttätigkeit nicht einmal froh werden, daß alle diese Handlungsgesellschaften auf dem Punkte des

nahen Umsturzes stehen, daß die Zuckerinseln, *dieser Sitz der allergrausamsten und ausgedachtesten Sklaverei*, keinen wahren Ertrag abwerfen, sondern nur mittelbar und zwar zu einer nicht sehr löblichen Absicht, nämlich zu Bildung der Matrosen für Kriegsflotten und also wieder zu Führung der Kriege in Europa, dienen, [...]

(Immanuel Kant, Zum ewigen Frieden, 2.Abschnitt, 3.Definitivartikel)

［…］ こうした状態でもっとも悪いこと（道徳的裁判官の立場から見れば、むしろもっともよいこと）は、かれらヨーロッパ人がこの暴力行為から決して好結果を得ていないこと、これらの商業組織がすべて崩壊にひんしていること、またもっとも残酷でもっとも巧妙な奴隷制の本拠である砂糖諸島（古くは西インド諸島やカナリア諸島が砂糖諸島と呼ばれた）が、なんらの実益をあげず、ただ間接的に、しかもあまり称賛できない意図のために、つまり艦隊の乗組員を養成するために、したがってヨーロッパでふたたび戦争を行うために役立っていること、であって［…］

（イマヌエル・カント、永遠平和のために、
第二章、第三確定条項、宇都宮芳明訳）

(11)

v.Tellheim. Mit wem sprichst du so, Werner? Wir sind allein; jetzt darf ich es sagen; *wenn uns ein Dritter hörte, so wäre es Windbeutelei*. Ich bekenne es mit Vergnügen, daß ich dir zweimal mein Leben zu danken habe. Aber, Freund, woran fehlte mir es, daß ich bei Gelegenheit nicht ebenso viel für dich würde getan haben? He!

Werner. Nur an der Gelegenheit! Wer hat daran gezweifelt, Herr Major? Habe ich Sie nicht hundertmal für den gemeinsten Soldaten, wenn er ins Gedränge gekommen war, Ihr Leben wagen sehen?

v.Tellheim. Also!

(Gotthold Ephraim Lessing, Minna von Barnhelm, 3.Aufzug, 7.Auftritt)

テルハイム　ヴェルナー、おまえ誰と話しているつもりなんだ？ 誰もいないから、おれもいうが、他人が聞いてりゃ、から自慢に聞え

るだろう。おれだって二度も命を助けてもらったことは充分にみとめて感謝している。しかしおれだって機會さえあれば、それくらいのことは、おまえのためにやれないことはなかったろうが、そんなことがなかったからって、おれに何か、まごころでもないというのか？ どうだい？

ヴェルナー　そりゃ、まあただ機會がなかっただけであります。少佐殿、だれが、そんなことを疑ってるでしょう？ なんでもない一兵卒が危険に落ちこんだとき、命がけで、少佐殿がお救いになったのを、私の目で見たのも一度や二度ではありません。

テルハイム　じゃあ、いいだろう！

（ゴットホルト・エフライム・レッシング、
ミンナ・フォン・バルンヘルム、第三幕、第七場、井上正蔵訳）

(12)

[...] Wir überlassen es der Entscheidung kalter Sitten-Lehrer: ob die Tugend das konnte, oder nicht; aber unser Held war von dem letztern so lebhaft überzeugt, daß er, anstatt auf Gründe zu denken, *womit er die Sophistereien der Liebe hätte vernichten können*, in vollem Ernst auf Mittel bedacht war, das Interesse seines Herzens und die Tugend, welche ihm nicht unverträglich zu sein schienen, auf immer mit einander zu vereinigen.

(Christoph Martin Wieland, Geschichte des Agathon,
1.Teil, 7.Buch, 9.Capitel)

［…］徳がそれをなしえたか、なしえなかったかは、もっと冷血の道徳学者どもの決定にまかせる。ともかく、我々の主人公はなしえなかったものと一途（いちづ）に信じ込んでいて ― まことしやかな愛の説法を打ち砕くことができたはずのもろもろの論拠があったであろうに、それを思案するかわりに、― 大まじめで、心の興味と徳と、彼には共に相容れないと思われるものを、互いに永遠に結び合わせるための方法に、知恵をしぼったのであった。

（クリストフ・マルティン・ウィーラント、アガトン物語、義則孝夫訳）

この例文の最後の部分 in vollem Ernst auf Mittel bedacht war, das Interesse

seines Herzens und die Tugend, welche ihm nicht unverträglich zu sein schienen, auf immer mit einander zu vereinigen. の義則訳「大まじめで、心の興味と徳と、彼には共に相容れないと思われるものを、互いに永遠に結び合わせるための方法に、知恵をしぼったのであった」は残念ながらまったくの誤訳で、とくに das Interesse seines Herzens und die Tugend, welche ihm nicht unverträglich zu sein schienen の部分は、「彼には共に相容れないと思われるものを」ではなく、義則訳の字句をそのまま生かせば、「彼には共に相容れなくはないと思われるものを」と解すべきであろう。否定詞 nicht の存在を見落としたがための誤訳である。

(13)

Es war vor einiger Zeit Mode, und ist es vielleicht noch, auf die Titel der Romane zu setzen: eine wahre Geschichte. *Das ist nun eine kleine unschuldige Betrügerei*, aber daß man auf manchen neueren Geschichtsbüchern die Worte: ein Roman, wegläßt, das ist keine so unschuldige.

(Georg Christoph Lichtenberg, Aus „Sudelbuch“ K, [K 195])

小説の表題に上に「実録」ということばを添えるのが、しばらく前の流行であった。おそらく今でもそうだろう。これはこれで、罪のないちょっとしたいかさまだが、近ごろの多くの歴史書が「小説」ということばを落としているのは、そう罪のないいかさまとまではいえない。

（ゲオルク・クリストーフ・リヒテンベルク、
わが箴言より、K 195、国松孝二訳）

国松訳はさすがという感じだが、und ist es vielleicht noch が「おそらく今でもそうだろう」となっているのはいただけない。vielleicht が「おそらく」でないことは、いまさら言うまでもないだろう。

(14)

Venedig war in seinen Lagunen wie Rom entstanden. Zuerst der Zufluchtsort derer, *die bei den Streitereien der Barbaren auf unzugängliche,*

arme Inseln sich retteten und, wie sie konnten, nährten; sodann mit dem alten Hafen von Padua vereinigt, verband es seine Flecken und Inseln, gewann eine Regierungsform und stieg von dem elenden Fisch- und Salzhandel, mit welchem es angefangen hatte, auf einige Jahrhunderte zur ersten Handelsstadt Europas, zum Vorratshause der Waren für alle umliegende Länder, zum Besitztum mehrerer Königreiche und noch jetzt zur Ehre des ältesten, nie eroberten Freistaates empor.

(Johann Gottfried Herder, Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit, 20.Buch, I Handelsgeist in Europa)

ヴェニスはローマと同様にその潟のうちに生じた。ヴェニスは先づ未開人の侵略に際して、近寄りにくい貧弱な島に逃がれて出來るだけ身しのぎをした人々の避難所であった。それからパドゥアの古い港と力を合はせたヴェニスはその支配下の小都邑と島嶼を結合し、一つの政治形式を獲得し、手始めに営んだ魚と鹽との貧しい商賣から二三世紀のうちにヨーロッパの第一の商業都市になり、凡ての周圍の國々のために商品の貯藏庫になり、多くの王國の所有物になり、今もなほ決して征服されない最古の自由國たる名譽にまで向上した。[…]

（ヨーハン・ゴットフリート・ヘルダー、人間史論、第二十篇、第一章 ヨーロッパにおける商業精神、鼓常良訳）

bei den Streitereien der Barbaren が「未開人の侵略に際して」と訳されているが、正確には、「未開人たちの闘争にさいして」ということだろう。

(15)

Evchen. So wahr Gott lebt! Mutter! Es ist keine Kaprisse; wollt es wär! – Soll ich aber die Wahrheit gestehn, Mutter, so hat der Ungestüm, mit dem sie mir die Ursache meines Kummers, die ich mir selbst noch nicht gestehn mag, bald in den Augen lesen, bald mit Drohen, bald mit Liebkosen herauspressen wollten, sehr viel dazu beygetragen, *meine Melancholie oder Kopfhängerey, wie sies nennt, zu vermehren*. Es ist von ihrer Seit gut gemeint, das weiß ich, das fühl ich, und leide doppelt drunter, weil ich

ihnen jetzt wenigstens keinen Dank für diese Zärtlichkeit geben kann. – Probier sies einmal Mutter! *Laß sie mich ein Weilchen in meiner Träumerey so hinschlendern*, thu sie, als bemerkte sies gar nicht, überlaß sie mich mir selbst, bered sie den Vater es auch zu thun; nur auf ein Weilchen! Vielleicht hebt sich alles – es muß sich heben, und dann bin ich wieder ganz ihre Tochter, oder –

Fr. Humbrecht. Oder? –

Evchen. Ein Kind des Tods.

(Heinrich Leopold Wagner, Die Kindermörderin, 4.Akt)

(16)

Er hält mich für einen Menschen von Sinn; und meine Anhänglichkeit zu Lotten, meine warme Freude, die ich an allen ihren Handlungen habe, vermehrt seinen Triumph, und er liebt sie nur desto mehr. *Ob er sie nicht manchmal mit kleiner Eifersüchtelei peinigt*, das lasse ich dahingestellt sein, wenigstens würd' ich an seinem Platze nicht ganz sicher vor diesem Teufel bleiben.[...]

(Goethe, Die Leiden des jungen Werther, 1. Buch, Am 30. Julius)

彼はぼくを分別ある男だと考えている。そしてぼくのロッテへの執着、彼女のあらゆる動作にぼくが感じる暖かい喜びは、彼の勝利感をいやまし、彼は彼女をそれだけ更に愛するのだ。彼は折々あれこれとやきもちを焼いて彼女を苦しめていないかどうか、それは詮索すまい。少なくともぼくが彼の立場だったら、いまいましい嫉妬の悪魔から逃げおおせる自信はない。[…]

（ゲーテ、若きヴェルテルの悩み、第一の巻、七月三十日、柴田翔訳）

これは余談だが、名詞 Eifersucht の〈軽蔑的接尾辞〉がなぜ –elei であって、-erei でないのか、それには何か特別の理由でもあるのだろうか。ためしに Eifersüchterei をネットを検索してみたところ、さっそくその実例、つまり誤用が一つ見つかったのでお目にかけよう。ただしドイツにかぎらず、ネット上のチャットの大半がそうであるように、誤字だらけで、むろんま

ともなドイツ語ではない。

(17)

Obwohl ich ihr durch mehrfache äussere logische und emotionale Argumentaion gezeigt habe, das(*sic*) ich ihr sicherlich nicht fremdgehen werde, weitere Eifersüchterei(*sic*) ihrerseits.

自分はけっして浮気などしないと、何度も論理的に、そして感情を籠めて言ってやったのに、彼女は相変わらずやきもちばかり、ということだろうか。

(18)

Sich mitzuteilen ist Natur; Mitgeteiltes aufzunehmen, wie es gegeben wird, ist Bildung. Niemand würde viel in Gesellschaften sprechen, wenn er sich bewußt wäre, wie oft er die andern mißversteht.

Man verändert fremde Reden beim Wiederholen wohl nur darum so sehr, weil man sie nicht verstanden hat.

Wer vor andern lange allein spricht, ohne den Zuhörern zu schmeicheln, erregt Widerwillen.

Jedes ausgesprochenes Wort erregt den Gegensinn.

Widerspruch und Schmeichelei machen beide ein schlechtes Gespräch.

Die angenehmsten Gesellschaften sind die, in welchen eine heitere Ehrerbietung der Glieder gegeneinander obwaltet.

(Goethe, Die Wahlverwandtschaften,

2.Teil, 4.Kapitel, Aus Ottiliens Tagebuche)

自分の心を告げるのは、自然のいきおいである。告げられたものを、ありのままに受けいれるのは、教養である。

何人も、いかにしばしば他人を誤解するかを意識していたら、人なかでむやみとしゃべらないだろう。

他人の談話をくり返すとき、それをひどく変えてしまうのは、おそらくひとえに、こちらがそれを理解しなかったためであろう。

だれでも他人の前で、長い間ひとりで語りながら、聞き手にこびない者は、反感をよびおこす。

口から出た言葉は、ことごとく、反対の意味をよびおこす。

反ばくと追従（ついしょう）は、両方ともまずい会話のもとである。

もっとも快適な集会とは、各員の相互に対する畏敬の念がみなぎっている集会である。

（ゲーテ、親和力、

第二部、第四章、オッティリエの日記から、實吉捷郎訳）

正直なところゲーテはあまり面白くないと思っている人は、けっこう多いのではないだろうか。かく言う筆者もその一人だった。しかし Sich mitzuteilen ist Natur; Mitgeteiltes aufzunehmen, wie es gegeben wird, ist Bildung. などを読むと、やはりゲーテは違う、とつくづく思う。ただし「自分の心を告げるのは、自然のいきおいである」という實吉訳にはいささか違和感がある。「ねえ、ちょっとちょっと聞いて」というような場面には、誰しもよく出会うと思うが、これこそまさに人間の本性（ほんせい）、つまり Natur ではないだろうか。

(19)

[...] O Schweigt still, schweigt still, lieben Leut. Erwägt erst mit reifem Nachdenken, was der Aberglaube bisher für Nutzen gestiftet hat, und denn habt mir noch das Herz, *mit Euren nüchternen Spötteleien gegen mich anzuziehen*. Reutet mir den Aberglauben aus; ja wahrhaftig der rechte Glaube wird mit draufgehn, und ein nacktes Feld dableiben. Aber ich weiß jemand, der gesagt hat, man soll beides wachsen lassen, es wird schon die Zeit kommen, da Kraut sich von dem Unkraut scheiden wird. [...]

(Jakob Michael Reinhold Lenz,

Der Hofmeister oder Vorteile der Privaterziehung, 5.Akt, 9.Szene)

Spöttelei について一言註釈を加えておこう。これは動詞 spötteln からの即席造語だが、Spöttelei と並んで Spötterei があることを御存知だろうか。

結論を先に述べれば、両者の違いは、Spöttelei は spötteln の語幹 spöttel に接尾辞 –ei が、そして Spötterei は動詞 spotten の語幹 spott に接尾辞 –erei が付いたものである。それでは動詞 spotten と spötteln とはどこが違うかということになるが、独和辞典を引いてみると前者には「嘲笑する」、後者には「ひやかす」という訳語が見られるように（『クラウン独和辞典』三省堂）、後者は前者の意味を和らげたものと考えることができる。husten → hüsteln、lachen → lächeln、tanzen → tänzeln なども参考にしていただきたい。

(20)

Die ganze Fußfallszene wäre doch im Grunde, obgleich *nicht offenbar Heuchelei und Verstellung*, doch wenigstens Affektation gewesen, *und der Übergang von der Affektation zur Heuchelei und Verstellung, wie leicht ist der!* —

(Karl Philipp von Moritz, Anton Reiser, 3.Teil)

結局この跪座の場面は、あからさまの偽善や偽装ではないまでも、少なくとも一種の気取りであったろう。そして気取りから偽善と偽装への道、それはほんの一またぎなのだ。

（カール・フィリップ・フォン・モーリッツ、アントン・ライザー、第三部、大澤峯雄訳）

(21)

Unterdessen hält der Sonnenwirt vor dem Amtshaus, das lächerliche Schauspiel hat den Janhagel des Städtchens scharenweise um ihn her versammelt. Man murmelt sich in die Ohren, deutet wechselweise auf das Roß und den Reuter; der Mutwille des Pöbels steigt endlich bis zu einem lauten Tumult. Unglücklicherweise war das Pferd, worauf jetzt alles mit Fingern wies, ein geraubtes; er bildet sich ein, das Pferd sei in Steckbriefen beschrieben und erkannt. Die unerwartete Gastfreundlichkeit des Oberamtmanns vollendet seinen Verdacht. Jetzt hält er's für ausgemacht, *daß die Betrügerei seines Passes verraten und diese Einladung nur die Schlinge*

sei, ihn lebendig und ohne Widersetzung zu fangen. Böses Gewissen macht ihn zum Dummkopf, er gibt senem Pferde die Sporen und rennt davon, ohne Antwort zu geben.

(Friedrich Schiller,

Der Verbrecher aus verlorener Ehre. Eine wahre Geschichte)

その間ウォルフは役所の前に止まってゐた。彼の滑稽な容子に町の野次馬は彼の周圍に群って來た。群衆は互に耳語し、馬と人とを交る替る指さした。群衆の放恣は遂に嵩じて騒擾となった。不運にも今みんなが指さしたその馬は、ウォルフが曾て人から盗んだ馬である。馬の恰好が委しく逮捕状に書かれてあって、今やそれだと見抜かれたものと思った。法官が思ひがけなく親切にも彼を酒に招いたことを思ひ合せ、愈々それに違ひないと考へた。彼の旅券の詐りであることが曝露し、法官からの招待は、彼を生きながら、又反抗なしに捕へようとの係蹄であるに相違ないと思った。脛に傷持つ彼は、愚かにも、馬に拍車をあてて返事もせずに逃げ出した。

（フリードリヒ・シラー、犯罪人、野村行一訳）

(22)

[...] *Aber wir altjüngferlichen Deutschen bleiben die seltsamste Verschmelzung von Kleinstädterei und Weltbürgerschaft, die wir nur kennen.* Man bessere uns! Nur ists schwer; wir vergeben leichter ausländische Sonnenflecken als inländische Sonnenfackeln. [...]

(Jean Paul, Dr. Katzenbergers Badereise, Vorrede)

［…］しかし我々老嬢風なドイツ人は考えられるかぎり奇妙極まる都市趣味とコスモポリタンの混合である。我々は改善すべきであろう。しかしこれは難しい。我々は容易に国内の太陽の白斑よりも国外の黒点を許す。［…］

（ジャン・パウル、カッツェンベルガーの湯治旅行、

初版の第一小巻と第二小巻のための序言、恒吉法海、嶋崎順子訳）

(23)

[...] Die Gesellschaft, die anfänglich aus ähnlichen Ursachen still gewesen war, fing nach gerade an aufzuwachen, und sich mit allerhand Gesprächen und Erzählungen die Zeit zu verkürzen. *Heinrichs Mutter glaubte ihren Sohn aus den Träumereien reißen zu müssen, in denen sie ihn versunken sah*, und fing an ihm von ihrem Vaterlande zu erzählen, von dem Hause ihres Vaters und dem fröhlichen Leben in Schwaben. [...]

(Novalis, Heinrich von Ofterdingen, 1.Theil Die Erwartung, 2. Kapitel)

［…］一行は、はじめのうちはだれも似たような理由から黙りこくっていたが、やがてそれぞれの想いから醒めると、四方山の話で退屈しのぎを始めた。ハインリヒの母親は、まだ夢想に耽っている息子を我に返らさなければならないと考えて、これから向かう彼女の郷里と実家のこと、そしてシュヴァーベンでの楽しい生活のことを、彼に向かって話しはじめた。［…］

（ノヴァーリス、青い花、第一部期待、第二章、薗田宗人、今泉文子訳）

(24)

Die Auswahl wird mir nicht schwer. *Denn da unter den Träumereien, die hier schon den ewigen Lettern und dir anvertrauet sind, die Erinnerungen an die schönste Welt noch das gehaltvollste ist*, und noch am ersten eine gewisse Art von Ähnlichkeit mit den sogenannten Gedanken hat: so nehme ich vor allen andern die dithyrambische Fantasie über die schönste Situation. Denn wissen wir erst sicher, daß wir in der schönsten Welt leben: so ist es unstreitig das nächste Bedürfnis uns über die schönste Situation in dieser schönsten Welt durch andre oder durch uns selbst gründlich zu belehren.

(Friedrich Schlegel, Lucinde, Julius an Lucinde)

擇(えら)びだすことは私には難(むずか)しくない。けだし、茲(ここ)で已(すで)に永遠の文字に殘してそなたに對してうちあけられた幻想の中に在っては、最も美しき世界の思ひ出がわけても最も内容豊かであり、且つわけても第一に、所謂(いわゆる)思想に何らかの相似を持って居るが故に、私は何を措いても、最も美しき状態に就ての酒神的なる夢想を取り出すからである。けだし

私たちは先づ、自らが最も美しい世界に生きて居ることを、確かに知って居り、従って此の最も美しき世界に於ける最も美しき状態に就て、他のひとを通じて、さなくば私たち自身を通じて、根本から互(たがい)に知り合うことは、論議するまでもなく、最もさしせまった必要だからである。

（フリードリッヒ・シュレーゲル、ルチンデ、江澤譲爾訳）

(25)

[...] Die sogenannten Theoristen und Systematiker beschreiben uns die Begeisterung des Künstlers von Hörensagen und sind vollkommen mit sich selbst zufrieden, *wenn sie mit Ihrer eiteln und profanen Philosophasterei umschreibende Worte zusammengesucht haben* für etwas, wovon sie den Geist, der sich in Worte nicht fassen läßt, und die Bedeutung nicht kennen. Sie reden von der Künstlerbegeisterung als von einem Dinge, das sie vor Augen hätten; sie erklären es und erzählen viel davon; und sie sollten billig das heilige Wort auszusprechen erröten, denn sie wissen nicht, was sie damit aussprechen.

(Wilhelm Heinrich Wackenroder / Ludwig Tieck, Herzensergießungen eines kunstliebenden Klosterbruders, Raffaels Erscheinung)

［…］理論家とか體系家とかいはれる人々は、藝術家の霊感を聞き傳へだけで記述する。そして、彼等がその空虚な世俗的な哲學者氣取りで、言葉に把握し得ぬその精神や意義を知らない事に對して、書き換への言葉を捜し集めれば、それで完全に満足した氣持でゐる。彼等は藝術家の霊感に就て、恰(あたか)も彼等の眼前にある物の様に無造作に語る。彼等はそれを解明し、それに就ていろいろ物語る。しかも、彼等は當然、この神聖な言葉を口にする事を赤面すべき筈である。何故なら、彼等は、自分達がその言葉で何を言ひ表はすのかを知らないのだから。

（ヰルヘルム・ハインリッヒ・ワッケンローダー / ルードヰッヒ・ティーク、藝術を愛する一修道僧の真情の披瀝、ラファエロの幻影、江川英一訳）

(26)

Die Brinvillier war ein entartetes Weib, durch Sainte Croix wurde sie zum Ungeheuer. Er vermochte sie nach und nach, erst ihren eignen Vater, bei dem sie sich befand, *ihn mit verruchter Heuchelei im Alter pflegend*, dann ihre beiden Brüder und endlich ihre Schwester zu vergiften; den Vater aus Rache, die andern der reichen Erbschaft wegen. Die Geschichte mehrerer Giftmörder gibt das entsetzliche Beispiel, daß Verbrechen der Art zur unwiderstehlichen Leidenschaft werden. Ohne weitern Zweck, aus reiner Lust daran, wie der Chemiker Experimente macht zu seinem Vergnügen, haben oft Giftmörder Personen gemordet, deren Leben oder Tod ihnen völlig gleich sein konnte. Das plötzliche Hinsterben mehrerer Armen im Hotel Dieu erregte später den Verdacht, daß die Brote, welche die Brinvillier dort wöchentlich auszuteilen pflegte, um als Muster der Frömmigkeit und des Wohltuns zu gelten, vergiftet waren. Gewiß ist es aber, daß sie Taubenpasteten vergiftete und sie den Gästen, die sie geladen, versetzte. [...]

(E.T.A.Hoffmann, Das Fräulein von Scuderi)

堕落女ブランヴィリエは、サント・クロア大尉のために悪鬼になった。づうづうしくも老父を世話するといつわって実家に帰っていた彼女は、大尉の指図(さしず)で、さいしょは実の父を、ついで、二人の兄弟を、最後に姉妹をという風に、つぎつぎ毒殺した。父をころしたのは復讐のためであり、余のものの毒殺は莫大な遺産めあてであった。

この種の犯罪は病癖になって、もうとてうていやめられない、というおそろしい実例を、いくたりかの毒殺者の話が示している。化学者が自分の満足のために実験するのと同じように、特別な目的とてなく、そのもの自体の快楽から、毒殺者は、その生死が自分にとってなんの関係もない人たちまで殺すということを、たびたびおこなっている。

市立病院にいた数人の貧困者が急死した。ブランヴィリエが、信心と慈善の鑑(かがみ)とうたわれたいばかりに、毎週きまって喜捨(きしゃ)していたパンは、じつは毒入りだったと疑う人が、のちにあらわれた。それはともかく、彼女が鳩肉まんじゅうに毒をいれ、招待した客に出したことは

たしかである。[…]

（E．T．A．ホフマン、スキュデリー嬢、吉田六郎訳）

(27)

[...] Von Menschen freilich war an dieser hübschen Stelle wenig oder gar nichts anzutreffen, den Fischer und seine Hausleute ausgenommen. Denn hinter der Erdzunge lag ein sehr wilder Wald, den die mehrsten Leute wegen seiner Finsternis und Unwegsamkeit, *wie auch wegen der wundersamen Kreaturen und Gaukeleien*, die man darin antreffen sollte, allzusehr scheueten, um sich ohne Not hineinzubegeben. [...]

(Friedrich Baron de la Motte Fouqué, Undine,

1.Kapitel Wie der Ritter zu dem Fischer kam)

［…］しかもこの美しい場所では、この漁師とその家族を除いては、ほとんど人間に出会うことがなかった。岬のうしろにはものすごい森があって、そこはまっ暗で路らしい路もなく、それに不思議な生物や妖怪が現われるといううわさが立っているので、たいていの人は怖(こわ)がって、よっぽどのことでもなければ、この森の中に踏みこんで行こうとはしなかった。[…]

（フリードリヒ・バローン・ド・ラ・モット・フーケー、水妖記、

その一　騎士が漁師のところへ来たこと、柴田治三郎訳）

(28)

Man erzählte, wie die Stadt gleich nach der ersten Haupterschütterung von Weibern ganz voll gewesen, die vor den Augen aller Männer niedergekommen seien; wie die Mönche darin, mit dem Kruzifix in der Hand, umhergelaufen wären, und geschrien hätten: das Ende der Welt sei da! Wie man einer Wache, die auf Befehl des Vizekönigs verlange, eine Kirche zu räumen, geantwortet hätte: es gäbe keinen Vizekönig von Chili mehr! Wie der Vizekönig in den schrecklichsten Augenblicken hätte müssen Galgen aufrichten lassen, *um der Dieberei Einhalt zu tun*; und wie ein Unschuldiger, der sich von hinten durch ein brennendes Haus gerettet, von dem Besitzer aus

Übereilung ergriffen, und sogleich auch aufgeknüpft worden wäre.[...]

(Heinrich von Kleist, Das Erdbeben in Chili)

彼等の語るのを聞くと、最初の強震後ただちに人々の眼のまえで子供を分娩した女が市中到るところに見うけられたと。また十字架像を手にもった僧侶は市中を駈け廻りながら、今こそ世の終りが來たのだと叫んでいた。それからある守衛が副王の命令で、ある寺院内の人々を立退かせようとしたら、人々はもうチリの副王なんかありゃしないんだと答えた。副王はまた地震最中に絞首柱を立てさせて盗賊を處刑させたが、或る罪もない人が難を避けるため燃えている家を通りぬけて裏口から逃げだしたら、主人の早合點から引捕らえて首を絞められてしまった。

（ハインリヒ・フォン・クライスト、チリの地震、相良守峯訳）

wie der Vizekönig in den schrecklichsten Augenblicken hätte müssen Galgen aufrichten lassen, um der Dieberei Einhalt zu tun の相良訳「副王はまた地震最中に絞首柱を立てさせて盗賊を處刑させたが」にはちょっと首を傾げざるを得ない。Dieberei から連想されるのは、先日中国の深圳での日系スーパーの略奪事件のときのように、地震をこれ幸いとあちこちで略奪が始まり、それを防ぐためには絞首柱を立てさせざるを得ず、だからこその hätte müssen Galgen aufrichten lassen ではないだろうか。

(29)

[...] Besonders verwandelt sich die beste Stimmung von der Welt beim ersten Unfall nur zu leicht in Kleinmut, *und man mögte(sic) sagen, in eine Art von Großsprecherei der Angst;* das französische Sauve qui peut. – Ein solches Heer vermag nur durch seinen Feldherrn Etwas, Nichts durch sich selbst. [...]

(Carl von Clausewitz, Vom Kriege, 3.Buch Von der Strategie überhaupt, 5.Kapitel Kriegerische Tugend des Heeres)

［…］世にもすぐれた気風を具えた軍が、緒戦（ちょせん）に敗れると忽ち臆病になり、一種の恐怖症にかかって、フランス人のいわゆる〈sauve qui peut〉（さあ逃げろ！）ということになり兼ねないのである。かかる軍

はすぐれた将帥を俟って初めて一廉の功業を樹て得るのであって、軍そのものだけでは何事も成し得ないのである。[…]

（カルル・フォン・クラウゼヴィッツ、戦争論、
第三篇 戦略一般について、第五章 軍の武徳、篠田英雄訳）

eine Art von Großsprecherei der Angst の篠田訳「一種の恐怖症」、いささか簡便に過ぎるのではなかろうか。字句どおりに直訳すれば、「不安の大言壮語」である。

(30)

„Sie können mich nicht leiden, mein Herr, Sie hassen mich, ich weiß es; doch warum hassen Sie mich? Ist es etwa, weil Sie mich auf öffentlicher Straße angefallen, und mir mein Vogelnest mit Gewalt zu rauben gemeint? Oder ist es darum, daß Sie mein Gut, den Schatten, den Sie Ihrer bloßen Ehrlichkeit anvertraut glaubten, mir diebischer Weise zu entwenden gesucht haben? Ich meinerseits hasse Sie darum nicht; ich finde ganz natürlich, daß Sie alle Ihre Vorteile, List und Gewalt geltend zu machen suchen; *daß Sie übrigens die allerstrengsten Grundsätze haben und wie die Ehrlichkeit selbst denken, ist eine Liebhaberei, wogegen ich auch nichts habe.* – Ich denke in der Tat nicht so streng als Sie; ich handle bloß, wie Sie denken. Oder hab ich Ihnen etwa irgend wann den Daumen auf die Gurgel gedrückt, um Ihre werteste Seele, zu der ich einmal Lust habe, an mich zu bringen? Hab ich von wegen meines ausgetauschten Säckels einen Diener auf Sie losgelassen? Hab ich Ihnen damit durchzugehen versucht?“

(Adelbert von Chamisso,
Peter Schlemihls wundersame Geschichte, 8.Kapitel)

「このわたしに我慢がならないようですね。憎らしくてたまらないのでしょう。だけどまたどうしてです？ なぜ憎らしいのです？ いつでしたか昼の日中に襲いかかって当方の隠れ蓑を失敬しようとなさいましたが、まさかあの失敗を根にもってのことではありますまいね。それともつい先だって、わたしの財産である影をですね、盗人同然に持

っていこうとなさった件ですね、それが思いどおりにならなかったから無念だとでもおっしゃるつもりなのですか。こちらはいっこうにあなたを怨んじゃいませんよ。あなたが知恵を絞り、腕力に訴えてでも出し抜こうとなさっているのは当然至極です。それにあなたが主義主張をお持ちであって、そいつを後生大事にかかえていらっしゃる点についてもですね、ま、人それぞれに道楽があるものですから、それについてもどうこうは申しません ― 現にこのわたしがそうですよ。あなたのように杓子定規に考えたりはしませんが、ある一つのことにはあなた同様に厳格でありましてね。あなたの魂が欲しいからといって、このわたしが一度でもあなたの喉頸を締めあげたことがありましたかね？ お取り換えした財布を巻き上げるために、召使に闇打ちを食らわせたりしましたかしら。そのあと、とんずらを決めこもうなどとしましたかね？」

（アーデルベルト・フォン・シャミッソー、
影をなくした男、第八章、池内紀訳）

(31)

Pariser Briefe. Der Dr. Wirth, der sie schreibt, ist ein Mann, dem man Hochachtung, ja Bewunderung nicht versagen kann. Hochachtung – weil er für die Freiheit kämpft wie ein Held in der Schlacht, nicht bloß wie ein Maulritter mit Worten. Bewunderung – weil er mutig erträgt, was sonst den tapfersten Mann niederwirft: die kleinen Bosheiten, *die kleinen Quälereien der kleinen Knechte*. Gefängnis, Geldstrafe, die jämmerlichen Tücken der jämmerlichen Polizei, das Knurren und Bellen der Hofhunde, nichts schreckt ihn ab.

(Ludwig Börne, Briefe aus Paris, 60.Brief)

(32)

[...] „Meine Meinung geht dahin," sprach er, „daß wir aus gemeinem Söckel diese Scheuer samt allem, was darinliegt, Getreide, Stroh und Heu, dem Eigentümer bezahlen und ihn schadlos halten, dann aber das ganze Gebäude

und mit ihm das fürchterliche Tier abbrennen, so braucht doch niemand sein Leben daran zu setzen. Hier ist keine Gelegenheit zu sparen, *und Knauserei wäre übel angewendet*."

Alle stimmten ihm bei. Also ward die Scheuer an vier Ecken angezündet, und mit ihr die Eule jämmerlich verbrannt. Wers nicht glauben will, der gehe hin und frage selbst nach.

(Jacob u. Wilhelm Grimm, Kinder- und Hausmärchen, Die Eule)

[…]『わたしの意見はね』と、市長さんは口をきりました。『町の財布から金を出してこの納屋を、なかにはひッてる物そっくり、穀類でも藁でも枯草でも、そっくり其儘に持主から買取って、持主には一文も損をかけないやうにして置いて、それからな、この建物をあの怖ろしい動物ぐるみに焼いてしまったらどうかと思ふ、さうすりゃ、誰一人命を賭けずに濟むといふもの。かうなッちゃ、金なぞ惜しんでは居られん、一文惜しみをすると飛んだことにならうも知れぬでな』

一同、市長さんの言ふことに賛成しました。それで、納屋の四隅へ火がかけられました、そして、納屋と一緒に梟は痛痛しく焼き殺されてしまひました。これが若しほんたうにできない人があったら、自分で出かけてッて訊いてごらんなさい。

(ヤーコプ・グリム、ヴィルヘルム・グリム、
グリム童話集、梟、金田鬼一訳)

(33)

[...] Alle Tage besuchte er gewissenhaft ein paar wunderliche altkluge Gesellen auf dem Felde, *die er auf seinen Streifereien ausgespürt hatte*, gab ihnen Tabak zu schnupfen, den er bloß ihretwillen bei sich trug, und führte stundenlang eine tolle Unterhaltung mit ihnen. [...]

(Joseph von Eichendorff, Ahnung und Gegenwart, 1.Buch, 10.Kapitel)

[…] うろついているあいだに数人の風変わりな人たちと知り合いになり、彼は毎日のようにこの気位のたかい連中を訪れた。彼らのために特別にかぎたばこを持っていってやって、何時間も彼らとおしゃべりをした。[…]

（ヨーゼフ・フォン・アイヒェンドルフ、
フリードリヒの遍歴、第一部、第十章、神品芳夫訳）

(34)

Was das für ein schönes Bewußtsein ist, einen guten Magen zu haben. Ich bin mit dem meinen recht zufrieden, ein fleißiger Kerl, alle Achtung für ihn. Oh, ein Magen zu sein, ist eine schöne Charge. Sultan über zwei Reiche, übers Tierreich und übers Pflanzenreich. Ein wahrer Tyrann! Hendeln und Kapaunen sind nur seine Sklaven, die druckt er zusammen, als wenn s' nie dagewesen wären. Und doch ein Ehrenmann, *der keine Schmeicheleien mag*, mit Süßigkeiten darf man ihm nicht kommen, da verdirbt man ihn ganz. Sackerlot, ich bin der fidelste Kerl auf der Welt! Eine Freud hab ich manchmal in mir, da wird mir so wohl ums Herz, so gut, daß ich alles zusammprügeln möcht, so seelenfroh bin ich. Und Geld hab ich, daß mir angst und bang dabei wird. Jetzt hab ich das Haus gekauft, und jetzt kauf ich mir noch einen saubern Weltteil, wo ein kleiner Garten dabei ist, das wird ein Leben werden. Lenzl!

(Ferdinand Raimund, Das Mädchen aus der Feenwelt
oder Der Bauer als Millionär, 1.Aufzug, 7.Auftritt)

丈夫な胃を持っているという感覚はなんと素晴らしい感覚だ、わしはわしの胃にすこぶる満足じゃ、勤勉な奴じゃ、敬意を払うぞ。胃袋はひとつの立派な階級だ。動物界と植物界の二つの国を統べるスルタンだ。本物の暴君だ！ 雌鳥も雄鳥も胃の奴隷にすぎん。そんなもの、まるで存在しなかった如くに潰してしまう。しかしまたこの胃はお追従を嫌う、誇り高い存在でもある。甘いものをみやげに近づいてはならぬ、それは胃を駄目にする。それにしてもわしはこの世でもっとも陽気な男だ！ ときにわしは無性に嬉しくなって、心臓のまわりがキューンとし、あんまり気持ちがいいんで何でもかんでも叩き潰したくなってしまう。それほどわしは、嬉しくてしかたがない。それとわしには金がある。そいつがまた心配の種だ。この家は買ったが、今度は高級住宅街にちょっとした庭付きの一画を買おう、こいつはたいした

ことになりそうだぞ。ローレンツ！
（フェルディナント・ライムント、妖精界の娘
あるいは百万長者になった百姓、第一幕、第七場、小松英樹訳）

(35)

„[...] Lieber Himmel!“ fuhr Maximilian fort, indem ein schmerzliches Lächeln um seine Oberlippe zuckte, „lieber Himmel! die lebendigen Weiber, mit denen ich damals in unabweisliche Berührungen kam, wie haben sie mich gequält, zärtlich gequält, mit ihrem Schmollen, Eifersüchteln und beständigem In-Atem-Halten! Auf wie vielen Bällen mußte ich mit ihnen herumtraben, *in wie viele Klatschereien mußte ich mich mischen!* Welche rastlose Eitelkeit, welche Freude an der Lüge, *welche küssende Verräterei*, welche giftige Blumen! [...]“

(Heinrich Heine, Florentinische Nächte, Erste Nacht)

「[…］大変だったのですよ」、マクシミリアンはつらそうな笑いで上唇をひきつらせながら言葉を続けた。「大変だったんですから。あの頃ぼくがやむを得ずつきあわざるを得なかった女性たちは、どんなにぼくを悩ましたことでしょう。すねてふくれたり、やきもちを焼いたり、ぼくに息つぐ間も与えず、情深く悩ましてくれたんです。どんなにか多くの舞踏会で、ぼくは女性たちと駆けまわらねばならなかったでしょう。どんなに何度も、くだらぬおしゃべりに加わらねばならぬことだったでしょう。なんときりのない虚栄、虚偽を行うときのなんという喜び、口づけしつつ行うなんたる裏切り、なんたる毒の花々。［…］」
（ハインリヒ・ハイネ、フィレンツェの夜、第一夜、立川希代子訳）

(36)

Habe ja doch nichts begangen,
Daß ich Menschen sollte scheun –
Welch ein törichtes Verlangen
Treibt mich in die Wüstenein?

(Wilhelm Müller, Winterreise, Der Wegweiser)

あの有名なシューベルトの歌曲「冬の旅」（Winterreise）の原詩がWilhelm Müller によるものであることはよく知られているが、上に掲げたのは、その二十番目の曲「道しるべ」（Der Wegweiser）の第二節で、二行目の scheun と韻を踏ませるために in die Wüstenein となってはいるが、正確には in die Wüsteneien だろう。「荒涼とした土地」を意味する Wüste からの造語で、石井不二雄訳では

他人を怖れねばならぬような
悪事を別にしたのではない―
何という馬鹿げた欲求が
荒野に僕を駆り立てるのか？

となっている。

(37)

Es geschah in alten Tagen
Daß der liebe Gott befahl:
„Wer nicht will die Wahrheit sagen,
Wird ein Stottrer allzumal.“

Wie bei Greisen, Männern, Buben
Da die Stotterei begann!
Auch die Officianten huben
Alle gleich zu stottern an.
(Hoffmann von Fallersleben, Die Wahrheitsbill)

(38)

ERSTER KNECHT. Is aber ein rarer Mann, der neue Herr Gartner, und ein rüstiger Mann.

ALLE. Das ist wahr.

PLUTZERKERN. Oh, kurzsichtiges Volk, ein fauler Kerl is er, glaubt's mir, ich versteh' das, der wird uns keiner Arbeit über heb'n, im Gegenteil, wir werden ihn noch bedienen sollen, den hergeloffnen Ding und er wird d' Händ' in Sack stecken, den gnädigen Herrn wird er spielen wollen, der aufgeblas'ne Tagdieb.

DIE KNECHTE. Wär' net übel.

ERSTER KNECHT. Da soll ihm ja gleich –

PLUTZERKERN. Ruhig jetzt! – *Zu diesen und ähnlichen Schimpfereien hab'n wir heut' abend die beste Zeit*, wir können uns dann auch gleich z'sammreden, wie wir ihn wieder aus'm Haus vertreiben wollen.

ALLE. Ja, das wollen wir.

(Johann Nepomuk Nestroy, Der Talisman, 2.Aufzug, 1.Auftritt)

第一の下働き　それにしても、えれえ男だ、今度の庭師さんは。それに、たくましい。

一同　本当だ。

プルッツァーケルン　ああ、眼の効かねえ連中だな。怠け者だぜ、あれは。間違いねえ。おれには分かるんだ。あれは、おれたちの仕事を減らすどころか、反対に、やつにもっと仕えるようにされてしまうぞ、― どこの馬の骨かも分かんねえのに。で、あいつはポケットに手をつっこんで、旦那ぶろうっていうんだ。あの高慢ちきの怠け者めが。

下働きたち　いいぞ、いいぞ！

第一の下働き　じゃ、すぐにもやつに ―

プルッツァーケルン　まあ、静かにしろ。こんな悪口やおんなじようなのを言うのに、今夜はうってつけだぜ。その時また、どうやってあいつをこのお屋敷から追い出すか、相談しようぜ。

一同　そうだ、そうしよう。

（ヨーハン・ネポムック・ネストロイ、厄除け、
第二幕、第一場、今井寛訳）

(39)

Die Verbindung war von kurzer Dauer: das drittemal, daß beide miteinander aus waren, kam der Begleiter nicht mehr mit zurück. Ein anderer wurde angeschafft, der etwas länger Treue hielt, *und jedenfalls schrieb ich der Stockliebhaberei ein gut Teil von der Ausdauer zu, womit Mozart drei Wochen lang der Vorschrift seines Arztes ganz erträglich nachkam.* Auch blieben die guten Folgen nicht aus; wir sahen ihn fast nie so frisch, so hell und von so gleichmäßiger Laune.

(Eduard Mörike, Mozart auf der Reise nach Prag)

ところがその交りも束の間で、三度目に一緒に出掛けました時は、もうお伴は歸っては参りませんでした。そこでもう一本求めましたが、その方はも少し長く忠實に務めました。兎も角、モーツァルトが三週間もよく辛棒して醫者の吩咐(いいつけ)を相應に守り通せませたのは、このステッキ熱が随分手傳ってゐると思ひました。ところで流石(さすが)にその効き目は争はれず、私達、あの人があんなに元氣で、晴々としたむらのない機嫌でゐたのを、見たことがないくらゐになりましたの。

（エドゥアルト・メーリケ、旅の日のモーツァルト、石川錬次訳）

(40)

Die Mädchen sahen ihn noch lange, wie sich die graue Gestalt in dem grauen Gesteine regte, winzig klein, bis nichts mehr sichtbar war, als die ruhige schon im Nachmittagsschatten stehende Wand.

Man sah sich wechselweise an. Wars ein Traum, daß in der Wildnis nur eben eine andere Stimme erklungen war als die ihre – die Sonne schien, wie immer, die Vögel zwitscherten, und der blaue Waldhimmel sah hernieder. *Gregors Stimme tönte plötzlich recht sanft in die Träumerei:* „Der Mann muß Euch sehr lieben.“

(Adalbert Stifter, Der Hochwald, 5.Kapitel Waldwiese)

若者の灰色の姿が、灰色の岩の間に豆粒のように小さく動き、午後の影に包まれてひっそりと立っている岩壁のほかには何も見えなくなるまで、娘たちは長い間若者の姿を追っていた。

娘たちは顔を見つめあった。このあらあらしい場所に、娘たちの声のほかに今までだれかの声が響いていたのが夢のようであった。―日の光はいつものように輝き、鳥もさえずり、森の上に青い空が広がっていた。ふいにこの夢心地のなかへグレゴールの声が静かに響いた、「あの若者はお嬢さまを心から愛していますな。」

（アーダルベルト・シュティフター、
喬木林、五　森の草地、望月市恵訳）

(41)

Auch in den Heidedörfern war diese Sitte, Geld zu sparen, allgemein verbreitet. Der Maulwurffänger, dem solche Kleinigkeiten, auf die so leicht Niemand achtet, niemals entgingen, *und der in wohlhabenderen Ortschaften auch häufig über gräuliche Knauserei spottete*, hatte dies wohl in Ueberlegung gezogen. Blieb man dem Herkommen treu, so konnten Tage vergehen, ohne daß irgend Jemand den Aufruf sah und las, denn leider hielt man zwar das Blättchen, sah aber nicht hinein! Es mußte daher das achtlose, stumpfsinnige Volk gleichsam mit Gewalt zu Ansicht des Wochenblattes gezwungen werden. Dies konnte nur durch unentgeltliche Vertheilung und durch besondern Hinweis auf etwas Beherzigenswerthes, das darin enthalten sei, geschehen, und darum ergriff unser Freund dies sicherste und kürzeste Mittel.

(Ernst Willkomm, Weisse Sclaven oder die Leiden des Volkes,
5.Theil, 8.Buch, 5.Kapitel)

(42)

Unterdessen ging es fort mit seinen religiösen Quälereien. Je leerer, je kälter, je sterbender er sich innerlich fühlte, desto mehr drängte es ihn, eine Glut in sich zu wecken, es kamen ihm Erinnerungen an die Zeiten, wo Alles in ihm sich drängte, wo er unter all' seinen Empfindungen keuchte; und jetzt so tot. Er verzweifelte an sich selbst, dann warf er sich nieder, er rang die Hände, er rührte Alles in sich auf; aber tot! Tot! Dann flehete er, Gott möge

ein Zeichen an ihm tun, dann wühlte er in sich, fastete, lag träumend am Boden. [...]

(Georg Büchner, Lenz)

そのあいだも彼の宗教上の煩悶はつづいた。心の中がますます空虚に、冷たく、死に近づいてゆくのを感じれば感じるほど、ますます内部に灼熱の火を燃え立たせたい衝動に駆られた。すべてが内でひしめきあった時代、ありとあらゆる感情にあえいだ時代の思い出の数々が浮かんできた。それなのにいまはまるで死だ！ 彼は自分自身に絶望した。それから彼はひれ伏した。手を揉んだ。自分の中のいっさいを掻き立てた ― しかし死んでいる。死んでいる。それから彼は神に何かしるしを垂れ給うように祈願した。それから自分の中を掻きまわし、食をことわり、夢心地で床(ゆか)に横たわった。

（ゲオルク・ビューヒナー、狂ってゆくレンツ、手塚富雄訳）

(43)

[...] „Es bleibt dir“, versetzte Adolf scharf, „mich mißzuverstehen. Die Alte sitzt gewiß nicht unsertwegen da, sie wartet auf Gäste, und welcher Art diese sind, ist schwer zu sagen. Sieh nur, wie sie sich *das Auge, das ihr von der letzten Schägerei her übrigblieb*, reibt, um den Schlaf, der sie beschleicht, zu verscheuchen, und wie sie das zahnlose Maul verzieht! Eine Schenke ist’s ohnehin, denn drüben in der Ecke stehen Flaschen und Gläser. Aber wie du, so ich.“

(Friedrich Hebbel, Eine Nacht im Jägerhaus)

［…］「君は」とアドルフは鋭く應じた。「僕の云うことをわざわざ曲解しようとするんだね。あの婆あはむろん、僕たちのためにあそこの坐ってゐるんぢゃないぜ。お客を待ってゐるのさ。さうしてそれがどんな種類のお客か、そりゃちょっと云へないね。まあ、見ろよ。あの婆あが最近のなぐり合ひでとりとめた片目を、おそって來る眠氣を追拂はうとして、こすっている様子をさ。さうして歯のない口をゆがめてゐる様子をさ。もともとここは居酒屋なんだ。向ふの隅に瓶やコップが竝んでゐるもの。しかし僕は君のとほりにするよ。」

（フリードリヒ・ヘッベル、山番小屋の一夜、實吉捷郎訳）

(44)

Seit Eintritt des langen und dann nur noch ausnahmsweise unterbrochnen Hausarrests, namentlich aber infolge fortwährender Übelkeit, oder mich süddeutsch à la Madame Karl Blind, ehemalige Cohen, *ästhetisch* ausdrückend, *infolge täglicher „Kotzerei“* – (Folge dies des Hustens) – war ich wenig bis jetzt fähig, die Revision voranzustoßen. Doch glaube ich, mit Geduld und pedantischer Selbstkontrolle bald wieder ins Gleis zu kommen.

(Karl Marx, Brief an Friedrich Engels in London, Vontnor, 10. Januar 1883)

(45)

Lene, die wohl merkte, daß es sich um Balafré handelte, tat ein paar Fragen und frug unter anderm auch wieder, warum die Herren eigentlich die sonderbaren Namen hätten. Sie habe schon früher danach gefragt, aber nie was gehört, was der Rede wert gewesen wäre.

„Jott“, sagte die Königin, „es soll so was sein und soll keiner was merken *und is doch alles bloß Ziererei*. Denn erstens kümmert sich keiner drum, und wenn sich einer drum kümmert, is es auch noch so. Und warum auch? Wen soll es denn schaden? Sie haben sich alle nichts vorzuwerfen, und einer ist wie der andre.“

Lene sah vor sich hin und schwieg.

(Theodor Fontane, Irrungen, Wirrungen, 13.Kapitel)

レーネには、あの人といふのがバラフレだといふことはよく分ってゐたので、二つ三つものを尋ねた序(ついで)に、男の人達にはどうして變な名前がついてゐるのかといって尋ねてみた。前にもお尋ねしたことがあるんですけど、答へらしい答へは聞かしていただけなかったもんですから。

『さあ』と女王は言った、『何か人に分らないやうな意味があるんでせうけど、つまりはただ氣取ってゐるだけなんでせう。第一、誰も氣にするものはないし、氣にする者があったって、平氣で矢っ張り使

ふんでせう。何故かって、誰の害にもならないことなんですもの。みんなお互いに文句の言へた義理ぢゃないんでせう、みんな同じやうな人ですから。』

レーネは目の前を見つめて黙ってゐた。

（テーオドール・フォンターネ、迷路、第十三章、伊藤武雄訳）

(46)

Heinrich hatte unterdessen endlich ausgetobt, *die Schluchzerei, deren er sich schämte, und der Scherz hatten ihn erleichtert und ruhiger gemacht*, und er nahm sich nun zum allerletzten Mal bestimmt vor, Dortchen gut zu sein, ohne an etwas Weiteres zu denken noch sich zu bekümmern, und seine Gedanken nach anderen Dingen und nach seiner Zukunft zu richten. [...]

(Gottfried Keller, Der grüne Heinrich[Erste Fassung], 4.Band, 13.Kapitel)

(47)

Am III.Band habe ich seit Februar keinen Strich tun können. Der verfluchte Pariser Kongreß hat mir eine solche Masse Korrespondenz nach allen Weltteilen aufgeladen, daß alles andre zurücktreten mußte. Die Leute haben überall die internationale Fühlung verloren und kramten infolgedessen die unbegreiflichsten Pläne aus – *es hätte aus lauter gutem Willen und mangelnder gegenseitiger Kenntnis der Personen, Dinge und Verhältnisse die schönste Katzbalgerei gegeben*, man hätte sich überall mit seinen Freunden verfeindet, ohne sich mit seinen Feinden zu versöhnen. Das ist nun glücklich überstanden [...]

(Friedrich Engels, Brief an Conrad Schmidt in Berlin,

London, 17.Oktober 1889)

(48)

Dienstfertig, einschmeichelnd, unentbehrlich, dabei voller Grazie trotz ihrer Jahre, hatte die Enkelin des Agrippa d'Aubigné einen lehrhaften Gouvernantenzug, der sie in ihrem Saint-Cyr unter den Edelfräulein, die sie dort

erzog, behaglich den Lauf ließ, die aber vor dem Gebieter zu einem bescheidenen Sichanschmiegen an seine höhere Weisheit wurde. Dergestalt hatte, wann Ludwig schwieg, auch sie ausgeredet, besonders wenn etwa, wie heute, die junge Enkelfrau des Königs, die Savoyardin, das ergötzlichste Geschöpf von der Welt, das überallhin Leben und Gelächter brachte, *mit ihren Kindereien und ihren trippelnden Schmeichelworten* aus irgend einem Grunde wegblieb.

(Conrad Ferdinand Meyer, Das Leiden eines Knaben)

アグリパ・ドービニュの孫にあたる彼女は、まめで愛想がよく、重寶がられ、しかも齢に似あはずあでやかであったが、その半面に傅育官めいたところがあって、人間の良心を導くのに権威をもって臨むといふ風で、サン・シールの塾では、自分の教へ子の貴族の令嬢らに對して何の氣がねもなくさうした性向を発揮してゐた。けれども、主権者をまへにするやうになってから、それは、よりすぐれた明識につつましく随順するといった風にかはった。だから、王が口をつぐんでゐると、彼女は話に窮した。殊に今日のやうに、王の孫娶（むすめ？）の、随所に活氣と哄笑をもたらす世にも愉快な、サヴォイ生れの若夫人が何かの用で不在で、子供子供した愛嬌や甘ったれた言葉で座をにぎははせてくれないとなると、なほさら困るのであった。

（コンラート・フェルディナント・マイヤー、

鞭の下の青春、春田伊久蔵訳）

(49)

[...] Kein Junge!? Wohl ist es ein Junge, Gevatter Pechdraht – zwar keiner von die*(sic)* schwersten, aber doch ’n Junge wie was! Und wieso ist’s kein Junge? Ist nicht der Buohnohpartch, der Nahpohlion wieder unterwegens über Wasser, *und gib’s nicht Krieg und Katzbalgerei zwischen heut und morgen*, und braucht man etwas keine Jungen, und werden nicht etwan in jetziger gesegneter und geschlagener Zeit mehr Jungen als Mädchen drum in die Welt gesetzt, und kommen nicht auf ein Mädchen drei Jungen, und kommt Ihr mir so, Gevatter, und wollt einer gewickelten und gewiegten

Perschon nichtswürdige Fragen stellen? [...]

(Wilhelm Raabe, Der Hungerpastor, 1.Kapitel)

(50)

Denn eben in dem Zusammenwirken jenes äußeren Faktors mit den von innen wirkenden Kräften entstand nun die Veränderung in der Stellung der Philosophie, *welche von dem Auftreten der Skeptiker, Epikureer und Stoiker bis auf die Schriftstellerei des Cicero, Lucretius, Seneca, Epictet und Marc Aurel sich entwickelte*. [...]

(Wilhelm Dilthey, Das Wesen der Philosophie,

A. Historisches Verhalten zur Bestimmung des Wesens der Philophie)

というのは、かの外的要素と内部からはたらく力とが一緒になってはたらくことによって、哲学の状態に變化が生じた。その變化した状態は、懐疑論者やエピクロス派やストア學派の出現から、キケロ、ルクレチウス、セネカ、エピクテートス及びマルクス・アウレリウスの著作に至るまで発展したものである。[…]

（ウィルヘルム・ディルタイ、哲學の本質、

第一部 哲學の本質を規定するための歴史的手續き、戸田三郎訳）

たぶん Schriftsteller からの即席造語と想われる Schriftstellerei などという見慣れぬ言葉を、もしやと思って Joachim Heinrich Campe の „Wörterbuch der deutschen Sprache“ (1810) で引いてみると、Oft ist damit ein nachtheiliger Nebenbegriff verbunden. とある。-ei はまさに pejorativ な接尾辞と言えるだろう。

(51)

„Allerdings“, rief ich, „ich habe Ihnen schon wiederholt gesagt, *daß im Leiden ein seltsamer Reiz für mich liegt, daß nichts so sehr imstande ist, meine Leidenschaft anzufachen als die Tyrannei, die Grausamkeit, und vor allem die Treulosigkeit eines schönen Weibes*. Und dieses Weib, dieses seltsame Ideal aus der Ästhetik des Häßlichen, die Seele eines Nero im Leibe

einer Phryne, kann ich mir nicht ohne Pelz denken.“

(Leopold von Sacher-Masoch, Venus im Pelz)

「もちろんです」と私は叫んだ、「もう何遍も申し上げた通り、私には苦痛のなかに奇妙な魅力があって、暴虐や残酷さほど私の情熱の火を煽り立ててくれるものはまたとないのです。それもとりわけ美しい女性の情(つれ)なさに勝るものはない。この女、醜の美学から生れたこの奇妙な理想、妖婦フリーネの肉体に宿ったネロの魂を、私は毛皮なしには考えることができません」

（レオポルト・フォン・ザッヘル＝マゾッホ、

毛皮を着たヴィーナス、種村季弘訳）

(52)

„Freilich wohl“, sagte der Lehnerferdl, das war auch einer vom Tagwerk und nebenbei im ganzen Ort als verwegener Bursche bekannt, *war keine Rauferei oder kein Unfug ohne ihn*. „Freilich wohl“, sagte der, „so kommt’s und naderscht nit. Ich wüßt’, was man tun sollt’, aber ös seids lauter Letfeig’n und ein allein richt da nix. Hinüber sollt’ man, mit des Grafen Tagwerkern sollt’ man reden, mit ihnen übereins werden und die höllischen Maschinen herausholen aus ’m Stadel und zurichten, daß s’ kein Teufel mehr auf gleich bringt.“

(Ludwig Anzengruber, Die Märchen des Steinklopferhanns, II)

(53)

„Das sind meine Freunde und Begleiter“, sagte Klekih-petra, wobei er erst auf den Vater und dann auf den Sohn deutete. „Dies ist Intschu tschuna, der große Häuptling der Mescaleros, der auch von allen übrigen Apatschenstämmen als Häuptling anerkannt wird. Und hier steht sein Sohn Winnetou, der trotz seiner Jugend schon mehr kühne Taten verrichtet hat als sonst fünf alte Krieger in ihrem ganzen Leben. Sein Name wird einst genannt und gerühmt werden, soweit die Savannen und Felsengebirge reichen.“ Das klang überschwenglich, war jedoch, wie ich später erfuhr, nicht zuviel gesagt.

Rattler aber lachte höhnisch auf.

„So ein junger Kerl soll schon große Taten begangen haben? Ich sage mit Absicht, begangen', *denn was er ausgeführt hat, werden doch nur Diebereien, Spitzbübereien und Räubereien gewesen sein*. Man kennt das ja. Die Roten stehlen und rauben alle."

(Karl May, Winnetou, 1.Band, Klekih-petra)

「これがわたしの連れの友人だ」 クレキ・ペトラは先ず父親を、それから息子を指さしながらいった。

「こちらはインチュ・チュナ、メスカレロ・アパッチの偉大な酋長だ。他のすべてのアパッチ族からも、首長としてあがめられておる。それからここにいるのが、その息子のヴィネトゥー、まだ若いが、既にかずかずの勇敢な行為によって、老練の戦士五人が、全生涯をかけた以上のことをしてきておる。彼の名はいつか、大草原(サバンナ)と岩山地帯の果ての果てまで、人びとの口の端(は)にのぼって讃えられるであろう」

この言葉はいかにもオーバーに聞こえた。だが、わたしがその後知ったところでは、決して誇張ではなかった。しかし、ラトラーは馬鹿にしたようにふきだした。

「こんな若造(わかぞう)が ― 今からもう、そんなどでかいことをやらかしたと？ 《やらかした》といったはわけあってのことだ。どうせこんな奴のやったことは、盗みか、欺(だま)しか、略奪ぐらいのもんだろうからな。わかりきったことよ、インディアンどものやるのは、みんな盗みか略奪だ」

（カール・マイ、ヴィネトゥー、第一巻 クレキ・ペトラ、

山口四郎訳）

(54)

Der Vater war über dieses soldatische Feuer seines Lieblings natürlich hoch erfreut: „Sei ruhig, mein tapferer Junge", erwiderte er auf Ottos Seufzer über den drohenden Frieden und klopfte ihm beifällig auf die Schulter, „Du hast ein langes Leben vor dir. Wenn auch jetzt der Feldzug zu Ende wäre, in den nächsten Jahren muß es doch wieder losgehen." Ich sagte nichts. Seit meinem

letzten Ausfall gegen Tante Marie hatte ich, auf Friedrichs Weisung, den Vorsatz gefaßt und ausgeführt, *die leidigen Streitereien über das Thema Krieg möglichst zu vermeiden*. Es konnte ja zu nichts führen als zu Bitterkeiten; und seitdem ich die Spuren der grausigen Geißel mit eigenen Augen gesehen, hatte sich mein Haß und meine Verachtung des Krieges so vertieft, daß mir jede Verteidigung desselben wie eine persönliche Beleidigung in die Seele schnitt. [...]

(Bertha von Suttner, Die Waffen nieder!, Eine Lebensgeschichte,
4.Buch 1866)

(55)

Wahnsinnige sind sie mir alle und kletternde Affen und Überheiße. Übel riecht mir ihr Götze, das kalte Untier: übel riechen sie mir alle zusammen, diese Götzendiener.

Meine Brüder, wollt ihr denn ersticken im Dunste ihrer Mäuler und Begierden? Lieber zerbrecht doch die Fenster und springt ins Freie.

Geht doch dem schlechten Geruche aus dem Wege! *Geht fort von der Götzendienerei der Überflüssigen!*

Geht doch dem schlechten Geruche aus dem Wege! Geht fort von dem Dampfe dieser Menschenopfer!

(Friedrich Nietzsche, Also sprach Zarathustra,
1. Teil, Die Reden Zarathustras, Vom neuen Götzen)

わたしから見れば、かれらはみな狂人であり、よじのぼる猿であり、熱にうかされた者である。かれらの偶像、この冷ややかな怪獣は悪臭を放つ。かれら、この偶像を崇拝する者ことごとく悪臭を放つ。

わが兄弟たちよ、あなたがたは、かれら欲望の口もとから出てくる毒氣のなかで窒息する気なのか？ むしろ窓を打ち破って、外へ飛び出すがいい！

悪臭から逃れよ！ あらずもがなの人間たちが営む偶像礼拝から逃れよ！

悪臭から逃れよ！ これらの人身御供からたちのぼる濛気（もうき）から脱出

せよ！
（フリードリヒ・ニーチェ、ツァラトストラはこう言った、
第一部、ツァラトストラの教説、新しい偶像、氷上英廣訳）

第二項の〈造語上のタイプ〉のところでも述べたように、Götzendienerei はGötzen dienen からの即席造語だが、Geht fort von der Götzendienerei der Überflüssigen! の氷上訳「あらずもがなの人間たちが営む偶像礼拝から逃れよ」はさすがと言わざるを得ない。

(56)

ROBERT. Hm! Also du wußtest, daß sie mit ihm – ging?

FRAU HEINECKE. Ne. Ich dachte es mir nur.

ROBERT. Und wenn du sie fragtest?

FRAU HEINECKE. Wozu fragen? *Das gibt unnütze Rederei*. Ein Mädchen muß von alleine wissen, was es zu tun hat.

ROBERT. So, so!

FRAU HEINECKE. Aber daß sie – o wer hätte das gedacht! Jeses, wie du zitterst! – ich muß dir jleich*(sic)* eine warme Stube machen! *(Geht nach hinten zum Ofen.)*

RPBERT *(für sich)*. Kein Ausweg! Keine Rettung! Schande – ein Leben lang nichts wie Schande!

FRAU HEINECKE *(zur Küche hin)*. Vater, bring die Koaks rein.

(Hermann Sudermann, Die Ehre, 3.Akt, 1.Szene)

ローベルト　成程。ぢゃ、お母さんは、あの娘が、あの男と一緒に出掛けるのを、知ってたといふんですね。

ハイネッケの妻　いや、わたしは、さう思っただけの事です。

ローベルト　あなたが、あの娘に訊ねた時の返事は？

ハイネッケの妻　何の爲に訊きますものか、訊いた處で、つまらない極り文句を聞かされるばかりです。一體、娘っ子は、自分のやる事を、自然にのみ込んでゐる筈のものです。

ローベルト　成程、さうですかね。

ハイネッケの妻　が、あの娘が、― そんな事とは誰が考へるものかね ― おや、こりゃいけない、　あんた、顫へてるぞ ― すぐに、部屋を温めなくちゃ。（奥のストーブの方へ行く）

ローベルト（獨白）八方塞りだ、救ひやうが無い。汚辱 ― 一生涯、汚辱以外の何ものもないのだ。

ハイネッケの妻（臺所の方へ）おとっつあん、石炭を運んで下さい。

（ヘルマン・ズーデルマン、名譽、第三幕、第一場、木村謹治訳）

(57)

[...] Melitta hat einen Fehler gemacht. Sie hat einen folgenschweren Fehler gemacht, hat böse Gedanken in mir aufgerufen. Eine frostige Welle der Entfremdung stieg in mir auf. Die erste Nacht in Amerika hatte ich mir als möglicherweise schlaflos gedacht, aber gewiß nicht so, wie ich sie durchwacht habe. War eine Frau, der es möglich ist, in einem solchen Augenblick die Beleidigte zu spielen, sich berechnend und geizig zurückzuhalten, statt mir beim ersten Schritt auf fremden Boden wortlos um den Hals zu fallen, der Martyrien wert, die ich um ihretwillen erlitten, des Opfers, das ich ihr gebracht habe? Wenn es so stand, waren dann nicht meine Bangnisse, meine marternden Sorgen, mein unerträglichen Ängste um sie lächerlich? Lag nicht in einem solchen Verhalten eben die Lieblosigkeit, die Melitta den beinahe tückischen Streich ihrer Flucht möglich gemacht hatte zu einer Zeit, als ich auf ihren Wunsch von Anja getrennt lebte? Zum Teufel, glaubte man etwa jetzt das Heft in Händen zu halten, hielt mich für besiegt und wollte mich diesen Zustand fühlen lassen? Habe ich noch nicht genug gelitten, und ist mir eine Art Canossa zugedacht? Um Himmels willen, ich mag das nicht ausdenken. Aber wenn etwas Ähnliches in der Luft läge, *ich wäre von meinen Gefühlsdudeleien sofort geheilt*.

(Gerhart Hauptmann, Buch der Leidenschaft,

2.Teil, An Bord der „Möwe“, 10.Februar 1895)

過(あやま)ったのはメリッタである。彼女は、重大な結果を生むやうな過ちを犯したのだ。私の心によからぬ考へを呼びさましたのだ。冷酷な、

自然と遠のいて行くやうな心の波が、私の中に高まって來た。亜米利加についた最初の夜は、多分眠れないままに明けるであらうとは考へてゐた。だが、しかし、こんな風に徹夜して、夜を明かさうなどとは夢にも思ってゐなかったことである。メリッタは、私が、最初の一歩をこの見知らぬ異國の土地へ印した時、聲もなく私の首にしがみつくやうな女ではなかった。侮辱されたのはこちらのはうだといはぬばかりの顔をして、色々と打算し、さもしく踏み止り得るやうな女なのだ。この女のために、私は殉難の苦しみを耐え忍び、犠牲を捧げたのであったが、はたして、それだけの値打ちがメリッタにあったであらうか？もしそれだけの値打ちがなかったとすれば、私に蒙った不安、噛むやうな心配、堪えがたい苦悶は、まことに笑止の沙汰である。さうした態度の中にでも、折角彼女の希望を入れ、アンヤと別々に暮してゐる時を見はからって、逃亡などといふ、殆んど悪意としかとれない仕打が出來るやうな、あのメリッタ獨自の冷酷さがひそんでゐたのではなからうか？ 畜生！奴等は今、私をどうにでも出來ると考へ、私を敗残者と見做して、この境遇をいやといふ程、痛感させようとでも考へてゐるのであらうか。そして、あのカノッサ城の運命を負ふものは、この私とでも考へてゐるのであらうか。しかし、少しでもそれに似たやうな氣配が起りさうなら、むしろ、私はすぐにでもこのもやもやした感じから救はれるであらうに。

（ゲルハルト・ハウプトマン、情熱の書、第一部、紐育、グランド・ユニオン・ホテルにて、一八九五年二月十五日、川崎芳隆訳）

(58)

[...] Alles andere ist würdelos und rächt sich. Verletzung ihrer Interessen verzeiht eine Nation, nicht aber Verletzung ihrer Ehre, *am wenigsten eine solche durch pfäffische Rechthaberei*. Jedes neue Dokument, das nach Jahrzehnten ans Licht kommt, läßt das würdelose Gezeter, den Haß und Zorn wieder aufleben, statt daß der Krieg mit seinem Ende wenigstens s i t t l i c h begraben würde. [...]

(Max Weber, Politik als Beruf)

［…］これ以外の言い方はすべて品位を欠き、禍根をのこす。国民は利益の侵害は許しても、名誉の侵害、中でも説教じみた独善による名誉の侵害だけは断じて許さない。戦争の終結によって少なくとも戦争の道義的な埋葬は済んだはずなのに、数十年後、新しい文書が公開されるたびに、品位のない悲鳴や憎悪や憤激が再燃して来る。

［…］

（マックス・ウェーバー、職業としての政治、脇圭平訳）

statt daß der Krieg mit seinem Ende wenigstens s i t t l i c h begraben würde の脇訳「戦争の終結によって少なくとも戦争の道義的な埋葬は済んだはずなのに」は誤訳ではなかろうか。〈非事実の接続法〉にはかならず〈前提部〉と〈推定部〉があるが、ここでは der Krieg が〈前提部〉の役割を担っているので、「もしも戦争の場合だったら、少なくとも道義的にはすべて決着がついているはずなのだが」と解すべきであろう。

(59)

Melchior. Es giebt keine Aufopferung! Es giebt keine Selbstlosigkeit! – Ich sehe die Guten sich ihres Herzens freu'n, sehe die Schlechten beben und stöhnen – ich sehe dich, Wendla Bergmann deine Locken schütteln und lachen und mir wird so ernst dabei wie einem Geächteten. – – Was hast du vorhin geträumt, Wendla, als du am Goldbach im Grase lagst?

Wendla. – *Dummheiten – Narreteien* –

Melchior. Mit offenen Augen?!

(Frank Wedekind, Frühlings Erwachen, 1.Act, 5.Scene)

メルヒオル　犠牲なんてものは世の中にはありやしないんだ。献身なんてものもありやしないんだ。……僕は善人が自分の情けを楽しんでゐるのを見たり、悪人が顫へたり呻いたりしてゐるのを見てるだけだ。……だが僕は君の髪の毛が揺れたり、笑ったりしてゐるのを見てると、僕は追放された人間のやうに眞面目な氣持になるよ。……さっきねえ、ヴェンドラ、小川の草の中に寝てた時、どんな夢を見てたい。

ヴェンドラ　そりゃ莫迦莫迦しいの……つまらない夢よ。……
メルヒオル　目をあけてゐたのかい。
（フランク・エエデキンド、春の目覚め、秦豊吉訳）

(60)

[...] Wie wir auf Manöver waren, hab' ich den Chargen von der Kampagnie Britannikas geschenkt; – einmal hab' ich gehört, wie ein *Mann hinter mir bei den Gewehrgriffen was von „verfluchter Rackerei*" g'sagt hat, und ich hab' ihn nicht zum Rapport geschickt – ich hab' ihm nur gesagt: „Sie, passen S' auf, das könnt einmal wer anderer hören – da ging's Ihnen schlecht!"

(Arthur Schnitzler, Leutnant Gustl)

［…］機動演習に行った時も、中隊の下士達にブリタニカ煙草をやったし、― いつかも銃の操縦法の時、誰か後ろで「ええ七面倒くせえこった」とか何とか云った時も、己は告発なんかしなかった、只其奴に向って「君、用心し給へ、人に聞こえないとも限らんぜ、そしたら只ぢゃ済まんから」と云っただけだった……
（アルトゥール・シュニッツラー、グストゥル少尉、石川錬次訳）

(61)

[...] Ja, es fragt sich, wer mehr zurückbehält, der alle Dinge auskostet, oder der, dem es glückt, sich von keinem fangen zu lassen. Auf seiten des Verzichtes liegt die Moral, aber man wird bald dahinterkommen, *daß er nicht Sache der Tugend ist, sondern der Liebhaberei*, genau wie das Klettern, ein Sport, dem des Fliegers vergleichbar, der, vom Boden losgerissen, auf der Luft dahinzieht. So ist der Wüstling für den andern wie der andere für den Wüstling ‚*l'ingénu*.'

(Annette Kolb, Das Exemplar, 7.Kapitel)

(62)

Kremskoje, 1.Juli

Lieber Peter! Das beste wäre, Du gingst mit nach Paris. Meine Mutter

wünscht es, weil sie Dich für verständiger hält als uns, denn sie ist auch einverstanden, und mir mußt Du nur versprechen, kein verliebtes Gedusel mit Katja anzufangen. So bist Du ja aber auch nicht; was Du im Innern fühlst, ist mir natürlich einerlei. Wenn Deine Kurse sich durch Deine Abreise auflösen, ist es um so besser.

Papa hat noch Schererei genug, er kann einem wirklich leid tun. *Mit der Gesinnungsmeierei kann es ja dann wieder losgehen, wenn wir zurückkommen*. Ich meinerseits mache sehr gern mal eine Pause. In Paris wirst Du Dich auch noch politisch entwickeln, ich sehe dich schon als gereiften Robespierre ins heilige Rußland einbrechen.

Unbedingt Dein Welja

(Ricarda Huch, Der letzte Sommer)

(63)

Einen Tag danach, wie ich aus der Klasse kam, saß die Marie auf dem Kanapee im Wohnzimmer und heulte furchtbar. Und meine Mutter hielt ihr den Kopf und sagte: „Das wird schon, Mariechen. Sei ruhig, Kindchen!“

„Nein, es wird niemals, ganz gewiß nicht, der Lausbub tut es mit Fleiß, daß ich unglücklich werde.“

„*Was hat sie denn schon wieder für eine Heulerei?*“ fragte ich.

Da wurde meine Mutter so zornig, wie ich sie gar nie gesehen habe.

(Ludwig Thoma, Lausbubengeschichten, Die Verlobung)

その一日あと學校から歸って見ると、マリイが居間の長椅子に坐っておいおい泣いてゐる。そしてお母さんがマリイの頭を支えてやりながらかう云ってゐた。「きっとうまく行くよ、マリイ。泣くのはおよしよ。ね。」

「いゝえ、もうどうしてもだめよ。さうにきまってるわ。腕白小僧があたしを不仕合せにしようと思ってわざとあんなことをするんですもの。」

「何を又姉さんはわいわい泣いてるのさ。」とおれは尋ねた。

するとお母さんは、今迄おれが一度も見たことがないほど腹を立て

た。

（ルウドヰヒ・トオマ、悪童物語、婚約、實吉捷郎訳）

(64)

[...] Kaum hatten wir die Küste erreicht, *als unter dem Gepäck eine förmliche Meuterei ausbrach*. Sie begann damit, daß der dunkelbraune Handkoffer beim Ausbooten über Bord sprang – – (oder fiel, wie man es nehmen will). Es war finstere Nacht und keine Möglichkeit, ihn wiederzubekommen.

(Franziska Gräfin zu Reventlow, Das feindselige Gepäck)

(65)

Der Brief, den er in Gedanken schrieb, war weit über dieser dürftigen Inhaltsangabe, die beweglichsten Worte kamen ihm ungesucht, die schönen Wendungen hingen sich kettenweise aneinander. Er redete von dem schönen Besitz der Familie Finazzer und von ihrer altadeligen Abstammung, *ohne Prahlerei*, auf eine Weise, die ihn selbst zufriedenstellte, nebenhin und doch mit Nachdruck. Hätte er nur ein Tintenfaß und eine Feder zur Hand gehabt, er wäre aus dem Bett gesprungen, und der Brief wär in einem Schwung geschrieben. So aber fing die Müdigkeit an, ihm die schöne Kette auseinanderzulösen, andere Vorstellungen drängten sich dazwischen, und lauter widerwärtige und ängstliche.

(Hugo von Hofmannsthal, Andreas, Die wunderbare Freundin)

彼が心中に思いえがいた手紙は、こんな乏しい内容ではなく、それを遙かにこえていた。大きく激動する感激の言句が、探しもしないのにどんどんと流れ出た。美しい表現が数珠つなぎとなって連なってきた。彼は、フィナッツァー家の美しい邸や地所のこと、この家の古い貴族の家系のことなどを、何一つ誇る色は見せず、しかし彼自身には満足のゆく程度に、少し触れた。しかしその個所には、力が籠もっていた。手もとにインク壺とペンを持っていたら、彼はベッドから飛びおきて、一気呵成に手紙を書き上げていただろう。しかしやがて、疲労が彼の美しい鎖を解きはじめた。そのほかのさまざまな想念が割り

こんできた。それはひどく不愉快な、不安な想念であった。
（フーゴ・フォン・ホーフマンスタール、アンドレーアス、
ふしぎな女友だち、高橋英夫訳）

(66)

DER OPTIMIST: Wenn der Krieg keinen kulturellen Segen stiftet, so stiftet er ihn für keines der beteiligten Völker. Falls Sie nicht etwa prinzipiell entschlossen sind, kulturelle Möglichkeiten nur dort zuzugeben, wo Franktireure schlafende Soldaten ermorden.

DER NÖRGLER: Gewiß dort nicht, wo eigens ein Wolff'sches Büro existiert, um es zu behaupten. Aber es wäre selbst auf dem heutigen Stand der Menschheit ein Unikum, daß Flieger, die Bomben auf Säuglinge werfen, sich eines völkerrechtlich erlaubten Kriegsmittels bedienen, und Franktireure, die einen Mord begehn, um einen Mord zu rächen, es nur deshalb nicht tun dürfen, weil sie nicht die Lizenz haben, weil sie nicht unter einem Kommando morden, sondern aus einem andern unwiderstehlichen Zwang, *nicht aus Pflicht, sondern aus Raserei*, also aus jenem einzigen Motiv, das den Mord halbwegs entschuldigt; weil sie unbefugte Mörder sind, die sich weder durch das dazugehörige Kostüm noch durch die Zugehörigkeit zu einem Ergänzungsbezirkskommando, Kader, Ersatzkörper oder wie die Schmach sonst heißt, ausweisen können. Lassen Sie mich über den sittlichen Unterschied zwischen einem Flieger, der ein schlafendes Kind tötet, und einem Zivilisten, der einen schlafenden Soldaten tötet, nicht richten. Ihnen selbst soll, wenn Sie nur die Gefahr bedenken und nicht die Verantwortung, die mutigere Wahl gestellt sein, einen schlafenden Soldaten zu attackieren oder einen wachen Säugling.

(Carl Kraus, Die letzten Tage der Menschheit, 1.Akt, 29.Szene)

楽天家　もし戦争が文化的恩恵を全然もたらせないとすれば、その事情は交戦国の両方に言えることではないでしょうか。あなたはどうやらフランス義勇軍兵士が睡眠中の敵兵を殺戮するところには文化の可能性があるとの原理をおたてになっているようですが。

不平家　そのような報道を主張するためヴォルフが徘徊するような国には確かに文化の可能性などありませんよ。人間の今日的な状況の中でもまったく独特なことですが、眠っている赤子の上に爆弾を投下する爆撃兵が民族権利上許される手段を行使していて、一つの殺人への報復として殺人を犯すフランス義勇兵を、公定の殺人免許を持たないからといって、狩り集められた部隊の部隊長の指揮下ではなくやむにやまれない思いから、義務からではなく怒りから、殺人行為を半ば酌量する唯一のテーマからこれをなすからといって非難することはですね、資格のない殺人者だからと言って、殺人用制服たる軍服を着用していないからといって、補充部隊司令部直属とか戦闘部隊隊員だとか特殊部隊特務兵だとかその他嫌悪をそそる称号を持つ者ではないからといってこれを難じることはですね、まさに珍妙きわまるところですよ。眠っている赤子を殺す爆撃兵と眠っている兵士を殺す市民との倫理的な相違を私に話せなどおっしゃらないでくださいよ。責任ではなく危険をあなたが思案なさるとき、あなたにも眠っている兵士を殺すかそれとも目ざめている赤子を殺すかの勇気の要る選択が課せられるはずでしょう。

（カール・クラウス、人類最後の日々、
第一幕、第二十九場、池内紀訳）

(67)

Er fürchtete sich vor dem Sommer auf dem Lande, allein in dem kleinen Hause mit der Magd, die ihm das Essen bereitete, und dem Diener, der es ihm auftrug; fürchtete sich vor den vertrauten Angesichten der Berggipfel und –wände, die wiederum seine unzufriedene Langsamkeit umstehen würden. Und so tat denn eine Einschaltung not, etwas Stegreifdasein, *Tagedieberei*, Fernluft und Zufuhr neuen Blutes, damit der Sommer erträglich und ergiebig werde. Reisen also, — er war es zufrieden. Nicht gar weit, nicht gerade bis zu den Tigern. Eine Nacht im Schlafwagen und eine Siesta von drei, vier Wochen an irgendeinem Allerweltsferienplatze im liebenswürdigen Süden...
(Thomas Mann, Der Tod in Venedig, 1.Kapitel)

彼は、食事をととのへてくれる女中と、それを食卓に運んでくれる従僕と三人きりで小さな家に暮らす、あの田舎の夏をおそれた。またしても自分の不満な遅筆をとりまいて立つであらう、あの山頂や絶壁の見なれた相貌をおそれた。だからそこで、夏がすごしやすい生産的なものになるためには、ある挿入が、多少の即興的生活が、遊惰が、遠國の空氣が、そして新しい血液の供給が必要なのである。では旅行だ。— 彼はそれに満足だった。さうひどく遠いところへ、何も虎のゐるところまで行くのではない。ひと晩を寝台車に送ってから、快い南國の、どこでもいい、萬人向きの休養地で、三四週間ひるねをするのだ…

（トーマス・マン、ヱニスに死す、第一章、實吉捷郎訳）

(68)

[...] Weiß der Himmel, was aus ihm geworden war, *wahrscheinlich war man seinen Betrügereien auf die Spur gekommen*, und er saß nun schon irgendwo fest. Sicher hatte er nicht ihn allein ins Unglück gebracht. Solche Hochstapler arbeiten immer im großen.

(Rainer Maria Rilke, Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge)

［…］あの紳士がどうなったか、誰にもわからなかった。たぶん彼の詐欺がばれてしまって、いまではどこかに閉じこめられているのだろう。あの紳士にひっかかって惨めな目にあったのは自分ひとりだけではあるまい。ああいう詐欺紳士の仕事は、いつも大掛かりなものだ。

（ライナー・マリーア・リルケ、
マルテ・ラウリス・ブリッゲの手記、塚越敏訳）

(69)

Die blinde Liebe einer Mutter zu ihrem Kind, den dummen, blinden Stolz eines eingebildeten Vaters auf sein einziges Söhnlein, das blinde, wilde Streben nach Schmuck und nach bewundernden Männeraugen bei einem jungen, eitlen Weibe, alle diese Triebe, *alle diese Kindereien, alle diese einfachen, törichten, aber ungeheuer starken, stark lebenden, stark sich*

durchsetzenden Triebe und Begehrlichkeiten waren für Siddhartha jetzt keine Kindereien mehr, er sah um ihretwillen die Menschen leben, sah sie um ihretwillen Unendliches leisten, Reisen tun, Kriege führen, Unendliches leiden, Unendliches ertragen, und er konnte sie dafür lieben, er sah das Leben, das Lebendige, das Unzerstörbare, das Brahman in jeder ihrer Leidenschaften, jeder ihrer Taten. [...]

(Hermann Hesse, Siddhartha, 2.Teil, Om)

わが子に対する母親の盲目の愛、うぬぼれた父親が一人息子に対してもつ愚かで盲目的な誇り、若い見栄っ張りな女たちが装飾品と男性たちの賛嘆のまなざしを盲目的に前後の見さかいもなく欲しがることなど、これらすべての衝動、これらすべての子供っぽい欲望と行為、これらすべての単純でばかげた、しかしとほうもなく強い、強烈な活力をもち、すべてのものを制圧する衝動と欲求は、今ではシッダールタにはもう子供じみたものとは思われなくなった。このような衝動や欲望があればこそ、人間が生きていけることがわかったのである。それらのために人間が無比の事業を成し遂げ、旅をし、戦争をし、とほうもない苦しみをなめてそれに耐えられることがわかった。そして彼は人間をそれゆえにこそ愛することができた。彼は人びとのどんな煩悩の中にも、どんな行為の中にも、生命を、生きて実在するものを、破壊できないものを、梵（ブラフマン）を見た。[…]

（ヘルマン・ヘッセ、シッダールタ、第二部、「オーム」、岡田朝雄訳）

(70)

Ein wenig zaghaft und zurückhaltend, aber nie Spielverderber. Hilfsbereit den weniger begabten Kameraden gegenüber, für die er, wenn es sein mußte, bis in die Nacht hinein Aufsätze verfaßte. Hartwig war als Knabe und Jüngling jeder Roheit unfähig gewesen, *hatte bei ernsten Prügeleien stets vermittelnd eingegriffen, konnte aber jähzornig werden, wenn er Tierquälereien beiwohnte*, weil dieser nicht davon ablassen wollte, Käfer und Schmetterlinge für seine Sammlung zu fangen und zu präparieren.

(Hugo Bettauer, Der Frauenmörder, Das große Rätsel)

(71)

Nach wie vor aber gab es kein Gebiet, auf dem ich den jungen Arzt nicht für unfehlbar hielt, und diese Gläubigkeit erhöhte sich nur, als ich eines Tages das Glück hatte, ihm vorgestellt zu werden. Auf einem Spaziergang mit Hugo kam er uns in den Weg. Das Gespräch war kurz, und doch konnte ich nie wieder die Stunde vergessen, da mir der vielberufene moderne Mensch begegnet war, der zusamamengeraffte, fest auf der Erde stehende, der allprüfende, jeder Wirklichkeit gewachsene, der aber mit seinem Schauen über die Grenze der allgemeinen Sichtbarkeit hinausdringt. Bewußtheit hatte diese Physiognomie geformt; *für Zwielichtsträumereien blieb darin kein Raum*. Nicht ohne Wohlwollen funkelten forschende graublaue Augen den künftigen Kollegen an. Die Stirn krauste sich beim Sprechen; wenn er lächelte, erschienen um den prachtvoll roten, schön geformten Mund zwei feine Faltenwinkel. Seine Redeweise war ungefähr das Gegenteil der meinigen; denn während ich unschlüssig nach Bezeichnungen suchte, stellte er Ansichten und Urteile mit einer soldatisch anmutenden Bestimmtheit vor uns hin. Leider erlaubte ihm sein Krankendienst kein Verweilen. [...]

(Hans Carossa, Das Jahr der schönen Täuschungen, Unser Prometheus)

だが、いかなる領域においてもわたしがこの若い醫師を最も信頼し得る知識の所有者だと考へていゐたことは、今までとすこしも變りがなかった。そしてこの信仰性は、ある日わたしが彼に紹介されるといふ幸福に浴したとき、なほ一層高まるばかりであった。フーゴーと散歩をしてゐると、偶然彼はその道をやって來たのである。談話は短時間だった。しかしわたしは、確乎たる知力をもってしっかりと大地の上に立ち、一切を検討し、あらゆる現實を自家薬籠中のものとしてゐる一方、その眼を一般可視界の彼岸にまで注ぎかけてゐるこの令名ある近代人にめぐり逢ったひと時をその後忘れることはできなかった。行きわたった意識性がその相貌を作ってゐた。そこには黄昏（たそがれ）の夢想などの入りこみ得る餘地は一切なかった。その灰青色の眼は射るやうに後輩の同學者、未来の同僚に注がれたが、一種の好意の色が見えないで

もなかった。物を云ふとき額には皺がよった。微笑すると恰好のよいつややかに紅い口の兩側に、きれいな鋭角の襞があらはれた。彼の話しぶりはわたしのそれとはほとんど正反對であった。わたしはてきぱき物が云へずあれこれと言葉を探しつづけるのだったが、彼は意見や判断を一種軍隊的な明確さをもって告げた。殘念な事には彼は往診の途中だったので、いつまでもわたしたちの相手をしてゐることはできなかった。[…]

（ハンス・カロッサ、美しき惑ひの年、
われらのプロメートイス、手塚富雄訳）

(72)

[...] Und dann fängt Franz an, *von der Keilerei auf dem Alex zu erzählen*, und wie er dem langen Emil geholfen hat. Die hören gierig zu, die 4, Pums schreibt noch immer, sie stoßen sich an, dann tuscheln sie zu zweit. Einer beschähtigt sich immer mit Franzen.

(Alfred Döblin, Berlin Alexanderplatz.
Die Geschichte vom Franz Biberkopf, 5.Buch, Sonntag, den 8.April 1928)

［…］そこでフランツは、アレックスでのけんかの話をしはじめる。そしてノッポのエーミールに手を貸してやったことも。かれら四人はむさぼるように聞いている。プムスはあいかわらず書きものをしている、かれらはたがいにからだをくっつけあう、やがてふたりがひそひそ話をする。ひとりはいつまでもフランツの相手になっている。

（アルフレート・デーブリーン、ベルリン・アレクサンダー広場、
フランツ・ビーバーコフ物語、第5巻、1928年4月8日、早崎守俊訳）

(73)

„Willst vielleicht jetzt poetisch werden?“

„Nein. Aber sagst du nicht selbst, daß es mit den Augen eine eigene Bewandtnis hat? Aus ihnen wirkt – denk doch nur an deine hypnotischen Lieblingsideen – mitunter eine Kraft, die in keinem Physikunterricht ihren Platz hat; – sicher ist auch, daß man einen Menschen oft weit besser aus

seinen Augen errät als aus seinen Worten...“

„Nun – und?“

„Mir ist dieses Licht wie ein Auge. Zu einer fremden Welt. Mir ist, als sollte ich etwas erraten. Aber ich kann nicht. Ich möchte es in mich hineintrinken...“

„Nun, – du fängst doch an, poetisch zu werden.“

„Nein, es ist mir ernst. Ich bin ganz verzweifelt. So, sieh doch nur hin, und du wirst es auch fühlen. Ein Bedürfnis, sich in dieser Lache zu wälzen – auf allen vieren, ganz nah in die staubigen Winkel zu kriechen, als ob man es so erraten könnte...“

„Mein Lieber, *das sind Spielereien, Empfindeleien*. Laß jetzt gefälligst solche Sachen.“

(Robert Musil, Die Verirrungen des Zöglings Törless)

「君はこんなときに詩人にでもなるつもりか？」

「とんでもない。でも君自身も言ったじゃないか。眼には独特なものがあると。眼からは― 君のお気に入りの催眠術の考えを思い出してくれよ ― ときおり、物理の授業には出てこないような力が働きかけてくるんだ。それに確かに、人の言葉を聞くより眼を見たほうが、その人ははるかによく分かることがしばしばあるじゃないか……」

「そうだな ― それで？」

「ぼくにはこの光が眼のように思えるのだ。見知らぬ世界を見ている眼にね。なにかを言い当てなければならない気がしているんだが、しかし言い当てられない。ぼくはそれを体の中に飲み込んでしまいたいのだ……」

「そら見ろ ― 君は詩人になり始めたじゃないか」

「そうじゃない。ぼくにとっては真剣なことだ。ぼくはすっかり絶望している。まあ、あれをじっと見てくれよ。そうすれば君も同じことを感じるだろう。この光の溜まりの中を転げ廻り ― 四つ這いになってあの埃っぽい片隅の真近まで這って行きたいという欲求をさ。そうすればまるでそのなにかを言い当てられるかも知れないような気持になるのだ……」

「君、それはふざけているよ。感傷的だよ。ねえ、頼むからそんなことは止めてくれ」

（ローベルト・ムージル、テルレスの惑乱、鎌田道生・久山秀貞訳）

Das sind Spielereien, Empfindeleien. が「それはふざけているよ。感傷的だよ」と訳されているが、はたしでそうだろうか。Spielerei は「ふざけ」よりも「たわむれ」に近いのではあるまいか。

(74)

[...] *In Rußland vergeudete Guilbeaux als unheilbarer Polemiker wie seinerzeit in Paris seine Begabung in Zänkereien* und Stänkereien und verdarb es sich allmählich auch mit denen, die seine Courage respektiert hatten, mit Lenin zuerst, dann mit Barbusse und Rolland und schließlich mit uns allen. [...]

(Stefan Zweig, Die Welt von gestern. Erinnerungen eines Europäers, Im Herzen Europas)

［…］ギルボーはロシアにおいても、昔パリにおいてそうであったのと同様に、度し難い論争家として喧嘩口論に才能をつかい果し、次第に彼の勇気を尊敬していた人々との関係をもそこなうようになった。まずレーニンとが手始めで、それからバルビュスとロランと、ついにはわれわれみなとそうなったのである。［…］

（シュテファン・ツヴァイク、昨日の世界 ― 一ヨーロッパ人の回想― ヨーロッパの心臓にて、原田義人訳）

(75)

In einer dunklen Ecke wurde laut und nachdrücklich erklärt, *Monogamie sei eine Schweinerei* und die Ehe ein Scheidungsgrund. Das betrunkene Rehböckchen hüpfte mit beiden Füßen zugleich vor Begeisterung, als könnte er einstens als Verteidiger in einem Ehescheidungsprozeß diesen Ausspruch verwenden, ohne aus dem Gerichtssaal ins Irrenhaus transportiert zu werden.

(Leonhard Frank, Links wo das Herz ist, II)

(76)

Im übrigen haben die Gefangenen in den Kellern der Landsknechtskasernen wie in den Konzentrationslagern Gelegenheit, sich in sehr kurzer Zeit mit dem nationalsozialistischen Parteiprogramm und mit dem Buch des Führers vertraut zu machen.

Der Unterricht ist streng. Bei Fehlern und Nachlässigkeiten drohen rauhe Strafen, *das Zeitalter des Liberalismus und der Humanitätsduselei ist vorbei*. Manche, wie gesagt, überstehen den Unterricht nicht. In Berlin allein weiß er von siebzehn dokumentarisch beglaubigten Todesfällen.

(Lion Feuchtwanger, Die Geschwister Oppermann, 3.Buch Morgen)

(77)

[...] Sie stehen in einem heiligen Raum, der Würde und Zurückhaltung gebietet; doch sie sind keine Märtyrer und feierlichen Apostel, sondern Menschen dieses Landes, und so zeigen sie auch wundervolle Freiheit der Bewegung, des Ausdrucks, der Haltung. Die Frauengestalten, die darunter sind, haben einen ganz unvergleichlichen Reiz, *sei es der Schelmerei, sei es einer verzichtenden und zierlichen Traurigkeit.*

(Theodor Heuss, Von Ort zu Ort, Naumburg)

(78)

Ich muß diese Verhältnisse erwähnen, um den Eindruck charakterisieren zu können, den es hervorrief, als nun sehr bald gegen mich die öffentlichen Angriffe begannen, die sich gegen meine schriftstellerische Tätigkeit unter Hervorhebung meiner Unmoralität richteten. Im „Schwarzen Korps“ vom 7.5.1936 hieß es in einem langen Artikel gegen mich: *Du Schwein – Ferkeleien – warme Luft – widernatürliche Schweinereien* – scher Dich doch dahin, wo Deine Genossen Kerr, Tucholsky, Kästner sitzen. [...]

(Gottfried Benn, Doppelleben,

2.Teil Doppelleben (1950), II. Leier und Schwert)

私はこうした事情を述べておかなければならない。それは、そのすぐあとで私の非道徳性を取り上げて私の作家活動に向けられた公けの攻撃が始まったとき呼び起された印象を、うまく描き出すことができるように思うからである。一九三六年五月七日の「ダス・シュヴァルツェ・コール」紙には、私を攻撃したある長文の論説においてこう書かれている。豚め ― 汚らしい言行 ― 生温い空気 ― 不自然な不潔行為 ― お前の仲間のケルやトゥホルスキーやケストナーが入っているところへ失せろ！［…］
（ゴットフリート・ベン、二重生活、
第二部、二重生活 ― 一九五〇年 ―、第二章 琴と剣、原田義人訳）

(79)

[...] Dem Schüler steht's nicht zu, den Lehrmeister zu lehren, und wenn's ihn in Großmannssucht, *Heuchelei* und Anmaßung dennoch dazu treibt, so hat er die Folgen zu tragen. [...]
(Hermann Bloch, Die Schuldlosen, Die Geschichten,
VII Die vier Reden des Studienrats Zacharias)
［…］教師を教えるということは生徒にふさわしくないことなのだが、それにもかかわらず、生徒が誇大妄想狂といつわりと僭越にかられてそうするならば、彼はその結果に責任を負わなくてはならん。［…］
（ヘルマン・ブロッホ、罪なき人々、物語、
VII 高等学校正教授ツァハリーアスの四つの演説、浅井真男訳）

(80)

[...] Ja, ununterbrochen empfing sie, diese Mutter Erde, spie einen Strom von Geschöpfen aus ihrem Schoß und verschlang ihn wieder, schluckte ihn in den großen Schlund der Grüfte ein, der sie auch war. Wahrhaftig, *diese Raserei von Schwängerung, Geburt und gierigem Vernichten war das Gesetz des Lebens*, und der Krieg, der das Geschäft der Gräber in ungeheuerlichem Maße besorgte, steigerte nur bis zum Wirbel, was sonst in langsamem Takte abklang. [...]

(Arnold Zweig, Junge Frau von 1924,
4.Buch An den bitteren Wassern, 4.Kapitel Witwe Bunge)

(81)

Ich hoppelte neben den beiden her, *die in ein angeregtes Gespräch über Schweden und über die Landschaft, über die Fliegerei und über Stockholm vertieft waren*, die Prinzessin hatten wir in die Mitte genommen, manchmal sprachen wir über sie hinweg, und ich badete in einer tiefen Badewanne von Freundschaft.

(Kurt Tucholsky, Schloß Gripsholm, 3.Kapitel)

(82)

[...] *Der Abend ward über allerlei Schreibereien vor dem Sekretär verbracht*. So verging der erste Tag.

„Halte dich abends möglichst zu Hause!“ hatte mir Johannes Clausen geraten; ich beschloß, seinen Rat zu befolgen. Tagsüber war ich viel unterwegs, schlenderte um den Hafen und über den Deich und hielt die Augen offen. [...]

(Georg von der Vring, Die Spur im Hafen)

(83)

[...] *Zur Verknechtung der Sprache im Geschwätz tritt die Verknechtung der Dinge in der Narretei fast als deren unausbleibliche Folge*. In dieser Abkehr von den Dingen, die die Verknechtung war, entstand der Plan des Turmbaus und die Sprachverwirrung mit ihm.

(Walter Benjamin, Über die Sprache des Menschen)

［…］饒舌による言語の奴隷化に加えて、ほとんどその不可避の結果として、愚行（ナレタイ）による事物の奴隷化があらわれる。まさに奴隷化にほかならぬ事物からの離反のなかで、バベルの塔の建設の計画と、それにともなう言語混乱が発生したのである。

（ヴァルター・ベンヤミン、言語一般および人間の言語、佐藤康彦訳）

(84)

„Gehen Sie, junge Leute, gehen Sie nur. Das soll so sein. Eine gute Nacht, junge Leute."

Die beiden drücken sich vorbei, angstvoll, verschüchtert wie Kinder. Plötzlich ruft die Alte klar und deutlich: „Vergessen Sie am Montag nicht die Anmeldung bei der Polizei! *Sonst habe ich Scherereien*."

(Hans Fallada, Kleiner Mann – was nun?

1.Teil, Pinneberg wird mystisch und Lämmchen bekommt Rätsel zu lösen)

(85)

Einen Tag lang bereute ich, daß ich 1919 die Begnadigung abwies, nach sechs Monaten Haft. In Berlin wurde mein Drama „Die Wandlung" gespielt, mehr als hundertmal, der bayerische Justizminister wollte eine Geste der Großmut zeigen und mich freilassen. Ich verzichtete auf den Gnadenakt, *ihn anzunehmen, hieße die Heuchelei der Regierung unterstützen*, es widerstrebte mir hinauszugehen, während die Arbeiter weiter gefangen bleiben sollten.

(Ernst Toller, Eine Jugend in Deutschland, Autobiographie,

16.Kapitel, Fünf Jahre)

(86)

Mit Beharrlichkeit wollen wir toren *(sic)* Menschen daran festhalten, daß es Kampf, Sieg und Niederlage der großen Maxime seien, die unser Herz bewegen und es sich entscheiden lassen. Lüge. Ohne das lebendige Fleisch des Einzelnen ist die kühnste und geistigste Abstraktion ein Totengebein. *Die Völlerei eines erdhaften Kindes trägt mehr Vernunft als die fromme Karitas eines Ausgebrannten, die nicht mehr den Mut zum kleinsten persönlichen Wunsch.*

(Hans Henny Jahnn, Perrudja, 10.Kapitel)

何度読んでもよく分からない晦渋なテキストだが、Völlerei の用例として一応お目にかける。なお最後の関係文die nicht mehr den Mut zum

kleinsten persönlichen Wunsch は定動詞なしで終わっているが、ここには主文と同じく trägt を補えばいいのではないかと考え、Duppel-Takayama さんの意見を尋ねたところ、それも可能だが、trägt よりはむしろ in sich trägt のほうが Jahnn の文体にふさわしいかもしれない、との貴重な助言を頂戴した。

(87)

„Sie verkennen die Lage“, sagte langsam Georg Lauffer, „ich habe Ihren Rat befolgt. Der Kapitän hat mich abgewiesen. –“

„Wie kann er, wie darf er?“ polterte Gustav.

„– Kurz bevor ich mich hier einfand; allerdings hat er mir gesagt, *er werde eine Meuterei zu verhindern wissen*“, fügte der Superkargo hinzu.

„So hat er Ihnen den Schutz, auf den Sie Anspruch haben, nicht verweigert“, sagte Gustav.

(Hans Henny Jahnn, Das Holzschiff, 6.Kapitel Verwirrung)

「あなたは事態を理解していません」とゲオルク・ラウファーはゆっくりした口調で言った。

「わたしはあなたの助言にしたがった。ところが船長はわたしをはねつけました。—」

「考えられません。船長がどうしてそんなことを？」とグスタフは怒鳴った。

「—ここに来る直前です。もっとも、暴動をはばむことはできるだろう、とは言ってくれましたが」と上乗人（うわのりにん）はつけ加えた。

「それならあなたが要求した保護を拒絶したわけじゃありません」とグスタフは言った。

（ハンス・ヘニー・ヤーン、木造船、第六章 錯乱、沼崎雅行訳）

(88)

Schon um vier Uhr wurden wir von unserem aus Bettstücken zusammengesuchten Lager geweckt, um Stahlhelme zu empfangen. Bei dieser Gelegenheit fanden wir in einer Kellernische einen Sack voll Kafeebohnen –

eine Entdeckung, *der eine eifrige Mokkasiederei folgte*.

(Ernst Jünger, In Stahlgewittern, Guillemont)

(89)

„Was spielen Sie denn für ein Instrument? sagte er, und wies mit einer Bewegung des Kinnes nach oben. Der andere sah unwillkürlich auch hinauf zu dem Gepäcknetz über seinem Platz.

„Nee“, sagte er, „das ist kein Musikinstrument. Ich spiele übrigens ein wenig Geige. *Wohl nur so als Liebhaberei,* zum Vergnügen. In Kottbus, wo ich nämlich daheim bin, haben wir ein Streichquartett gegründet. Da gibt’s jedoch ausschließlich Klassisches bei uns: einen Mozart, einen Haydn...“

(Heimito von Doderer, Begegnung im Morgengrauen)

(90)

Der Meister Magus, an den Robert von Perking verwiesen wurde, verglich die Tonwelt mit einer gläsernen Kugel, die den Lauschenden gefangen hielt, während seine Seele sich einbildete, frei im All zu schweben. Die Seele – und dies war der Begriff, gegen dessen Zweideutigkeit der Meister Magus im Namen des Archivs Stellung nahm. Er schalt sie einen Ersatz, eine Ausrede, eine Bruststätte für Mißverständnisse, er nannte sie eine Flucht ins Verschwommene *und sah in der Musik ein Mittel der Verführung zum ungenauen Denken zur Selbstschwelgerei.* Robert erinnerte sich, oft genug von Konzertbesuchern gehört zu haben, daß sich bei Musik so schön träumen ließe. Immer löste die gleiche Melodie bei ihnen allen eine anders verzückte Stimmung und Vorstellung aus.

(Hermann Kasack, Die Stadt hinter dem Strom, 13.Kapitel)

ローベルトはペルキングに、マイスター・マグスのところへ行くように言われたが、この人は音の世界を硝子球に比較し、それを聞く者の魂が自在に萬象のうちを漂っていると空想しているあいだ、彼を捉えておくのだ、と言った。魂 ― この概念は、その曖昧さに對してマイスター・マグスが文庫の名において身構えしたところのものだっ

た。彼は魂を、代用品、遁辞、誤解の巣として非難し、それを朦朧たるもののうちへの逃亡と呼び、音樂のうちに不正確な思考と自己耽溺への手段とを見た。

ローベルトは、演奏會の聴衆たちが、音楽を聞きながら全くすばらしく夢見させられた、と言うのをしょっちゅう聞いたことを思い出した。つねに同一のメロディが彼らのすべてにあって別な狂氣じみた氣分と觀念とを解放するのだった。

（ヘルマン・カザック、流れの背後の市、第十三章、原田義人訳）

(91)

PLÖRÖSENMIEZE *(am Eingang)* Polizei! Polizei!

PASSANTEN *(von der Straße herein)* Was isn*(sic)* da los? *Da is ne Hauerei!* Jib ihm, jib ihm Saures!!

SCHUTZMANN *(mit Pickelhaube, schiebt die Leute auseinander)* Wollt ihr wohl! Det is doch – Laß den Soldaten los! *(Stürzt sich auf Schlettow und den Grenadier, trennt sie).*

v. SCHLETTOW *(blutend, mit heruntergerissenem Kragen)* Nehmen Sie den Mann fest! Bringen Sie ihn auf die Wache!

Schutzmann *(packt ihn mit Polizeigriff)* Los! Beide mitkommen!

v. SCHLETTOW Was fällt Ihnen ein! Der Mann hat mich angegriffen! Ich hab ihn nur zur Rede gestellt! Ich bin Hauptmann im ersten Garderegiment!

GRENADIER Det kann jeder sagen! Ohne Charge biste for mir ’n janz deemlicher Zivilist!!

(Carl Zuckmayer, Der Hauptmann von Köpenick, 1.Akt, 3.Szene)

プレレーゼンミーツェ（入口で）お巡りさん！お巡りさん！

通行人（往来から入って来て）どうしたんだい？ 喧嘩だな、やれやれッ！！

警官（ヘルメットをかぶっている、群衆をかき分けて）何をしとるか！ こいつは ―こら、兵隊を離せ！（シュレトゥと兵隊にとびかかり、二人を分ける）。

フォン・シュレトウ（血を流し、カラーをぶらさげて）その男を、し

っかり、抑えとくんだ！ そいつを、衛兵所へ連れて行くんだ！

警官（警棒で、彼を抑え）さあ！ 二人ともくるんだ！

フォン・シュレトウ　冗談いうな！ その男のほうから、俺に向って来たんだ！ 俺は、ただ、いってきかせただけだ！ 俺は、第一聯隊の大尉だ！

兵隊　そんなこたあ、誰だっていえることよ！ 肩章がなけりゃあ、間抜けな地方人だ！！

（カルル・ツックマイヤー、ケペニックの大尉さん、

第一幕、第三景、加藤衛訳）

(92)

Ich erkenne bloß die ungeheuren Vorteile der Schlamperei. Die Schlamperei hat schon Tausend von Menschen das Leben gerettet. Im Krieg hat oft die kleinste Abweichung von einem Befehl genügt, daß der Mann mit dem Leben davongekommen ist.

(Bertolt Brecht, Flüchtlingsgespräche, I)

というより、だらしなさの絶大な効用を認めているのさ。だらしなさは、無数の人間の生命を救ってきた。戦争のときなんか、ほんの少し命令を回避するだけでいのちが助かることがよくある。

（ベルトルト・ブレヒト、亡命者の対話、Ⅰ、野村修訳）

(93)

In den Bildern erkannte ich Kora und ihren Mann. Ich starrte die Bilder an und las dann in fieberhafter Eile den Text. *Der Wirt der Bar „Goldfasan“ und seine Frau Kora geborene Sand wurden wegen dringenden Verdachtes der Falschmünzerei gesucht*, waren flüchtig und unauffindbar. Eine hohe Belohnung auf ihre Ergreifung war ausgesetzt. Ich entsinne mich noch, daß ich geistesabwesend den letzten Satz dieser Fahndung vor mich hinmurmelte: „Die Verteilung der ausgesetzten Belohnung erfolgt außerhalb des Rechtsweges.“ [...]

(Friedrich Georg Jünger, Der Wechsel, Falschmünzer gesucht)

(94)

Stell dir mal vor, du krummer Hund, was das für Minuten gewesen sein müssen, sofern sich dem Kerl nicht gleich der Halswirbel aushängte, wenn er da baumelte und die Welt so grün und blau und golden vor ihm ausgebreitet war, im Walde rief der Kuckuck, fünf, sechs Schwalben zwitscherten durch die Luft, jemand dengelte seine Sichel, und allmählich zog sich die Schlinge immer enger zusammen, seine Ohren dröhnten, seine Zunge schwoll an, und zuletzt sah er alles nur noch durch einen roten Schleier...

Weil die Äderchen in seinen Augen geplatzt waren. *Eine hundsgemeine Schweinerei. Wo du hinguckst, ist das Leben eine Schweinerei.*

(Manfred Hausmann, Unterm Galgen)

(95)

Hinten im Wagen öffnet sich die Tür. Die Schwester kommt mit Licht und sieht mich.

„Er ist aus dem Bett gefallen –“

Sie fühlt mir den Puls und faßt meine Stirn an. „Sie haben aber kein Fieber.“

„Nein –“ gebe ich zu.

„Haben Sie denn geträumt?“, fragt sie.

„So ungefähr“, weiche ich aus. *Jetzt geht die Fragerei wieder los.* Sie sieht mich mit ihren blanken Augen an, sauber und wunderbar ist sie, umso weniger kann ich ihr sagen, was ich will.

(Erich Maria Remarque, Im Westen nichts Neues, 10.Kapitel)

すると列車のうしろのほうの扉が開いて、看護婦が燈火を持ってやって来て、僕を見た。

「この男は今寝床から落っこちたんです…」

看護婦は僕の脈をみて、額に手を当てたが、

「あなたは熱はないじゃありませんの」

「ありませんよ」

と僕はそれを認めた。

「では夢でも見て寝呆けたんですね」
と看護婦はきいた。
「まあそんなところですね」
と僕はわざととぼけた。そこでまたいろんなことを訊くのがはじまった。看護婦はその明るい眼で僕を見た。男好きのする、可愛い女であった。それだけに僕は気がひけて、思っていることも口に言えなかった。

（エリヒ・マリア・レマルク、西部戦線異状なし、十、秦豊吉訳）

問題の個所 Jetzt geht die Fragerei wieder los. が「そこでまたいろんなことを訊くのがはじまった」と訳されているが、Fragerei は単に「いろんなことを訊く」のではなく、いろいろ訊かれることが「僕」にとって迷惑であるという感じがそこに籠められていると解釈すべきだろう。もっともその感じを訳文で表現するのは至難の業（わざ）ではあるが。

(96)

[...] Wenn der Kerl jetzt aufstand, *konnte die Rennerei weitergehen*. Blieb er aber, dann konnte Emil hinter dem Kiosk stehen, bis er einen langen grauen Bart kriegte. Es fehlte wirklich nur noch, daß ein Schupomann angerückt kam und sagte: ‚Mein Sohn, du machst dich verdächtig. Los, folge mir mal unauffällig. Sonst muß ich dir leider Handschellen anlegen.‘

(Erich Kästner, Emil und die Detektive,

8.Kapitel Der Junge mit der Hupe taucht auf)

［…］あいつがいま立ちあがれば、競争がつづくでしょう。あいつがじっとしていれば、エーミールは、長い白いひげがはえるまで、売り場のうしろに立っていることになるかもしれません。実際おまわりがやってきて、「おい、きみ、きみはあやしい。さあ、じたばたしないでついてきなさい。そうしないと、残念ながら、手錠をはめなきゃならん。」といいかねませんでした。

（エーリヒ・ケストナー、エーミールと探偵たち、

第八章　警笛の少年があらわれる、高橋健二訳）

(97)

„Du siehst zu schwarz, Pablo!“

„Im Gegenteil, ich bin ein Optimist. Bleibe im Haus, vergiß den Lärm der Zeit, wie über eine Schnecke wird alles über dich hinrollen!“

„Wenn nicht“, rief ungeduldig der Vater...

„Wenn nicht“, unterbrach ungeduldig Onkel Pablo, „der Tod einen trifft; aber wo entrinnst du ihm? Die Schande, sagst du? Aber ist sie nicht in der Fremde zu Haus? *Die Sklaverei?* Der flüchtige Ausländer ist der moderne Sklave!“

(Hermann Kesten, Die Kinder von Gernika)

「にいさんは暗い見かたをしすぎるよ、パブロ！」

「とんでもない、わしは楽天家だ。うちに残れよ、時代の騒然たることなんか忘れるんだ ― なにもかも、ちょうどカタツムリのうえをころがってくみたいに、おまえのうえをころがってくさ！」

「もしそうじゃなかったら」と父はいらいらしながら叫びました。……

「もしそうじゃなかったらな」と、その言葉を、おじがいらいらした口調でさえぎりました、

「死ぬだけさ。いったいどこへ行けば死の手から逃げられると思ってるんだ？ 恥ずかしめ、と、おまえは言うんだな？ だけど、そいつはよその国へ行ったとこで、どっかりかまえてるんじゃないか？ 奴隷の境遇か？ 亡命した外国人こそ、現代の奴隷だ！」

（ヘルマン・ケステン、ゲルニカの子供たち、鈴木武樹訳）

(98)

[...] *Sie konnte sich all diese Wohltäterei ungeniert leisten*, denn sie nannte u.a. eine schöne Villa mit parkähnlichem Vorgarten ihr eigen, aber sie würdigte es nicht, zehn Zimmer allein wohnen zu können, [...]

(Ödön von Holváth, Der ewige Spießer,

1.Teil Herr Kobler wird Paneuropäer, 2.Kapitel)

［…］彼女はこうした慈善行為をすべて気軽にひきうけることができた。というのは、なによりも公園と間違えるような庭つきの美しい屋敷が彼女のものだったからであるが、しかし彼女は十(とう)の部屋に一人で住めることをありがたいとは思っていなかった。［…］
（エデン・フォン・ホルヴァート、永遠の俗物、
第一部 コーブラー、汎ヨーロッパ主義者となる、二、有賀健訳）

denn sie nannte u.a. eine schöne Villa mit parkähnlichem Vorgarten ihr eigen が「というのは、なによりも公園と間違えるような庭つきの美しい屋敷が彼女のものだったからであるが」と訳されているが、u.a.は unter anderem であって、vor allem（なによりも）ではない。vor allem の略字は v.a. である。

(99)

[...] Es ging bergauf, die Steine waren naß und glatt, aber Benda bewegte sich mit der unheimlichen Sicherheit eines Schlafwandlers und erreichte, *ohne auf die Narreteien der umhergeisternden Stimmen achtzugeben*, sein Ziel. Auf der Kanzel stehend, gebot der bisher Schweigsame plötzlich mit lauter Stimme Ruhe, und dann breitete er, wie einer, der am Kreuz hängt, seine Arme aus.

(Marie Luise Kaschnitz, Der Mönch Benda)

(100)

Nichts deutete darauf hin, daß meine Frau die Epidemie besonders ernst nahm, das taten die meinsten Menschen nicht, bis sie selber davon betroffen wurden. Sie hatte mich einmal gefragt, ob sie den Kindern etwas zum Einnehmen gegen die Ansteckungsgefahr geben solle, aber ich sagte ihr, *diese angepriesenen Mittelchen seien nichts als Geschäftemacherei* und außerdem seien Kinder überhaupt nicht gefährdet. Damit war der Fall offenbar auch für sie erledigt.

(Hans Erich Nossack, Bereitschaftsdienst. Bericht über die Epidemie, 5.Kapitel)

(101)

Und dennoch reute ihn der Schlag. Das war ja das Schlimme, daß er ihn reute, daß er immer wieder den kurzsichtigen Direktor durch das Zimmer tapsen sah – das mußte er erst niederringen in sich, dieses Gefühl der Scham, bevor er zu Gerhard Träger ging. *Hatte er immer noch zuviel Platon in sich, immer noch zuviel Humanitätsduselei?* Ach, die Bauernburschen und die Handwerkersöhne in der SA, die hatten gut reden. Keiner von ihnen war bei Holzapfel in die Schule gegangen und hatte sie erlebt, diese Stunden, da der alte Mann zitternd aus dem „Gastmahl" las und seine Stimme zurückblühte in die Jahrtausende, in die ewige Gegenwart des Griechentums, wie er es nannte. [...]

(Ernst Glaeser, Der letzte Zivilist, 1.Teil, 6.Kapitel)

しかし、そうした考えにもかかわらず彼は校長をなぐったことを後悔した。なぐったことを後悔する心、又、近眼の校長が手さぐりで、部屋の中を歩廻る姿をいくども見た氣持、この羞恥の念、それを彼は先ず抑制しなければならなかった。彼がゲルハルト・トレーガーの前に出るまでに。彼のうちには、まだあまりにも多くのプラトンを、まだあまりにも多くのヒューマニティーの夢想を、有していたのだろうか？ああ、突撃隊の農民の息子や職人の息子たちはうまいことを言った。彼等のうちのひとりとしてホルツアップフェルの弟子ではなかった。従って彼等は、あの老人がふるえ聲で「饗宴篇」を讀み、又彼の聲があの千年も前に歸って、彼自身の言うギリシア文化の永遠の現在へのさかのぼって花咲いている時間を體驗したことはなかった。[…]

（エルンスト・グレーザー、最後の市民、
第一部、第六章、植田敏郎・遠藤慎吾訳）

(102)

Der Pfarrer erhob sich. Er fühlte sich müde in den Beinen und zerschlagen am ganzen Körper. Einmal mußte er wohl *die Folgen dieser Kilometer-fresserei* auf dem Fahrrad spüren. Er rieb sich das schmerzende Gesäß.

(Hugo Hartung, Gewiegt von Regen und Wind, Siddy)

自転車に乗ってへとへとになりながら何キロも走り続けることを Kilometer-fresserei と表現したのであろう。

(103)

„Aber das ist alles aus Pappe und Blech“, durchkreuzte Anna die Schwärmereien; sie entzückte mehr damit, als hätte sie etwas Träumerisches und Liebliches gesagt.[...]

(Jochen Klepper, Das Ende)

(104)

[...] Oft schien es, als sei man von lauter Narren umgeben, die es selber nicht merkten, so daß sich die Frage erhob, ob man nicht auch einer war. Die Verrücktheit trat in vielerlei Formen auf. Die meisten begnügten sich mit Narrheiten, die fix und fertig zu haben waren, *während sich andere nach Maß gefertigte Narreteien zulegten*. Unter den gangbaren Sorten war die Streitsucht an erster Stelle zu nennen. [...]

(Erhart Kästner, Zeltbuch von Tumilad, 12.Kapitel)

(105)

[...] Messalina schaute empört hinter Erwin und Kay drein. Was war das schon wieder? Warum stürmten die fort? Hatten sie sich gegen Messalina verschworen? Emilia würde es ihr erklären müssen. Aber Emilia war auch verschwunden, sie war durch eine Tapetentür verschwunden. Auf dem Tisch lag neben den leeren Gläsern nur der komische Hut, den Emilia aufgehabt hatte. Er lag da wie eine erlittene Enttäuschung. *‚Es ist Hexerei’, dachte Messalina, ‚es ist die reine Hexerei*, ich bin ganz allein auf der Welt.’ Sie wankte, eine für den Augenblick Gebrochene, zur Theke. „Einen Drei-fachen“, rief sie. „Was soll’s denn sein, gnädige Frau“, fragte der Mixer. „Ach irgendwas. Ich bin müde“. Sie war wirklich müde. So müde war sie lange nicht gewesen. Sie war auf einmal furchtbar müde. Aber sie durfte nicht müde sein. Sie

mußte ja noch zum Vortrag, sie mußte ja noch so viel für die Party organisieren. Sie griff nach dem hohen Glas, über das wasserhell der Schnaps schwippte. Sie gähnte.

(Wolfgang Koeppen, Tauben im Gras)

(106)

Miklas, die Fäuste geballt und den Kopf geduckt, stand in der kampfbereiten Haltung eines Gassenjungen, *der sich gleich, zur großen Rauferei, auf den Gegner stürzen wird*. Unter einer wütend gesenkten Stirne schienen die hellen Augen erblindet zu sein vor Zorn. „Hüten Sie sich," keuchte er, und alle im Lokal erschraken über seine frevlerische Kühnheit. „Ich dulde es nicht, daß eine Dame öffentlich beleidigt wird, nur weil sie der Nationalsozialistischen Deutschen Arbeiterpartei angehört und die Freundin eines Deutschen Helden ist. Ich dulde es nicht!!" knirschte er mit den Zähnen, und er tat ein paar drohende Schritte.

(Klaus Mann, Mephisto. Roman einer Karriere, V Der Ehemann)

ミクラスは拳を握りしめ頭を低く下げて、これから相手にとびかかって組み討ちする前に裏町の少年がするような戦闘姿勢をとった。激怒して下に向けた額の下の明るい目の色が、怒りに盲(めし)いてしまったように見えた。「気をつけろ！」と彼は肩で息をしながら言った。店にいたものはみな、彼の場所柄を弁(わきま)えぬ思いきった態度に度肝を抜かれた。「ある女性が、ドイツ(ナ)国家社会(チ)主義労働(ス)党員で、ドイツの英雄の恋人というだけで、侮辱されるのを許してはおけない！ 許せんぞ！！」と言って、彼は歯ぎしりをし、威嚇するように二、三歩前に進み出た。

（クラウス・マン、メフィスト、出世物語、岩淵達治訳）

(107)

Das jüdische Bürgertum, nach wie vor abgetrennt durch unsichtbare Gettomauern von seinen deutsch-christlichen Partnern, folgte fast instinktiv, doch instinktsicher, den Gliederungen der eingesessenen Bourgeoisie. Auch

hier unterschied man nach dem bürgerlichen Grundprinzip von Bildung und Besitz. Das hatte der große Gotthold Ephraim Lessing, der Freund Moses Mendelssohns, den Juden bereits um 1750 als Faustregel der Assimilation verkündet: man solle materiell sorgenfrei werden, *um der Kriecherei nicht länger zu bedürfen*, und man solle die deutschen Bücher der Aufklärung studieren, und mit ihnen die deutsche Sprache. [...]

(Hans Mayer, Auf Widerruf, Erinnerungen,
1.Teil, Deutsche Staatsbürger jüdischen Glaubens)

(108)

Die Leute, die ihre Rucksäcke gepackt hatten, sahen mit einer Art von Neid hinter dem Personal her, das zu seinem gewöhnlichen Dienst abrückte. Sie hatten selbst nichts mehr zu tun und standen voll Unbehagen in ihren Barackenstuben, in diesen Holzbuden, die mit Faserplatten verkleidet und mit billigen Bildchen verziert waren. Sie traten hinaus und blickten auf die lächerlichen Gärtchen vor den Splitterwällen, *Spielereien von Kleinbürgern und Schrebergärtnern*, die Beete mit weißen Steinen umlegt und darin ein paar Fichtenbäumchen, die nicht gedeihen wollten. Sie hatten daran gebastelt, und der Abschied davon bestürzte sie mehr als der erste Abschied von zu Hause, als sie damals gegangen waren. Damals besaßen sie kaum Vorstellungen davon, was jetzt kommen würde, und vertrauten darauf, daß schon manches gut abgelaufen war. Nun aber spürten sie, man ließ sie in die Feueresse abrücken, die sie verzehren sollte, und sträubten sich gegen das Ende.

(Gerd Gaiser, Die sterbende Jagd, 48)

背嚢を詰め終えた人びとは、いつもの勤務に赴く連中をうらやましそうに見送る。彼らにはもうすることがない。バラックの部屋におもしろくない顔で立っている。壁にアスベストをはり、安物の絵を飾った木の部屋。彼らはそこを出、掩蔽壁の前のなさけない庭をながめた。小市民たちの遊びごと。花壇に白い石をめぐらし、そこに植えた数本の松の若木はなかなか大きくならない。彼らはここをいじくってたの

しんでいたのだ。ここから別れるのは、家から別れるときよりもつらい。あのときには、これからどうなるのかろくにわかっていなかった。たいていうまくいくさ、とあてにすることができた。しかし、いまは、殺人的な戦場にやられることがわかっている。それに抵抗しているのだ。

（ゲルト・ガイザー、瀕死の戦闘機隊、第四十八章、松谷健二訳）

(109)

Keine Rede von Prunk und Glanz, Luxus und Völlerei: Preußen regiert, kühle, sachliche Strenge und Genauigkeit; sorgfältige Prüfung der Personalpapiere, klares Ja und Nein, und diese straffe Ordnung war noch das Beste, was man sich hier wünschen konnte. Auf einen persönlichen Ton durfte man nicht hoffen, stellte er sich dennoch ein, so empfing ihn jeder als ein unerwartetes Geschenk.

(Albrecht Goes, Unruhige Nacht, 3.Kapitel)

華美や華麗さ、豪奢や贅沢などというものはここでは論外のことである。ここを支配しているのは、冷静にして実際的な、厳格さと正確さとをもって鳴るプロシャなのだ。身分証明書の綿密な吟味、きっぱりした諾否の応答、そしてこうした四角四面の秩序が、ここで望むことのできるまだしも最善のものであった。親身な口調など期待すべくもなかった。それでもなお且つそんな物の言い方に出くわした場合には、誰でもが思いがけない贈物としてそれを受け取ったのだ。

（アルベルト・ゴース、不安の夜、第三章、岩橋保訳）

(110)

Die Arbeit, die er hier der Schwester beilegt, ist die Fantasie und Fuge C-Dur, KV 394. Man muß innehalten bei dem Satz : „es ist ungeschickt geschrieben. – Das Praeludio gehört vorher, dann folgt die Fuge darauf. – die Ursache aber war, weil ich die Fuge schon gemacht hatte, und sie, unterdessen daß ich das Praeludium ausdachte, abgeschrieben.“ Man kann nicht sachlicher sprechen von einem Vorgang, *den wir Hexerei oder Zauberei*

heißen mögen. Er erfuhr das Nacheinander als ein Ineinander. Und in seinem „Verstands-Kasten“ barg er Musik ミ und was für eine Musik! – wie in Schubfächern, abrufbar zu jeder Stunde.

(Albrecht Goes, Wolfgang Amadeus Mozart, Briefe,

Herausgegeben von Albrecht Goes)

これはモーツァルトが 1782 年 2 月 13 日にウィーンから姉のマリア・アンナ宛に書いた手紙についての、アルブレヒト・ゴースの解説だが、Hexerei も Zauberei も、名詞 Hexe（魔女）と Zauber（魔法）からの即席造語である。

(111)

[...] Es ist allerdings anzumerken, daß das bramarbasierende Landserdeutsch auch kräftige Brocken zur Sprache beigesteuert hat. *Manches, das hier unter dem Sammelwort Angeberei angeführt wird, war ursprünglich nicht fades Kasinogeblödel oder forscher Drahtzieherjargon.* Im hintersten Glied klingt die ‚Schnauze’ noch echt, und aus der Schnauze hat sich die Sprache häufig regenerieren können. Die Vulgärsprache des Landsers entging aber dem Prozeß der Schablonisierung so wenig, wie der sogenannte Landser der Verführung des ‚feineren’ Kasinotons und der dazugehörigen Klischees widerstand.

(Karl Korn, Sprache in der verwalteten Welt,

Aus dem Wörterbuch des Angebers)

(112)

[...] Ich bin nun einmal (das wußte ich auch ohne Spiegel) ein Mann in den besten Jahren, grau, aber sportlich. Ich halte nichts von schönen Männern. Daß meine Nase etwas lang ist, hat mich in der Pubertät beschäftigt, seither nicht mehr; seither hat es genug Frauen gegeben, die mich von falschen Minderwertigkeitsgefühlen befreit haben, und was mich irritierte, war einzig und allein dieses Lokal: wo man hinblickte, gab es Spiegel, ekelhaft, *dazu die*

endlose Warterei auf meinen Fisch. Ich reklamierte entschieden, zwar hatte ich Zeit, aber das Gefühl, daß die Kellner mich nicht ernstnehmen, ich weiß nicht warum, ein leeres Establissement mit fünf Kellnern, die miteinander flüstern, und ein einziger Gast: Walter Faber, [...]

(Max Frisch, Homo Faber, Erste Station)

［…］わたしは今やまさに（そのことは鏡がなくてもよくわかっていた）男ざかりの年齢にあり、髪はグレイだが、しかしスポーティである。わたしは美男などを大したものとは思っていない。私の鼻が少しばかり長すぎることは、思春期にこそわたしを悩ましたが、それ以後はまるで気にならない、それ以後はわたしを誤った劣等感から解放してくれる女たちが十分にあったのだ。だからわたしをいらいらさせたのはひとえにこの店だったのだ、目をあげれば鏡のあるこのいやらしさ、それにわたしの魚がくるまでのこの長い待ちぼうけ。わたしは断固として抗議を申しこんだ、むろん時間はたっぷりあったが、しかしまた給仕たちがわたしの言うことをまじめに考えていないらしいことも感じられたのである。どうしてかはわからない、ともかく人っ気のない店と、互いにヒソヒソささやいている五人の給仕と、たった一人のお客、ワルター・ファーベル、［…］

（マックス・フリッシュ、アテネに死す、

第一のステーション、中野孝次訳）

(113)

Als ich am frühen Morgen in die Küche kam, um mir heißes Wasser zu machen, hatte Frau Olenski schon Feuer im Ofen. Sie schnitt schweigend das Brot zum Frühstück. Ihre Augen lagen tief in dem übernächtig grauen Gesicht. Sie sagte nichts. Eine Weile später steckte Thomas seinen zerzausten Kopf zur Tür herein. *„Was war denn das für eine Schießerei heute nacht?“* fragte er verschlafen.

Frau Olenski fragte leise: „Das hast du gehört?“

„Natürlich“, murmelte er. „Alles.“

„Was alles?“ fragte Frau Olenski hastig.

„Das Schießen, was denn sonst?“ sagte Thomas gähnend und verschwand.

(Luise Rinser, Jan Lobel aus Warschau)

朝早く、台所へお湯を沸かしに行くと、オレンスキー夫人はもうストーブに火を入れていた。彼女は黙って、朝食のパンを切っていた。眼は寝不足で生気のない顔に落ちくぼんでいた。なんにも言わなかった。しばらくすると、トーマスがくしゃくしゃした頭を戸口からつっこんだ。

「ゆうべの鉄砲は、いったいなんだったの？」と眠そうに訊ねた。

オレンスキー夫人は小声できいた。「あれを、お前、聞いたの？」

「もちろんさ」と、かれは呟いた。「みんな」

「なに、みんなって？」とオレンスキー夫人はせきこんで訊ねた。

「鉄砲の音だよ、ほかになにさ？」と、トーマスは欠伸をしながら言って消えた。

（ルイーゼ・リンゼル、ワルシャワからきた男、櫻井和市訳）

(114)

„Ich ahnte, daß Sie diese Geschichte kannten. Aber ist sie nicht eines der anmutigsten Kapitel der Mythologie? Ohne die Mythologie ist die Archäologie *Lumpensammlerei*. Ich warne Sie vor Archäologen. Wenn ich nachher ausziehe...“

„... um Lumpen zu sammeln...“

„Es muß leider sein.“

(Rudolf Hagelstange, Das Lied der Muschel, Ein Abend auf Delos)

(115)

Plötzlich bemerkte er, daß der Löffel in der Zuckerdose fehlte. *Diese Schlamperei!* Siegfried riß die Tür zum Flur auf. „Angelika!“ Er war zornrot. In der Stimme Haß und Ekel.

„Was ist, Pützchen?“

„Soll ich keinen Löffel mehr zum Zucker haben?“

„Ich komm gleich, Pützchen.“

Wie sie das „Pützchen“ heute betont! Es ist zum Davonlaufen! Siegfried schüttelte sich.

(Peter Jokostra, Herzinfarkt, VII)

(116)

[...] Auf der Klippe stehen rauchende Landser, Luftwaffensoldaten in ihrer flotten Sommeruniform – helle, graublaue Hemden mit aufgekrempelten Ärmeln, kurze dunkelblaue Leinenhose. Der goldene Haarflaum um die braunen Knie und Unterarme leuchtet eigentümlich. Sie sehen in den Mond, ihrem Zigarettenrauch nach, auf ihre wippenden Stiefelspitzen; lassen sich nicht in ein Gespräch ziehen. *Anscheinend wurden sie in einer sich gerade anbahnenden harmlosen Balgerei und Wasserschlacht mit den badenden Panjenkas gestört*. Weiter abseits im Maisfeld, eine, die mit abgewandtem Gesicht langsam und unbeholfen in ihre Kleider steigt; zwei Landser haben sich neben ihr niedergelassen und scheinen ihr irgendwelche Offerten zu machen. [...]

(Felix Hartlaub, Von unten gesehen,

Abendspaziergang am Fluss, Im Sommer 1942)

［…］斷崖に煙草を吸いながら兵隊たちが立っている。スマートな夏服をきた空軍兵 ― 薄い灰青色の、袖口を折返したシャツ、短かい藍色のリンネルのズボン。褐色の膝と下膊部に生えた金色の生毛（うぶげ）は奇妙に光る。長靴の尖（さき）で調子を取りながら、煙草の煙に沿って月を眺めている。話はしない。みたところ彼らは泳いでいるロシヤ女（パンエンカ）たちと丁度はじめたばかりの無邪気な喧嘩と水合戦を邪魔されたのだ。かなり離れた玉蜀黍（とうもろこし）畑で、そっぽを向いてゆっくり不器用に服をきている一人の女。二人の兵隊が彼女のそばに腰をおろし、何か申込んでいるようだ。［…］

（フェーリックス・ハルトラウプ、下から眺めて、

夕暮の川岸の散歩、城山良彦訳）

(117)

Als sie verschwunden war hinter dieser schmalen, braunen, verkratzten Tür, die zu ihrer Küche führte, blickte ich mich um. Es war alles noch wie voriges Jahr. Über der Theke hing das Bild ihres angeblichen Mannes, eines hübschen Marinesoldaten mit schwarzem Schnurrbart, ein buntes Photo, das den Burschen umrahmt von einem Rettungsring zeigte, auf den man „Patrie“ gemalt hatte. Dieser Bursche hatte kalte Augen, ein brutales Kinn und einen ausgesprochen patriotischen Mund.

Ich mochte ihn nicht. Daneben hingen ein paar Blumenbilder und süßlich sich küssende Paare. Alles war wie vor einem Jahr. Vielleicht war die Erinnerung etwas schäbiger, aber hätte sie noch schäbiger werden können? An dem Barstuhl, auf dem ich hockte, war ein Bein geleimt – ich wußte noch genau, *daß es bei einer Schlägerei Friedrichs mit Hans kaputt gegangen war, einer Schlägerei um ein häßliches Mädchen namens Lisette* –, und dieses Bein zeigte noch genau die trostlose Rotznase von der Leimspur, die man vergessen hatte, mit Glaspapier wegzureiben.

(Heinrich Böll, Unsere gute, alte Renée)

調理場に通じる狭い褐色の、傷だらけのドアの向こうに彼女の姿が消えたあと、私は周囲を見回した。何もかも昨年のままだった。カウンターの上の壁には、彼女の亭主なる人物の写真が掛かっていた。黒い口ひげを生やしたハンサムな水兵の写真だった。この色刷りの写真を丸く囲む額縁は救命浮き輪を型どっていて、そこには「祖国（パトリエ）」の絵が描かれていた。写真の若者は目つきが冷たく、残忍そうな顎（あご）と熱烈な愛国者らしい口をしていた。私は好きになれない男だった。これと並んで二、三枚の花の写真と、それに甘ったるいキスをかわしているカップルの写真が掛かっていた。すべて一年前のとおりだった。あるいは家具や調度がいくらか古くなっただろうか。いや、これ以上古くなりようもなかっただろう。私が腰掛けていたカウンターの椅子は、脚（あし）が一本接（つ）いであった ― まだよく憶えていたが、これはフリードリヒがハンスと撲（なぐ）り合いをして、それもリゼットという名の綺麗でもない女の子のことで撲り合いをして、その時に壊れたのだった ― この

椅子の脚を膠（にかわ）で接いだとき、はみ出した膠を削り忘れた跡がまだはっきりとみすぼらしく残っていた。

（ハインリヒ・ベル、ルネおばさん、青木順三訳）

(118)

Wenn das Augenmaß für das Mögliche überwuchert wird von der Leidenschaft für das Wünschbare, *wenn endzeitliche Angstmacherei zu falschen Ratschlägen führt*, wenn die Selbstdisziplin einer nüchternen Analyse von Opportunismus zersetzt wird... dann bringen wir die F.D.P. in die Lage, allein darüber zu betimmen, wer in Bonn regiert... Wer am liebsten die Koalition aufkündigen will, der muß wissen, daß es anschließend Jahrzehnte dauern wird, bis wir in die Regierung zurückkehren!... Diktaturen neigen zum Mord, Demokratien neigen zum Selbstmord... Laßt es nicht zu, daß die SPD Selbstmord begeht!

(Helmut Schmidt, Weggefährten, Erinnerungen und Reflexionen,

Die Gelehrten und die Politik, Zwei bedeutende Sozialwissenschaftler)

(119)

„Was hätten wir uns ersparen können?“

„Alles“, antwortete Marcel und berichtete hastig von dem Gepräch im Tunnel. „Wir haben Knopf noch nichts gesagt“, fuhr er dann fort. „Vieale meinte auch, daß wir zuerst mit dir sprechen sollten, aber wir müssen so schnell wie möglich zurück, denn wenn die zwei doch noch auftauchen und Knopf weiß nichts davon, *gibt es Scherereien*. Wir sagen ihm einfach, wie es war. Wenn er sie so gut kennt, wie er tut, wird er...“ Er verstummte und blickte Georges an, der sich während seiner Erzählung ein paarmal verfärbt hatte und jetzt so weiß wie ein Tuch war.

„Ist dir nicht gut?“ fragte Marcel bestürzt.

(Willi Heinrich, Alte Häuser sterben nicht, VII. Kapitel)

(120)

Als ich später im Bett lag und die deutschen Schüsse nicht aufhören wollten, dachte ich an Tosia und an die deutschen Gedichte, die ich ihr vorgelesen hatte, an die Verse, die uns vergessen ließen, was uns täglich bedrohte, *was uns inmitten der grausamsten Barbarei stündlich bevorstehen konnte*. Aber da gab es etwas, was auf uns noch stärker und noch tiefer wirkte als die Poesie, was uns bis ins Innerste aufwühlte, was uns berauschte. Es war die Musik.

(Marcel Reich-Ranicki, mein Leben,

2.Teil, Wenn die Musik der Liebe Nahrung ist)

(121)

Viele der Professoren brillierten mit ihrem Scharfsinn, um den Gedankengebäuden der Kollegen die „richtige Meinung" gegenüberzustellen, als ihre eigene, zumeist ebenso subjektive. *Oft war es eine spitzfindige, ziemlich abstoßende Rechthaberei*. Gerade in der Rechtswissenschaft hätten sich doch die Selbstkritik im Blick auf die jüngste Vergangenheit und die Suche nach einem orientierenden Neuanfang deutlich und verständlich Gehör verschaffen sollen. Das war es, wonach wir durch den Krieg geprägten Studenten suchten; zu viele ließen uns dabei allein und in der Schwebe.

(Richard von Weizsäcker, Vier Zeiten, Erinnerungen,

3.Abschnitt, Teilung Europas und Deutschlands in der bipolaren Welt,

Studium in Göttingen; Die Freunde)

(122)

[...]Doch näherte er sich bereits dem Vorplatz des Unterstandes. Hier wurden die Toten von den Lebenden getrennt. Dieses Inferno einer Schlachtbank auch noch zu betrachten, ertrug er nicht. Mit geschlossenen Augen lief er vorüber. *Nur in seinen Ohren klangen das Stöhnen und Wimmern, die Bettelei um einen Schluck Wasser*. Dann konnte er nach links in den Wald abbiegen. Die Bäume – oder vielmehr das, was von ihnen übriggeblieben war –

verschluckten ihn gleichsam. Sie boten Schutz gegen Granatwerfer, Schützenfeuer und Schrapnells. Das Pfeifen der Luft über ihm gewann erst wieder bei den Artilleriestellungen Bedeutung. Verlassenheit umgab ihn, sobald er den Wald betrat. [...]

(Gert Ledig, Die Stalinorgel, Prolog)

(123)

Lieber Max Frisch,

ich habe gestern angerufen, unvermittelt, in der Hoffnung, Sie würden, wie schon einmal – aber damals wußte ich es nicht –, am Telephon sein: ich wollte Sie um Rat bitten, um ein Gespräch, in Zürich, in Basel, wollte Sie fragen, was zu tun sei – denn etwas muß ja getan werden! – *angesichts all dieser sich mehr und mehr Raum greifenden Verlogenheit und Niedertracht und Hitlerei:* ich hatte nämlich wenige Stunden vorher einen Brief bekommen, von Heinrich Böll, einen Brief, der mir ein weiteres Mal bewies, wieviel Gemeinheit noch in den Gemütern sitzt, die man, leichtgläubig genug – aber wer will, wenn er sich den Glauben an die Menschen bewahren möchte, seine „Leichtgläubigkeit“ aufgeben? –, zu denjenigen zählte, auf die es „ankommt“.

(Paul Celan, Brief an Max Frisch, Paris, 14.4.1959)

親愛なるマックス・フリッシュ、

私は昨日電話をかけました、突然、あなたが、いつかのように — でもあの時は私はそれを知らずにでしたが — 電話に出て下さるのではないかと期待して。というのも、私はあなたに助言を願いたかったのです、対話を、チューリヒで、バーゼルで、あなたに尋ねたかったのです、どうすべきかを — というのは何かがなされなければならなかったからです！— これらすべてのますます増大していく虚偽と卑劣さとヒットラー的乱痴気を目の当りにして。つまり、私は数時間前に一通の手紙を受け取りました、ハインリヒ・ベルから、一つの手紙を、それは私にもう一度証明するのです、どれほどの卑劣さが、人々があまりにも騙されやすく — しかし誰が、人間への信頼を保持したいと

するならば、自分たちの「騙されやすさ」を放棄しようとするでしょうか？―、「重要である」者たちの一人に数えた人間たちの心の中にあるかを。

［…］

（パウル・ツェラン、マックス・フリッシュ宛の書簡、
パリ、1959 年 4 月 14 日、中村朝子訳）

この中村訳は、誤訳とまではいかないまでも、いかにもたどたどしく、かつ分かりにくい。一つだけ例を挙げよう。ich hatte nämlich wenige Stunden vorher einen Brief bekommen が「私は数時間前に一通の手紙を受け取りました」と訳されているが、この文が過去完了で書かれていることを見落としている。つまりツェランは、彼がフリッシュに電話をかける数時間前に、ハインリヒ・ベルから一通の手紙を受け取っていたのである。

(124)

[...] Er hustete. Der massige Körper zuckte von tausend kleinen Erschütterungen. „Und jetzt habe ich genug! *Verfluchte Schinderei!*“

(Walter Jens, Nein. Die Welt der Angeklagten, 1.Buch, II)

(125)

Irenes Augen waren hinter der dunklen Brille erschrocken auf Manuel gerichtet. Der würgte, nickte und schwieg. Wenn ich eine Ahnung hätte, wovon dieser Mann redet, dachte er. Auch Groll hatte schon so ähnlich gesprochen – nicht derart wüst. Was hat mein Vater getan? Was hat mein Vater getan?

„Und es ist typisch, absolut typisch, daß er mit Amerikanern und Sowjets abschloß. *Darauf beruht die Kumpanei dieser beiden Totengräber unserer Welt*. Das Gleichgewicht des Schreckens zwischen ihnen muß gewahrt bleiben, immer, auf allen Gebieten. Warum sagen Sie nichts?“

„Ich höre Ihnen zu.“

„Sie finden keine Worte, das ist es! Sie sind erschüttert und entsetzt, ich kann

das gut verstehen. [...]“

(Johannes Mario Simmel, Und Jimmy ging zum Regenbogen, 47.Kapitel)

(126)

Ja, aber, sage ich eingeschüchtert.

Nichts aber, sagt Ivan, *und immer leiden sie gleich für die ganze Menschheit und ihre Scherereien* und denken an die Kriege und stellen sich schon vor, aber wenn du mit mir Kaffee trinkst oder wenn wir Wein trinken und Schach spielen, wo ist dann der Krieg und wo ist die hungernde, sterbende Menschheit, und tut dir dann wirklich alles leid, oder tut es dir nur leid, weil du die Partie verlierst, oder weil ich gleich einen Riesenhunger haben werde, und warum lachst du denn jetzt, hat die Menschheit vielleicht viel zu lachen in diesem Augenblick? [...]

(Ingeborg Bachmann, Malina, 1. Kapitel Glücklich mit Ivan)

ええ、でも、とわたくしはおずおずと言う。

でもじゃないよ、とイヴァン。いつも、なにかというとこの人たちはすぐに全人類のために、人類の難儀のために心を痛めるんだ。そして、戦争のことに思いを馳(は)せ、次の戦争を想像するんだよ。しかしねえ、きみがぼくとコーヒーを飲んでくつろいだり、ワインを飲んでチェスをやったりしているとき、いったいどこに戦争があるのかな。どこに飢えて死にゆく人類があるのかな。そういうとき、きみにとってほんとうになにもかも心配なのかい。それともきみがチェスに負けることだけが、あるいはぼくがたちまち空腹になることだけが心配なのかい。なぜきみはここのところで笑うの？ こういうばあいに人類は笑うべきことがいっぱいあるのだろうか。[…]

（インゲボルク・バッハマン、マリーナ、

第一章 イヴァンとしあわせに、神品芳夫・神品友子訳）

Wo ist *dann* der Krieg? が「いったいどこに戦争があるのかな」と訳されているが、Wo ist *denn* der Krieg? ではないのだから、これは dann を denn と混同してしまった誤訳だろう。この dann は、それに先行する wenn du

mit mir Kaffee trinkst oder wenn wir Wein trinken und Schach spielen を受けて、「きみがぼくとコーヒーを飲んでくつろいだり、ワインを飲んでチェスをやったりしているとき」には、戦争のことなんか忘れているんじゃないのか？という痛烈な自己批判なのだから。

(127)

Aber von meinem Parchimer Anfang weiß ich alles noch recht genau. *Er hatte mit Ungeduld, Angeberei und wenig aussichtsreicher Verliebtheit zu tun*, stimmte also trefflich zu Goethens Knittelversen. Und das Knittelige dieser Verse schien zu meinem schmalen Vermögen zu stimmen, Gefühle in Worte zu fassen und diesen Worten eine Ordnung zu geben.

Vielleicht aber hat die Sache auch auf verdächtig formalistische Weise begonnen, nämlich mit dem Versuch, *der nachäffenden Reimerei, die ich nach der „Faust"-Lektüre nicht mehr aus dem Kopf bekam, einen passenden Inhalt zu finden*. Womöglich gar führte ich mich verliebt auf, weil ich ein Reimer werden wollte. Am Anfang war... ich weiß nicht, was am, sondern nur, daß ein Anfang war.

(Hermann Kant, Abspann. Erinnerungen, IX)

(128)

Es wird nun nötig sein, daß ich von ihm spreche. Ich habe mir im Verlauf meiner Reise durch die verschiedenen Lager die Peiniger genau angesehen und lernte, wie man so sagt, meine Brüder kennen. Nehle zeichnete sich in seinem Metier in vielem aus. Die Grausamkeit der andern machte er nicht mit. Ich muß zugeben, daß er den Gefangenen half, so gut dies möglich war, und soweit dies in einem Lager, dessen Bestimmung darin bestand, alles zu vernichten, überhaupt noch einen Zweck hatte. Er war in einem ganz andern Sinn als die andern Ärzte fürchterlich, Kommisar. *Seine Experimente zeichneten sich nicht durch erhöhte Quälereien aus;* auch bei den andern starben die kunstvoll gefesselten Juden brüllend unter den Messern im Schock, den die Schmerzen auslösten, und nicht an der ärztlichen Kunst.

Seine Teufelei war, daß er all dies mit der Zustimmung seiner Opfer ausführte. So unwahrscheinlich es ist, Nehle operierte nur Juden, die sich freiwillig meldeten, die genau wußten, was ihnen bevorstand, die sogar, das setzte er zur Bedingung, den Operationen beiwohnen mußten, um die vollen Schrecken der Tortur zu sehen, bevor sie ihre Zustimmung geben konnten, nun dasselbe zu erleiden.“

(Friedrich Dürrenmatt, Der Verdacht, 1.Teil, Gulliver)

「[…] さあて、ネーレの話を、もっとしなきゃなるまいな。収容所から収容所へ、あちこち引き回されている間に、わしは拷問者たちをつらつら眺めた。そして〈親愛なる兄弟〉と言われるこの連中を腹の底まで知ったんだが、ネーレのやり口は多くの点でずば抜けていた。他の連中の残虐行為に、奴は決して加わらなかった。それどころか奴が囚人たちを、可能なかぎりは助けたこと、わしは認めざるをえない。全員絶滅を目的とする収容所において〈助ける〉ことに、まだ意味があればの話だがな。そのかぎりで言えばだが、ネーレが囚人を助けたこと、わしはたしかに認めざるをえない。

警部、奴が怖ろしかったのは、他の収容所医師たちとは、まったく別の意味においてだった。奴のやらかす実験が、特に酷(ひど)い傷(いた)めつけだったというわけではない。肉体の苦痛なら、どの医師にやられても同じだ。ご丁寧に縛りつけられたユダヤ人たちは、メスを当てられ、吼(ほ)え叫びながら、医学的処理によってというよりは、苦痛のショックのために死んでいったんだ。

ではネーレの何が、とりわけ悪魔の仕業(しわざ)だったのか？ 奴はすべてを、犠牲者の同意を取り付けた上でやらかしたんだ。これこそ悪魔だぞ。信じられんだろうが、ユダヤ人の中でも自発的に申し出た者だけを、ネーレは手術したんだ。だからネーレの犠牲者たちは、自分の身に何が起こるか、はじめから十分に知っていた。いや、それどころか、仲間たちが手術を受ける現場に立ち合って、拷問の怖ろしさの一部始終を見届けた者たちだけに、その手術を受けると申し出る権利を、ネーレは与えたんだ」

（フリードリヒ・デュレンマット、疑惑、

(129)

Aber kein Streber, büffelte mäßig, ließ jeden abschreiben, petzte nie, entwickelte, außer während der Turnstunde, keinen besonderen Ehrgeiz, *hatte auffallende Abscheu vor den üblichen Sauereien der Tertianer* und griff ein, als Hotten Sonntag einen Überzieher, den er zwischen Bänken im Steffenspark gefunden hatte, an einem Ast aufgespießt in die Klasse brachte und über die Türklinke der Klassentür stülpte, Studienrat Treuge, einem halbblinden Pauker, der eigentlich hätte pensioniert sein müssen, sollte eins ausgewischt werden. Jemand rief schon auf dem Korridor: „Er kommt!“, da drückte sich Mahlke aus seiner Bank, machte unbeeilte Schritte und entfernte das Präserativ mit einem Butterbrotpapier von der Klinke.

(Günter Grass, Katz und Maus, II)

しかし彼はガリ勉型ではなかった、適当に勉強し、だれにでもノートを写させてやり、告げ口などはせず、体育の時間を除いては、格別の功名心を発揮しなかった、そして高校四、五年生（高校と訳した、当時のギムナジウムは九年制である）がよくやる不潔ないたずらに対して異常なほど嫌悪感を抱いていた。ホッテン・ゾンタークがシュテフェンス公園のベンチのあいだから見つけたサックを枝の先に突き刺して教室に持ってき、ドアの把っ手に被せておいたときなど、彼は文句をいったものだ。半ば目の見えないトロイゲ先生は本来なら恩給をもらって退職すべき年だというのに、猛烈な詰め込み教育をやっていたので、みんなは彼に一杯食わせるつもりだった。だれかが廊下にいて、「きたぞ！」と叫んだ。そのときマールケは椅子からそっと立ちあがり、ゆっくりとした足どりで進み出ると、バターつきパンの包み紙で把っ手からコンドームをはずしたのであった。

（ギュンター・グラス、猫と鼠、第二章、高本研一訳）

Überzieher を「サック」、Präserativ を「コンドーム」と訳し分けるあたり、高本訳もなかなかのものだ。

(130)

Wie ich absolut auf Nutella steh, weil nämlich unsere Putzfrau, wenn es mir mies ging...

Nö, Taddel, jetzt bin ich dran. Meine Mama aber, die ja die Fotos von eurem Mariechen nicht zu sehen bekommen hat, soll, als Rieke, das Plappermäulchen, ihr davon erzählte, extrem ausgerastet sein und schrecklich geschimpft haben: „Sowas gibts nicht! *Spökenkiekerei, reiner Aberglaube ist das!* Spukgeschichten!“ Naja, zwischen meiner Mama und eurer alten Marie soll es ein paarmal ganz schön gekracht haben, weil mein Papa unablässig mit ihr zusammenhockte, sie nur auf ihn gehört hat, und er regelrecht abhängig gewesen sein muß von seinem Mariechen und ihrer Box, mit der sie Exklusivfotos nur für ihn gemacht hat, die er angeblich für sein Buch benötigte, na, ihr wißt schon: [...]

(Günter Grass, Die Box, Dunkelkammergeschichten, Wünschdirwas)

ちょうどおれがヌテラ（一種のチョコレート・スプレッドの商品名）と聞くとたまらなく舐めたい気分になるようなものだろうな。おれがいじけていると、いつもお掃除のおばさんが……。

だめよ！ タッデル、今は私がしゃべる順番なのよ。私たちのママは、マリーおばさんから写真を見せてもらえなかったんだけど、おしゃべりなリーケからそうした写真のことを聞くと、おっそろしく怒り出し、途方もない悪態をつき出したんですってね。「そんなことがあってたまるもんですか！ 霊が見えるだの何だのって、とんでもない迷信ですよ！ 何がお化けですか！」 いや、まあね、ママとあんたたちのマリーおばさんとのあいだでは、何度か派手な罵り合いがあったそうね。原因はパパが絶えずおばさんといっしょにいたこと、おばさんがパパの言うことしか聞かなかったこと、パパがすっかりマリーさんとそのボックスカメラなしではやっていけなくなったこと、そんなとこかな。マリーさんはボックスカメラで、もっぱらパパのために、本を書くのに必要な写真を撮っていたのよね。もうみんな知っているわよね。［…］

（ギュンター・グラス、箱型（ボックス）カメラ、
願い事を唱えてごらん、藤川芳朗訳）

(131)

Nun komm schon rüber mit deiner Story vom Kumpel in Glückstadt.

Erst noch die Ratte, denn die blöde Sache mit mir und meinem Kumpel kam sowieso erst Wochen nach Weihnachten raus. Vorher lief alles okay. Taddel war wieder da. Paulchen stromerte im Dorf rum oder war bei Marie. Kamille hatte mt Geschenken zu tun. Sollte nämlich ne Überraschung werden. Und richtig, unterm Weihnachtsbaum stand dann endlich, was sich der Alte schon lange gewünscht hatte, *und was wir für ne typische Spinnerei von ihm hielten*, aber nett wie wir sein konnten, nur bißchen belächelt haben, nämlich der Käfig mit ner ausgewachsenen Ratte drin.

(Günter Grass, Die Box, Dunkelkammergeschichten, Krummes Ding)

さあ、さっさとグリュックシュタットの相棒の話を聞かせろよ。

まずはネズミの話だ。だって、僕と相棒の馬鹿げた一件はクリスマスから何週間か過ぎてからのことだからね。それまでは何も問題はなかったんだ。タッデルは無事に戻ってきたし、パウエルヒェンは村の中をぶらついているか、そうでなければマリーさんのところへ行っていたしね。カミレはクリスマスのプレゼントで頭を悩ませていた。どうしてもびっくりさせたいと思っていたからね。こうしてじいさんは、クリスマスツリーの下にまさしく長いこと望んでいたものをとうとう見つけた、というわけさ。つまり、十分に成長したネズミが籠に入れて置いてあったんだ。僕たちは、そんなものをほしがるなんてじいさん独特の妄想だと思ったがね。でもその一方で、できるだけやさしく笑顔を見せるだけにしておいたよ。

（ギュンター・グラス、箱型（ボックス）カメラ、非行、藤川芳朗訳）

und was wir für ne typische Spinnerei von ihm hielten, aber nett wie wir sein konnten, nur bißchen belächelt haben が「僕たちは、そんなものをほしがるなんてじいさん独特の妄想だと思ったがね。でもその一方で、できるだけや

さしく笑顔を見せるだけにしておいたよ。」と訳されているが、前半はよいとして、aber nett wie wir sein konnten, nur bißchen belächelt haben が「でもその一方で、できるだけやさしく笑顔を見せるだけにしておいたよ。」と解釈されているのはまったくの誤訳。klug wie er ist（彼は利口だから）、schnell im Denken und gewandt in der Rede, wie sie war（彼女は頭の回転も早く、弁舌もたくみであったので）などに見られる〈理由〉を述べる wie の特殊な用法だから、aber nett wie wir sein konnten も「しかし僕たちはやさしい気持ちになることもできたので」と解釈すべきだろう。それともう一つ、nur bißchen belächelt haben に用いられている belächeln の補足語は、und was wir für ne typische Spinnerei von ihm hielten の halten と同様、was であることに注意していただきたい。

(132)

Am 28.Dezember ließ er wieder einspannen für eine Spazierfahrt. Arbeiten konnte er in diesen Tagen nicht mehr. Er schämte sich vor sich selbst. Aber es nützte nichts. So vehement wie noch nie schob er alles, was ihn hemmen wollte, beiseite. Für Bedenken war er nicht mehr zu haben. Mochte das heißen, was es wollte! Was ging das ihn an! *Diese ewige Benoterei!* Das Leben will nicht benotet, es will gelebt werden!

(Martin Walser, Ein liebender Mann, 3.Teil, 6.Kapitel)

十二月二十八日、馬車での散歩のためふたたび馬の用意をさせた。この数日、もう仕事が手につかなかった。自分でも恥ずかしくなったが、どうしようもなかった。自分の行動を妨げようとするすべてのことをことごとく無視した。もはやためらいはない。なんと言われようとかまわない！ 自分にはかかわりのないことだ！ わたしのふるまいをいつまでもとやかく言われつづけるなんて！ それよりも生きること、それが大切なのだ！

（マルティン・ヴァルザー、マリーエンバートの悲歌、
第三部、第六章、八木輝明訳）

(133)

Das elendste Wort überhaupt: Warum.

Bloß jetzt keine Motiv-Schnüffelei.

Bloß jetzt keine Klage oder gar Anklage.

Dass SIE Gründe hat, geht dich nichts an.

SIE bleibt jenseits aller vorwurfhaften Belangbarkeit. Wenn es nicht nötig gewesen wäre, wäre sie nicht verschwunden.

(Martin Walser, Das dreizehnte Kapitel, 1.Teil, 26.Kapitel)

(134)

Heute Vormittag, als die Nachricht noch nicht eingetroffen war, *trieb mich meine Stadtstreicherei bis in Ihre Gegend*. Mit der S-Bahn. Eine Gleichaltrige mir gegenüber. Neben ihr eine ganz Junge, die hatte einen Knopf im Ohr, von dem die Leitung zum Gerät führte. Sie kam mir pränatal vor. Wir, die Gleichaltrige und ich, schauten hinaus ins vorbeifliegende Berlin. Weil wir beide so hinausschauten, musste, wer uns sah, glauben, wir seien ein Paar.[...]

(Martin Walser, Das dreizehnte Kapitel, 2.Teil, 7.Kapitel)

(135)

Am nächten Morgen hat er Nymczik die Pistole auf die Brust gesetzt: „Was ist Ihnen von der METALLBAU STOLLBERG bekannt?“

Nymczik fummelt so lange an den Clips in seiner Brusttasche herum, daß Hähnelt überzeugt ist, er sei nicht nur eingeweiht, *sondern wirkte an der Schweinerei sogar mit*. „Ich dachte, dieser ganze Komplex wäre Ihnen inzwischen bekannt.“ Er tastete sich Satz um Satz voran. „Eigentlich fing dieser METALLBAU mit einer Fertigungsstätte an, die einmal zu uns gehörte. Sie wurde noch vor der Wende hochgezogen, für ein Produktionsprogramm, das ausschließlich auf den Export in die SU ausgerichtet war.

(Dieter Meichsner, Abrechnung, 6)

(136)

Ohne einen Schuß von Hochstapelei läßt sich das Buchverlegen sicher nicht betreiben, und wie ein Felix Krull auf der Reise durch das Universum der neuen, alten bürgerlichen Bildung fühlte ich mich oft auf meinen Verlags-expeditionen. [...]

(Reihard Baumgart, Damals. Ein Leben in Deutschland, Büchermachen)

人名の Felix Krull になぜ不定冠詞（ein Felix Krull）がついているのかと疑問に思う方のために書いておくが、これはトーマス・マンのあの最晩年の作品 Bekenntnisse des Hochstaplers Felix Krull を念頭に置いてのことである。

(137)

Die Konferenz beschloß eine Vereinbarung, die folgende Hauptpunkte enthielt:

1. Sofortiger Waffenstillstand zwischen den vertretenen Gruppen: *Einstellung aller Schießereien und Schlägereien*.

2. Ende der Raubüberfälle der einzelnen Banden auf die Schnapsmagazine der andern [...]

(Hans Magnus Enzensberger, Politsche Kolportagen,

Chicago-Ballade, Modell einer terroristischen Gesellschaft)

この会議で結ばれた協定は、つぎの諸項目をおもな項目としてふくんでいる。

一　参加した諸グループ間の即刻の休戦、すべての射ち合いや殴り合いの停止。

二　一団体による他団体のウィスキー倉庫の襲撃と略奪をやめる。

［…］

（ハンス・マグヌス・エンツェンスベルガー、政治と犯罪、

シカゴ・バラード、テロリズム社会のモデル、野村修訳）

(138)

Alexander saß vornübergebeugt vor dem Gerät, Popcornkrümel im Schoß, er hätte sich auch zurücklehnen können, aber er lehnte sich vor, er paßte auf, ob er was notieren könnte in seinem Tagebuch. „Wenn du erst mal wieder zu Hause bist, kriegst du das nie wieder zusammen“, und er drückte den Programmknopf wieder und wieder. *Von Pferdeabschlachtereien kam nichts über den Äther*.

(Walter Kempowski, Letzte Grüße, 22.Kapitel)

(139)

„Das ist nicht wahr!“ stammelte Gigi. „Das ist Lüge!“

„Du liebe Zeit!“ antwortete die Stimme und lachte wieder tonlos, „ausgerechnet du willst uns mit der Wahrheit kommen? Du hattest doch früher immer so viele schöne Sprüche von wegen wahr und nicht wahr. Ach nein, armer Gigi, es wird dir nicht gut bekommen, wenn du versuchst, dich auf die Warhheit zu berufen. *Berühmt bist du mit unserer Hilfe für deine Flunkereien*. Für die Wahrheit bist du nicht zuständig. Darum laß es sein!“

(Michael Ende, Momo, 3.Teil, 13.Kapitel Dort ein Tag und hier ein Jahr)

「そんなことはない！」と、ジジはどもりながら言いました。「そんなのはうそだ！」

「これはおそれいった！」と電話の声はこたえて、またのっぺりした笑い声をたてました。

「えりもえっておまえがほんとうのことを言って、われわれに立ちむかうつもりか？ ほんとうとうそについては、おまえはむかしいつも、いろいろとけっこうな説をならべてたものじゃないか。いけないね、ジジ、ほんとうのことを言おうなんてしたら、身のためにならないぞ。われわれの援助で、おまえはその大ぼらで名を売ったのだ。ほんとうのことを言うなんてがらじゃない。だから、やめておくんだ！」

（ミヒャエル・エンデ、モモ、

第三部、十三章、むこうでは一日、ここでは一年、大島かおる訳）

(140)

[...] Zum Streit der Parteien, in dem das Bild Benjamins nahezu zersplittert, bietet die akademische Behandlung der Sache womöglich ein Korrektiv, aber sicher keine Alternative. Zudem sind die konkurrierenden Interpretationen Benjamin nicht übergestülpt; *es ist wohl nicht bloß Geheimniskrämerei*, die, wie Adorno berichtet, Benjamin veranlaßt hat, seine Freunde voneinander fernzuhalten: nur als surrealistische Szene vollziehbar wäre etwa die Vorstellung, Scholem, Adorno und Brecht zum friedlichen Symposion am runden Tisch, unter dem Breton oder Aragon hocken, während Wyneken an der Tür steht, versammelt zu sehen, sagen wir zu einem Disput über den „Geist der Utopie“ oder gar den „Geist als Widersacher der Seele“. [...]

(Jürgen Habermas, Bewußtmachende oder rettende Kritik.
Die Aktualität Walter Benjamins)

(141)

Folgte die Art von Lachen, die wir uns für genau diese Gelegenheiten angewöhnt hatten, ein bißchen herausfordernd, ein bißchen eitel. Und wenn keiner mithörte? *Wenn wir mit unserer Selbstüberschätzung und Mutspielerei ins Leere liefen?* Das würde nicht den geringsten Unterschied machen. Darüber wollte ich nachdenken.

(Christa Wolf, Was bleibt)

(142)

Ich mag mich hier nicht einlassen auf eine Untersuchung, wie sehr oder wie wenig westliche Radiosendungen verantwortlich waren für das Umschlagen des Aufstands vom anfänglichen „Die Normen müssen weg“ zum alsbaldigen „Die Regierung muss weg“. Aber bezeugen kann ich: Eine intellektuelle, gar organisierte Verbreitung gab es nicht. Was es gab, war eine Verwirrung in den Köpfen vieler Intellektueller. Das spektakulärste Beispiel ist Bertold Brecht. Ihn habe ich auf der Straße gesehen; wie man heute weiß, hatte er

Probearbeiten unterbrochen. Eingeklemmt in einer nicht einmal großen Menge wütender Arbeiter versuchte der dürre kleine Mann in seinem grauen Kittel zu diskutieren – aber niemand erkannte ihn; er war kein Sartre, und etwas, das man heute sich angewöhnt hat „Medienöffentlichkeit“ zu nennen, gab es 1953 in der DDR nicht, keine Illustriertenbilder, keine Fernseh-interviews. In einer Mischung aus Verächtlichkeit und Misstrauen gegen die ihnen ungewohnte Sprache wie dem Selbstbewusstsein derer, die wussten, *was Normenschufterei und primitivster Mangel an grundlegenden Versorgungsgütern ist*, schoben sie den Stückeschreiber halb gutmütig, halb grob mit einem „Nu laß man, Männeken, du hast ja von nüscht *(sic)* keine Ahnung nich *(sic)*“ beiseite.

(Fritz Joachim Raddatz, Unruhestifter, Erinnerungen, Vier)

(143)

[...] Daß der Ausbruch aus dem Kessel nicht stattfand, konnte v. Ma. nicht verhindern. Er sandte Major Ei. zu P., um ihn vertraulich zu ermuntern, auszubrechen. Zwar verbot v. Ma. am 23. 12. den Ausbruch, aber er hätte ihn [falls es doch geschehen wäre] vielleicht gedeckt – vor allem hat er ihn erwünscht und innerlich nicht mißbilligt. Das wußte P. nicht. *Die Schlußmetzelei im Kessel nach dem 20. Januar wollte v. Ma. verhindern.* Als der Oberstleutnant v. Zi. aus dem Kessel ausflog, und v. Ma. besuchte, sagte ihm v. Ma. diese Meinung, bat das aber vertraulich zu behandeln. [...]

(Alexander Kluge, Schlachtbeschreibung, Rekapitulation, V)

(144)

[...]Er sagte so: es lag im Interesse der Regierung *dass sie eine ideologische Schwarmgeisterei im rechten Anfang unterband*, das begründete er so eingehend und verständig dass man sich nur wundern konnte über seine frühere Feindseligkeit, und er sagte es liege im Interesse des UNBE-LEHRBAR ERGEBENEN dass endlich nicht mehr nach den Vorschriften und Regeln des Lehrbuches gedacht werde, und da dies unbestreitbar auf der

Hand liegen sollte wie es schien, blieb nur noch zu fragen wer denn etwa recht haben sollte (von der Richtigkeit zu schweigen, die war unkenntlich geworden). [...]

(Uwe Johnson, Mutmassungen über Jakob, III)

［…］かれはこう言う ― 政府がイデオロギー的な熱狂沙汰のごく初期のうちにその息の根をとめてしまうのは政府のためにすることなのである、その根拠をかれはまことに細部にわたってわかりやすく説明するので、人はかれの以前の敵意をいぶかしがるのがせいぜいというところなのだ、そしてかれは、いよいよもう教科書の指示や規則にしたがって考えたりしないようにすることが、頑迷に身を捧げている人たちの関心事なのだと言った。そしてこのことは論議の余地もなく明瞭であるはずのことのようだから、あと疑問としてのこるのは、いったいだれのいうことがもっともなのだろうかということだ（真のただしさということは論外としよう、これは見きわめられなくなってしまったのだ）［…］

（ウーヴェ・ヨーンゾン、ヤーコプについての推測、Ⅲ、藤本淳雄訳）

ここで「熱狂沙汰」と訳されている Schwarmgeisterei は、名詞 Schwarmgeist からの即席造語だが、そもそも Martin Luther が、農民戦争のさいの熱狂的な農民の暴動が宗教改革の妨げになることを怒り、農民戦争の指導者たちのことを Schwarmgeister と呼んだとのことである*。そのことから推測すれば、Schwarmgeisterei は複数形 Schwarmgeister からの造語と考える方がよいかもしれない。

＊このことは新約聖書学の荒井献さんから教えていただいた。ここに記して心から謝意を表したい。

(145)

Die Ereignisse des 13. August werfen ihre Schatten auch auf unsere Kleinstadt. Es sieht aus, als führten wir einen unterirdischen Bürgerkrieg. Feinde und potentielle Feinde, die, wäre Berlin nicht abgeriegelt worden, in den Westen gegangen wären, zeigen ihre Spuren: Es gibt Inschriften an

Schulen und auf dem Pflaster *„Nieder mit der roten Tyrannei“*; vor zwei Nächten sind die Telefonkabel zur Kreisleitung und zu gesellschaftlichen Institutionen durchschnitten worden; nachts patrouillieren Arbeiterstreifen durch die Stadt.

(Brigitte Reimann, Ich bedaure nichts,

Tagebücher 1955-1963, 1961, Hoy, 9.9.)

(146)

Stop mal, stop! – Ich hatte ganz schön mit Mädchen. Zum erstenmal mit vierzehn. Jetzt kann ich’s ja sagen. Man hatte so allerhand Zeug gehört, aber nichts Bestimmtes. Da wollte ich’s endlich genau wissen, das war so meine Art. Sie hieß Sylvia. Sie war ungefähr drei Jahre älter als ich. Ich brauchte knapp sechzig Minuten, um sie rumzukriegen. Ich finde, das war eine gute Zeit für mein Alter, und wenn man bedenkt, daß ich noch nicht meinen vollen Charme hatte und nicht dieses ausgeprägte Kinn. Ich sag das nicht, um anzugeben, sondern daß sich keiner ein falsches Bild macht, Leute. Ein Jahr später klärte mich meine Mutter auf. Sie rackerte sich ganz schön ab. Ich Idiot hätte mich beölen können, aber ich machte Pfötchen wie immer. Ich glaube, *das war eine Sauerei*.

(Ulrich Plenzdorf, Die neuen Leiden des jungen W.)

ちょっとストップ、ストップ！— そいつはもちろん嘘っぱちだよ。女の子とかなり関係があったさ。はじめてアレをしたのは十四歳のとき。死んでしまったいまとなりゃ、うちあけたってかまやしないさ。ああいうもんだこういうもんだときかされてはいても、肝心のことはなにひとつわからない。そこで、自分ではっきりたしかめてやれという気になった。そういうのがぼくの流儀だったのさ。彼女の名はジルヴィア。ぼくより三歳ほど年上だった。彼女をくどき落とすのに小一時間もかかったね。ぼくの年齢からすれば小一時間ってのはかなりよいタイムだと思うよ。それにぼくにはまだ一人前の魅力がなく、いまみたいなきりりとした顎(あご)をしていなかったことを勘定にいれてくれりゃね。こんなことをいうのはなにもほらを吹こうというのではなく、

まちがった想像をしてもらいたくないためなんだぜ、諸君。その一年後にお母さんがぼくに性教育をしてくれた。まったくの四苦八苦ってところだったよ。ぼくったら、ざまあみやがれってところだったが、いつものように尻尾（ヒッポ）を振っておとなしくきいていたのさ。卑怯なことだったがね。

（ウルリヒ・プレンツドルフ、若きWのあらたな悩み、早崎守俊訳）

(147)

Wolli:

Da ruft mich jetzt ein Freund an, der in Costa Rica wohnt, ich soll drei Massageapparate mitbringen und meine Frau braucht auch einen Massageapparat, weil sie auch gerne rumwichst.

Fichte:

Du brauchst keinen?

Wolli:

Nein.

Nun hab ich da drei Massageapparate drinne.

Nun stell dir mal vor, die machen den Koffer auf, dann fallen da erst mal drei Massageapparate raus *und Fotos nur mit Arschfickerei*.

Fichte:

Hast du den Koran mit?

Wolli:

Den muß ich mitnehmen, obwohl ich den Koran wirklich blöde finde.

(Hubert Fichte, Hamburg Hauptbahnhof, V Gespräch mit Wolli und Linda)

(148)

1830 benutzte Theodor Mundt eine Rezension über *Wilhelm Meisters Wanderjahre*, um mit der heroischen Epoche der deutschen Literatur abzurechnen. Er hält ihr den Irrtum vor, an das produktive Individuum „eine ganze Welt geknüpft zu sehen und sich durch sein einzelnes Talent zu einer geistigen Universalherrschaft über die Zeit berufen zu achten. Daher das

titanenmäßige, revolutionäre Ringen der Geister in der vergangenen Literaturperiode; daher die viele Verzweiflung unglücklicher Genies und der häufige Wahnsinn in Deutschland; daher die poetische Himmelstürmerei und der geistige Hochmut gegen Ende des vorigen Jahrhunderts. Diese Literaturperiode liegt hinter uns. [...]

(Heinz Schlaffer, Die kurze Geschichte der deutschen Literatur,
Fortgang, Wiederkehr und Ende, Fortgang: das 19. Jahrhundert)

一八三〇年、テオドーア・ムントは『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』への批評を利用して、ドイツ文学の英雄時代との決着をつけようとした。ムントはこの英雄時代の人々が、創造的個人に「全世界が結びつけられていると思い、個人にはその個々の才能を通じて時代の精神を普遍的に支配する資格がある」と考えたのは、誤りであると非難する。「この誤りゆえに、過ぎ去った文学的時代におけるさまざまな精神の持ち主たちの巨人的、革命的格闘があったのである。この誤りゆえに、ドイツでは不幸な天才たちの多くが絶望し、しばしば狂気に陥ったのである。またこの誤りゆえに、前世紀末において文学（ポエジー）的理想の盲目的追求や精神的高慢が存在したのである。このような文学時代は過去のものである。[…]」。

（ハインツ・シュラッファー、ドイツ文学の短い歴史、
第四章 進展、回帰、終焉、（１）進展 ― 十九世紀、
和泉雅人・安川晴基訳）

(149)

Im Prater geriet er in eine Schlägerei. Ein Bursche zog ihm von hinten schnell die Jacke über die Arme, der andre stieß ihm den Kopf unters Kinn. Bloch ging ein wenig in die Knie, versetzte dann dem Burschen vorn einen Tritt. Schließlich drängten ihn die beiden hinter einen Süßwarenstand und schlugen ihn nieder. Er fiel um, und sie gingen weg. In einer Toilette säuberte sich Bloch das Gesicht und den Anzug.

(Peter Handke, Die Angst des Tormanns beim Elfmeter)

プラーター公園で、彼はなぐり合いをする羽目に落ちた。ひとりの

若者がうしろからやにわに彼の上衣を両腕もろともたくしあげ、もうひとりが彼の頤の下に頭突きをくわせた。ブロッホは少しぐらついたが、やがて前の若者を足蹴にする。結局二人組は彼を菓子売りの屋台のうしろへ押し込めて、たたきのめした。彼はぶっ倒れ、彼らは逃げ去る。ブロッホはそこらの洗面所で顔と服をきれいにした。

（ペーター・ハントケ、不安、
ペナルティキックを受けるゴールキーパーの……、羽白幸雄訳）

(150)

Alles allein zu machen, bedeutete für François Barda und Jacques doppelt so viel Arbeit – aber sie könnten sich auch besser austauschen. *Und es kommen weniger Missverständnisse auf und weniger Eifersüchteleien*.

(Ulrich Wickert, Die Wüstenkönigin.
Der Richter in Angola, Die Flucht, Freitag)

(151)

Ich konnte die ganze Nacht nicht schlafen, war am nächsten Tag gereizt, *und es gab wieder die alten Kräche und Sticheleien zwischen uns*. Die Zeit zog sich hin, und ab zwölf Uhr fing meine Mutter schon an mit: „Müssen wir nicht zum Flughafen fahren?“ Wie alle alten Leute war sie immer stundenlang zu früh dran.[...]

(Elke Heidenreich, Die schönsten Jahre)

(152)

[...] Ein Musterbeispiel für diese Tradition bildet Christoph Martin Wielands Roman *Der Sieg der Natur über die Schwärmerey oder die Abenteuer des Don Silvo von Rosalva* (1764), der an spanische Vorbilder, insbesondere an Cervantes’ Don Quijote (2.Teile, 1605 u. 1615) anknüpft. [...]

(Ralf Schnell, Die Literatur der Bundesrepublik, Autoren, Geschichte,
Literaturbetrieb, 2.Teil Literaturgeschichte, 5. Widerstand der Ästhetik,

これは前にも指摘したことだが、ヴィーラントの小説の題名で Schwärmerei が Schwärmerey と表記されていることに注意していただきたい。

(153)

Wortlaut deines ersten Briefes:

„Solange ich mich erinnern kann, stand der Selbstmord wie ein Auftrag in meinem Leben, den ich irgendwann erfüllen mußte. Jeder Tag war ein Ausweichen. *Meine Eltern sprachen bei unerledigten und unangenehmen Aufgaben von ‚Druckbergerei'* – sie meinten damit gewiß nicht meinen noch nicht vollzogenen Tod, aber *ich* meinte ihn. Immer wenn ich das Wort ‚Druckberger' hörte (zeitweise war mir, als sei das mein eigentlicher Vorname), dachte ich an meinen geheimen Auftrag: daß ich Hand an mich zu legen hatte und nichts und niemand mir dieses unerbittliche Gebot erleichtern konnte. [...]

(Gerd Heidenreich, Bellal oder Die Stille, Die fünfte Kammer)

(154)

„Hast du auch deinen Sohn gesprochen?"

„Ich habe ihn gesehen in einem Café. Er hat mich gesehen, aber er tat, als sei ich Luft. Er saß mit seinen Freunden zusammen. Der Abschaum von Posen."

„Es sind junge Leute", warf Willenbrock ein.

„Gangster sind es", bemerkte Jurek.

„Damals haben wir auch Räuber und Gendarm gespielt. *Das sind Kindereien*, das gibt sich."

„Diese Kinder spielen nicht Räuber, es sind Räuber. Die haben Pistolen, richtige Pistolen. [...]"

(Christoph Hein, Willenbrock, 19.Kapitel)

(155)

[...] Im linksliberalen *New Statesman & Society* (23.2.1991) schreibt Stephen Howe: *„Ist denn nicht die ganze Region eine kulturelle Wüste, sind nicht ihre kreativsten Geister ins Exil, in die Speichelleckerei oder ins Schweigen getrieben worden?* Ist die Diktatur nicht fast allgegenwärtig, und beruht die Massenopposition nicht statt auf demokratischen Werten auf religiösem Archaismus, ethnischer Ausschließung und Rachephantasien? Legt nicht all das Herumreiten auf vergangener Größe... nur die Tatsache offen, daß es seit Jahrhunderten bergab geht? Und ist Saddams Irak das Ergebnis einer spezifisch irakischen Misere oder nur der symptomatische Tiefpunkt einer umfassenden arabischen Pathologie?“

(Siegfried Kohlhammer, Die Feinde und die Freunde des Islam,
1.Kapitel, Der real existierende Islam)

(156)

[...] Aller Sex schien bei ihr in Herzenswärme gewandelt. Das Air – wie man früher korrekt sagte, nicht das Flair, das ja Witterung, Spürsinn bedeutet, und nicht die Ausdruckshülle, die jemanden umgibt – ihr Air also war frei von Infamie, Mißmut, Mißgunst, Hast, Käuflichkeit, Eifersucht, Ehrsucht, Rücksichtslosigkeit, Meskinität, Verkrampfung, Verschlagenheit. Frei von allen Stimmungs- und Charakterschwankungen einer aus der Verankerung gerissenen großen Begierde, die sich dann schnell in Gier, Unruhe, Habenwollen ausspaltet. *Die in Lüge, Selbstniedrigung, Doppelspiel, Abschätzigkeit, Opportunismus, Schadenfreude, Unzuverlässigkeit und frivole Kumpanei auseinanderfällt* und eine im Kern beschädigte, überfremdete, vorteilssüchtige, stets zweckgerichtete Wollust zurückläßt. [...]

(Botho Strauss, Die Nacht mit Alice, als Julia ums Haus schlich)

(157)

[...] Aber der Schlosser aus Fünfhaus wünscht sich nichts so sehr wie den neuen Wandverbau für sich und seine Verlobte, *in dem man die Sauereien*

seines Privatlebens verbergen kann. Man kann Bücher, eine Stereoanlage samt Platten und Boxen, den Fernseher, das Radio, die Schmetterlingssammlung, das Aquarium, die Hobbygeräte und Diverses und Diverses und Diverses, dem Auge des Betrachters entzogen, gut und sicher aufbewahren. Der Besucher erblickt nur den dunkel gebeizten Palisanderverhau, das Durcheinander dahinter sieht er nicht. [...]

(Elfriede Jelinek, Die Klavierspielerin, II)

［…］しかしヒュンフハウスから来た錠前工は、自分のフィアンセのために、新しい遮断壁を欲しいと思う以外あまり望んでいるものはない。その壁には私的生活の乱雑なものを隠しておける。この壁があれば、本類、レコードやボックスを含むステレオ装置、テレビ、ラジオ、蝶々のコレクション、水中動物飼育用の水槽、ホビー機器、雑貨につぐ雑貨、などなどが観察者の目を逃れられるし、しっかりと安全に保管しておける。訪問者には黒みがかった着色をほどこした紫檀の遮断壁しか目に留まらず、その後ろのめちゃくちゃな様子は見えない。［…］

（エルフリーデ・イェリネック、ピアニスト、II、中込啓子訳）

Aber der Schlosser aus Fünfhaus wünscht sich nichts so sehr wie den neuen Wandverbau für sich und seine Verlobte... の中込訳「しかしヒュンフハウスから来た錠前工は、自分のフィアンセのために、新しい遮断壁を欲しいと思う以外あまり望んでいるものはない」はまったくの誤訳、Fünfhaus を「ヒュンフハウス」と表記するのも解せないが、wünscht sich nichts so sehr wie den neuen Wandverbau für sich und seine Verlobte...は「自分のフィアンセのために、新しい遮断壁を欲しいと思う以外あまり望んでいるものはない」ではなく、「自分とフィアンセのためにいちばん望んでいるのが新しい遮断壁である」と訳すべきであろう。また肝心の in dem man die Sauereien seines Privatlebens verbergen kann も「その壁には私的生活の乱雑なものを隠しておける」ではなく、「彼の私生活の（他人に見られては困るような）雑多な恥ずかしい品々をその中に隠しておける新しい遮断壁」を意味しているものと思われる。der Schlosser aus Fünfhaus も「フュンフハウスから来

た錠前工」ではなく、「フュンフハウスに住んでいる錠前工」と解すべきだろう。ついでに言えば、書名のDie Klavierspielerin は、正確には「女流ピアニスト」である。

(158)

Er drehte das Radio an. Die saubere Sprechweise der Deutschen flößte ihm Respekt ein. Die präziseste Sprache der Welt. Jánoskas Vater pflegte sie mit dem größten Vergnügen zu radebrechen und dies damit zu begründen, dass das seine persönliche Rache für den zweiten Weltkrieg sei. Um dann noch hinzuzufügen: „Die verdammten Nazis." „Was hast du mit denen für ein Problem?" *„Dass sie während ihrer Hitlerei so viele Menschen umgebracht haben."* „Und was ist mit den Russen? *Die haben während ihrer Stalinerei auch viele Menschen umgebracht!*" [...]

(Miklós Vámos, Meine zehn Frauen, 2.Kapitel)

(159)

Die Konferenz schleppte sich *in der üblichen Melange aus Langeweile, Wichtigtuerei und geheuchelter Geschäftigkeit* durch den Nachmitag. Die Geschäfte liefen gut, die Vorbestellungen besser als erwartet, die Präsentation der von mir betreuten Titel und Projekte reine Routine, alles im grünen Bereich, grün wie die Krone der Kastanie im Fenster, deren Blätter sich an den Rändern aber schon gelb und braun färbten, verschrumpelten, während die stacheligen Früchte praller und praller wurden und bald fallen würden. Dann war Feierabend.

(Klaus Modick, September Song, VIII)

(160)

[...] Meine Geigenstunde zweimal in der Woche war mir immer verhaßt, ich hatte kein Talent, und besonders verabscheute ich das Fingernägelschneiden, kurz bevor Fräulein Botchek kam. Noch heute fühle ich dieses ekelhafte dumpfe Gefühl in den Fingerspitzen auf den Saiten, nein, ich kann nicht

behaupten, daß ich mich jemals auf Fräulein Botchek gefreut hätte, aber Schnaps rannte schon Stunden vorher aufgeregt im Kreis herum, und wenn sie endlich da war, verging eine halbe Stunde mit seinen Kunststücken, bevor Fräulein Botchek beginnen konnte, mich mit ihren Etüden zu quälen. – *Ich hoffte anfangs, ihre Spielereien mit Schnaps würden meine Folterstunde mit der Geige verkürzen*, aber da hatte ich mich verrechnet. Mein Vater bezahlte Fräulein Botchek für die Zeit, die sie mit Schnaps verbrachte, extra. [...]

(Doris Dörrie, Die Schickse)

「[…］ところでヴァイオリンのレッスンは週二回だったんだけど、これがいつも厭(いや)でしょうがなかった。もともと才能なかったし、だいいち、先生が来る直前に爪を切っておくなんて、今でもぞっとするね、指先を弦に当てたときの感じを思い出すと。ボチェック先生を楽しみに待ったおぼえなど、こっちは一度もない。ところがシュナップスときたら、何時間も前から興奮してぐるぐる駆けまわり、ようやく現れたと見るや、次から次へと芸をしてみせるわけ。おかげで先生、わたしをレッスンで苦しめだすまでに三十分はかかった。― わたしとしてはてっきり、そのぶん苦行の時間が縮まるものとの期待してたのに、父がよぶんに謝礼を払ったのよ……」

（ドーリス・デリエ、尻軽おんな、西川賢一訳）

(161)

„Und wer da sitzt!“, sagte ich. Ich wies auf einen bekannten Filmproduzenten, den ich von einer Party bei Bekannten her flüchtig kannte. Er saß allein am Tisch und hieb auf seinen Teller ein, als befücchte er, der würde gleich abserviert.

„Ja“, sagte sie.

„Er war sicher der Erste“, sagte ich. „Zur Strafe muss er allein essen. Das hat etwas Armseliges, nicht? Es gibt eine Hohnrede von Juvenal auf den einsamen Völler: ‚Kein Tischgenosse ist zu sehen. Wer möchte auch ertragen derlei schmutziges Schwelgen?’ Passen, nicht wahr?“

„Ja“, sagte sie und wandte sich abrupt ab. Hatte sie einen Bekannten

getroffen? Allmählich wurde mir durch den Wein neblig zumute. „Was soll dein blödes Bildungsgehubere!“, dachte ich. „*Diese Juvenalzitiererei,* albern. Du hast zuviel getrunken.“ [...]

(Axel Hacke, Das Beste aus meinem Leben, Mein Alltag als Mann, Warum ich Büffets nicht mag)

Juvenal は古代ローマの諷刺詩人ユウェナリウス、見知らぬ女性を相手に古代ローマの詩を引用したりして自分の教養をひけらかしたことへの自己嫌悪が、Juvenalzitiererei という pejorativ な即席造語となったのだろう。

(162)

[...] Das Zimmer stank. Es stank ganz widerlich. Ich konnte mir erst nicht erklären, woher das kam, aber dann sah ich, was unter Dietrichs Schuhsohlen klebte.

„Gottverdammt“, schrie ich, „das ist ja wohl das Letzte.“

„Was? Was ist?“

Er schlug die Augen auf und sah mich verwirrt an.

„Verdammte Sauerei“, schrie ich. „Das halt ich nicht länger aus!“

„Was denn? Was denn?“ Dietrich kam allmählich zu sich und sah mich besorgt an.

„Hundescheiße“, schrie ich. „Du hast Hundescheiße an deinen Schuhen.“

„Oh. Ja? Oh, tatsächlich.“

„Mensch, pass auf! Pass doch auf, du schmierst es ins Bett.“

(Karen Duve, Taxi, 1.Teil 1984-1986, 24)

ベッドのなかに犬の糞をもち込まれては、これこそ Sauerei の最たるものだろう。

(163)

[...] Er haßte es zu spät zu kommen, er haßte es mehr als schwarzfahren, und er haßte es auch mehr, als wenn andere Leute zu spät kamen, was ihm

eigentlich überhaupt nichts ausmachte, Hauptsache, er selbst war pünktlich, und das war er immer. So hatte er also die U-Bahn sofort nehmen müssen, obwohl er eigentlich früh dran gewesen war, genaugenommen sogar zu früh, denn er hatte den Görlitzer Bahnhof um kurz vor zehn erreicht, und mit seinen Eltern war er um elf Uhr verabredet, das war jede Menge Zeit, um an den Kudamm zu kommen, selbst mit der Linie 1, die seiner Meinung nach eine erbärmliche Bimmelbahn war, unerträglich langsam und vollgestopft mit Psychopathen und Schizos, die ihm, gerade heute, ausgerechnet auf dem Weg an den Kudamm und ausgerechnet, wenn er einen Kater hatte, unangenehm und auf die Pelle krochen. *Die Schwarzfahrerei machte ihn dabei sehr nervös*, er hatte sich geschworen, sich nie, nie wieder von der BVG demütigen zu lassen, jenen Männern mit den schlechtsitzenden Uniformen und dem Hang zu unerträglichem Geschwätz, die immer wieder mal alle Bahnhofsausgänge blockierten oder sich durch vollgestopfte, schneckenhaft dahinschleichende U-Bahnen drängelten, um die Fahrscheine zu kontrollieren, und wenn er nicht die ebenso geschwätzigen, BZ-lesenden und unerträglich verpeilt fahrenden Taxifahrer noch mehr verabscheut hätte, dann hätte es ihm nichts ausgemacht, sich von dem ganzen BVG-Elend mit einer Taxifahrt freizukaufen.

(Sven Regener, Herr Lehmann, 10.Kapitel Kudamm)

(164)

[...] und sie sei eine liebliche Person mit zarten Händen. *Händ', viel zu schön für die Hebammerei*. Das habe ihr der Feldwaibel Zenker bei seiner k.k. Soldatenehre geschworen, jawohl. [...]

(Robert Schneider, Schlafes Bruder, Die Geburt)

Hebammerei は Hebamme（助産婦）からの即席造語、Händ', viel zu schön für die Hebammerei は「助産婦のような仕事をするには美しすぎる手」ということである。

(165)

„So ein Schwein“, rief die Frau plötzlich derart laut, als sollte es das ganze Haus hören. „So eine Schweinebande!“

Ich wollte erwidern, dass schließlich jeder einmal stolpern könne und dies Missgeschick kein Grund sei, mich zu beschimpfen und obendrein meine Mutter zu beleidigen. Sie, ja, sie beide, sollten sich nicht so etepetete haben. So wie es hier aussehe, *diese Schmierereien überall*, und der Gestank, na, schönen Dank auch, hier wollte ich nicht einen Tag hausen. Stattdessen entfuhr mir ein wirklich ekelhafter Rülpser.

„Schwein!“, rief der Mann.

„Fresse!“, zischte ich.

„Schwein!“

„Fresse!“

(Ingo Schulze, Handy, I, Schriftsteller und Transzendenz)

(166)

Es hat sich damals wie ein Lauffeuer herumgesprochen, dass der Zauner gestanden hat, aber auch ohne sein Geständnis wies alles von Anfang an auf ihn hin. *Es waren ja nicht nur die andauernden Streitereien*, sein seltsames Verhalten – er hatte Kratzverletzungen an den Armen, die er uns nicht erklären konnte, der Hausarzt hat das damals festgestellt. Ob er noch mal von einem Amtsarzt untersucht wurde, kann ich nicht sagen. Wir haben es uns wirklich nicht leichtgemacht, am Ende blieb einfach nur er als möglicher Täter übrig.

(Andrea Maria Schenkel, Finsterau, Aus der Aussage des mittlerweile pensionierten Polizisten Hermann Irgang, 18 Jahre nach den Ereignissen)

(167)

Mir tropfte ein Stück Eis auf den Busen. *Ich griff nach einem Papiertaschentuch und versuchte, die Schweinerei wegzureiben*, mit dem Resultat, dass es jetzt aussah, als hätte ich gerade ein Kind gestillt und die Milch hätte

geflockt.

(Martina Brandl, Halbnackte Bauarbeiter, Spätfolgen)

(168)

Ernst übel auch unser Boss. Ganz unkalt und heftig schlimm, aber nicht auf die kleine Art. Ich glaube, daß er mir vertraut, aber man weiß nicht bei ihm: Ständig denkt er über uns nach und listet Pläne, die keiner überzieht. Mir ja ganz fremd, das Power Play, mir gehts um die Gesamtsache *und die Gesellschaft und all die Schweinereien, die täglich, ihr wißt ja*. Ist doch obvious, daß wer in der Zeitung schreibt, schon gekauft, und über wen geschrieben wird, mit drin. Eine riesen*(sic)* Konspiration, alle mit allen unter
Decke, machen Geld wie Irrsinn, und wir Anständigen gucken zu. Ich sag nur Beispiel: Funksprüche von 9/II, lest das mal nach im Netz, dann wundert euch gar nichts mehr!

(Daniel Kehlmann, Ruhm, Ein Beitrag zur Debatte)

ボスもマジで不快な男。ぜんぜんクールじゃなくて、性格が悪い。それも最悪に。僕のことは信頼してると思うけど、向こうを信じていいかどうかは不明。やつはいつも僕たちのことをじっくりと考えてて、誰もついていけない計画を練ってる。パワー・プレイなんて僕とはまったく関係がない。大切なのはもっと全体的な問題、社会、毎日起こっている不正とかだ。君たちだってわかるだろう。新聞記事を書くやつらがすでに買収されていて、書かれた対象も同じだってことは明白。巨大な陰謀が進行中だ。誰もが裏でつながっていて、ものすごい額の金を生み出してる。僕たちみたいなまともな人間は傍観するのみ。たとえば九・一一の無線交信。あれをネットで読んでみれば、もう何に対しても驚かなくなるさ！

（ダニエル・ケールマン、名声、
第七章 掲示板への書き込み、瀬川裕司訳）

Ruhm は、2005 年刊行の Die Vermessung der Welt（邦訳「世界の測量」）によって一躍世界的にも名を知られるようになった Daniel Kehlmann の最

新作だが、ernst übel に始まるこのドイツ語、正直なところ、筆者にとっては「これ何？」と言いたくなるようなちんぷんかんぷんなドイツ語だ。ところがドゥッペル・高山さんに言わせると、Aber ich vermute, dass der Sprecher einer der typischen jungen Angestellten ist — die reden wirklich so! Es ist also keine Jugendsprache, sondern Originalton einer bestimmten Gruppe von “Karrieristen”. というのだから驚く。こうなると筆者などはまったくのお手上げだが、瀬川裕司氏の訳がまたすばらしい。冒頭部分の Ernst übel auch unser Boss. Ganz unkalt und heftig schlimm, aber nicht auf die kleine Art. Ich glaube, daß er mir vertraut, aber man weiß nicht bei ihm: Ständig denkt er über uns nach und listet Pläne, die keiner überzieht. が「ボスもマジで不快な男。ぜんぜんクールじゃなくて、性格が悪い。それも最悪に。僕のことは信頼してると思うけど、向こうを信じていいかどうかは不明。やつはいつも僕たちのことをじっくりと考えてて、誰もついていけない計画を練ってる」と訳されている。見事なものだ。

(169)

[...] Sein Laden, das war das Erdgeschoss eines sehr kleinen, sandroten Hauses genau an der Ecke der Straße, in der Jimmy wohnte, und der sechsten Avenue. Mit einer gelben Markise über dem Eingang, auf der in großen Blockbuchstaben zu lesen stand: *„Bill's Bags and Suitcases, Industries“*. Bill hatte sich also an einer bestimmten Weggabelung in seinem Leben entschieden, auf Koffer und Taschen zu setzen. Vielleicht hatte sein Freund Tom einmal bei einem Abendessen zu ihm gesagt: „Lass dich doch von diesen ganzen Ärschen gernhaben. *Du mit deiner ewigen Plackerei!* Ich sag dir, Koffer sind die Lösung! Das wird ein Renner.“ Oder vielleicht hatte der Laden schon seinem Schwiegervater gehört. Und der hatte ihn mit vehementer Unterstützung seiner Tochter angefleht, den Laden zu übernehmen.[...]

(Benjamin Lebert, Flug der Pelikane)

V　おわりに

紙数を大幅に超過してしまったので、ごく簡単に記(しる)しておくが、接尾辞

– ei / –[e]rei による造語はかならずしも pejorativ とばかりはかぎらない。たとえばBäckerei（パン屋）、Bücherei（図書室）、Druckerei（印刷業）、Fischerei（漁業）、Grabsteinmetzerei（墓石販売業）、Konditorei（喫茶店）、Metzgerei（肉屋）、Schlachterei（屠殺業）、Schuhmacherei（製靴業）、Schweinezüchterei（養豚業）、Tischlerei（指物業）等々、種々雑多な仕事の業種もこの接尾辞によって示されているし、allerlei, einerlei, zweierlei, dreierlei など、接尾辞 -lei が数詞と結合するものもある。これらがpejorativ でないことは、言うまでもないだろう。

（出典著者一覧表）

Abschatz, Hans Aßmann von (1646-99)
Anzengruber, Ludwig (1839–1889)
Bachmann, Ingeborg (1926-73)
Baumgart, Reinhard (1929-2003)
Benjamin, Walter (1892-1940)
Benn, Gottfried (1886-1956)
Bettauer, Hugo (1878-1925)
Bloch, Hermann (1886-1951)
Böll, Heinrich (1917-85)
Börne, Ludwig (1786-1837)
Brandl, Martina (1966-)
Brecht, Bertolt (1898-1956)
Büchner, Georg (1813-37)
Carossa, Hans (1878-1956)
Chamisso, Adelbert von (1781-1838)
Celan, Paul (1920-70)
Clausewitz, Carl Philipp Gottfried von (1780-1831)
Dilthey, Wilhelm (1833-1911)
Döblin, Alfred (1878-1957)
Doderer, Heimito von (1896-1966)
Dörrie, Doris (1955-)
Dürrenmatt, Friedrich (1921-90)
Duve, Karen (1961-)
Eichendorff, Joseph von (1788-1857)
Ende, Michael (1929-95)
Engels, Friedrich (1820-95)
Enzensberger, Hans Magnus (1929-)
Fallada, Hans (1893-1947)
Feuchtwanger, Lion (1884-1958)
Fichte, Hubert (1935-86)
Fischart, Johann (1546 oder 1547-1591)
Fontane, Theodor (1819-98)
Fouqué, Friedrich Baron de la Motte (1777-1843)
Frank, Leonhard (1882-1961)
Frisch, Max (1911-91)
Gaiser, Gerd (1908-76)

Glaeser, Ernst (1902-63)
Goes, Albrecht (1908-)
Goethe, Johann Wolfgang von (1749-1832)
Gottsched, Johann Christoph (1700-66)
Grass, Günter (1927-)
Grimm, Jacob (1785-1863)
Grimm, Wilhelm (1786-1859)
Habermas, Jürgen (1929-)
Hacke, Axel (1956-)
Hagelstange, Rudolf (1912-84)
Handke, Peter (1942-)
Hardenberg, Friedrich Freiherr von (1772-1801)
Hartlaub, Felix (1913-45)
Hartlaub, Geno (1915-2007)
Hartung, Hugo (1902-72)
Hauptmann, Gerhart (1862-1946)
Hausmann, Manfred (1898-1986)
Hebbel, Friedrich (1813-63)
Heidenreich, Elke (1943-)
Heidenreich, Gert (1944-)
Hein, Christoph (1944-)
Heine, Heinrich (1797-1856)
Heinrich, Willi (1920-2005)
Herder, Johann Gottfried (1744-1803)
Hesse, Hermann (1877-1962)
Heuss, Theodor (1884-1963)
Hoffmann [von Fallersleben], August Heinrich (1798-1874)
Hoffmann, Ernst Theodor Amadeus (1776-1822)
Hofmannsthal, Hugo von (1874-1929)
Horváth, Ödön von (1901-38)
Huch, Ricarda (1864-1947)
Jahnn, Hans Henny (1894-1959)
Jelinek, Elfriede (1946-)
Jens, Walter (1923-)
Johnson, Uwe (1934-84)
Jokostra, Peter (1912-2007)
Jünger, Ernst (1895-1998)
Jünger, Friedrich Georg (1898-1977)
Kafka, Franz (1883-1924)
Kant, Hermann (1926-)
Kant, Immanuel (1724-1804)
Kasack, Hermann (1896-1966)
Kaschnitz, Marie Luise (1901-74)
Kästner, Erhart (1904-74)
Kästner, Erich (1899-1974)
Kehlmann, Daniel (1975-)
Keller, Gottfried (1819-90)
Kempowski, Walter (1929-)
Kesten, Hermann (1900-96)
Kleist, Heinrich von (1777-1811)
Klepper, Jochen (1903-42)
Kluge, Alexander (1932-)
Koeppen, Wolfgang (1906-96)
Kohlhammer, Siegfried (1944-)
Kolb, Annette (1870-1967)
Korn, Karl (1908-91)
Kraus, Carl (1874-1936)

Lebert, Benjamin (1982-)
Ledig, Gert (1921-99)
Lenz, Jakob Michael Reinhold (1751-92)
Lessing, Gotthold Ephraim (1729-81)
Lichtenberg, Georg Christoph (1742-99)
Mann, Klaus (1906-49)
Mann, Thomas (1875-1955)
Marx, Karl (1818-83)
May, Karl (1842-1912)
Mayer, Hans (1907-2001)
Meichsner, Dieter (1928-)
Meyer, Conrad Ferdinand (1825-98)
Modick, Klaus (1951-)
Mörike, Eduard (1804-75)
Moritz, Karl Philipp (1757-93)
Müller, Wilhelm (1794-1827)
Musil, Robert (1880-1942)
Nestroy, Johann Nepomuk (1801-62)
Nietzsche, Friedrich (1844-1900)
Nossack, Hans Erich (1901-77)
Novalis → Hardenberg
Paul, Jean (1763-1825)
Plenzdorf, Ulrich (1934-)
Raabe, Wilhelm (1831-1910)
Raddatz, Fritz Joachim (1931-)
Raimund, Ferdinand (1790-1836)
Regener, Sven (1961-)
Reich-Ranicki, Marcel (1920-)
Reimann, Brigitte (1933-73)
Remarque, Erich Maria (1898-1970)
Reventlow, Franziska Gräfin zu (1871-1918)
Rilke, Rainer Maria (1875-1926)
Rinser, Luise (1911-2002)
Sacher-Masoch, Leopold Ritter von (1836-95)
Schenkel, Andrea Maria (1962-)
Schiller, Friedrich (1759-1805)
Schlaffer, Heinz (1939-)
Schlegel, Friedrich (1772-1829)
Schmidt, Helmut (1918-)
Schneider, Robert (1961-)
Schnell, Ralf (1943-)
Schnitzler, Arthur (1862-1931)
Schulze, Ingo (1962-)
Silesius, Angelus (1624-77)
Simmel, Johannes Mario (1924-)
Stifter, Adalbert (1805-68)
Storm, Theodor (1817-88)
Strauss, Botho (1944-)
Sudermann, Hermann (1857-1928)
Suttner, Bertha von (1843-1914)
Thoma, Ludwig (1867-1921)
Tieck, Ludwig (1773-1821)
Toller, Ernst (1893-1939)
Tucholsky, Kurt (1890-1935)
Vámos, Miklós (1950-)
Vring, Georg von der (1889-1968)
Wackenroder, Wilhelm Heinrich (1773-98)

Wagner, Heinrich Leopold (1747-79)
Walser, Martin (1927-)
Weber, Max (1864-1920)
Wedekind, Frank (1864-1918)
Weizsäcker, Richard von (1920-)
Wickert, Ulrich (1942-)
Wieland, Christoph Martin (1733-1813)
Willkomm, Ernst (1810-86)
Winckelmann, Johann Joachim (1717-68)
Wolf, Christa (1929-)
Zuckmayer, Carl (1896-1977)
Zweig, Arnold (1887-1968)
Zweig, Stefan (1881-1942)